
飛竜になりました！

雷帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛竜になりました！

【Zコード】

N1692U

【作者名】

雷帝

【あらすじ】

ある日死んでしまった彼は、神様に孫が生まれた祝いだと転生の機会をもらつた

色んな世界の中から、モンスターハンター風世界を選んだ彼は神様にチートな能力を貰い転生した、はずだったが、次に目が覚めた時彼の姿はリオレウスになつていた！

自分はハンターになりたかったのであって、モンスターになりたかつた訳じゃねえ！と思つても後の祭り

チートで最強なりオレウスとしてモンスターハンターの世界を生きる

「……まあ、これはこれでいい感じじゃね？」

感想で希望がありましたので、これからでも投稿いたします
理想郷（A r a c a d i a）にも同タイトルで連載中です
作者名は異なりますが、同一作者による作品ですので、よろしくお
願いします

どうじてこうなった。

水面を見る度に俺はそう思つ。

今、水面には凶悪な形相が映つてゐる。

水面を見る度に、俺はある瞬間の事を思い出す。

「お主、転生してみんか」

死んだ直後に、気付いたらそんな事を言われていた。
自分が死んだ事は覚えている。

信号を待つてたら、スピード出しすぎの車が向ひから走つてきた。

若い奴が片手運転をしていて、危ないな、と思つていたら、猛スピードのまま変わりかけの信号を曲がろうとして見事にスピンして交差点に突っ込んだ。

結果として、俺は車にぶつかられて、そのまんま猛速度を維持してまま背後のビルとサンドイッチになつた。即死出来てりや楽だつたのに、しばらく意識が残つてたせいで酷く辛かつた。

まあ、間もなく意識がブラックアウトした訳だが、あれで生きてたらそれこそ奇跡が山盛りで必要だろう。

「はあ、転生ですか」

だから、死んだのは納得出来るが……こんな展開は予想してなかつた。

まあ、死んだ後どうなるか、なんて誰も知つてる奴はいないんだ。こんなのがあつてもいいのかもしない。

「そりじゃ。実はお主が死んだのがちょうどわしの孫が生まれたのと重なったのじゃ」

……なんだって？

話を聞けば、この爺さんは一応神様に分類される存在らしい。神様に子供とか孫とか生まれるのか？ってのはとりあえず置いておいてだ。爺さんが言うにはジャストで死んだ奴に転生の機会を、生まれた奴に祝福を与える事にしたらしい。要是ご祝儀みたいなもんだ、とか言つてた。……生まれた奴羨ましい。

まあ、仕方ない。

とりあえず話を聞けば、俺は記憶を持つて生まれる事が出来るらしい。

「とはいえ、もうろん条件はある」

まず生まれる世界は元の世界とは異なる世界である事。

同じ魂をそのまま同じ世界に送り込むと、歪みが生じる云々とか言ってたが、まあ、要はどうにもならないって事だ。

何か希望はないか。

そう言いつつ、爺さんが自分が管理しているという世界のリストを見せてくれた。

俺の世界に似たような漫画とかがあれば、その世界にも行けるとか言つてくれた。

が、だ。

殆どろくなもんがなかつた。

世紀末世界だと、絶滅戦争勃発中だと、異界からの侵入者と絶望的な戦争中だとそんなんばかり。

「……平和な世界つてないんですか」

「ないのう。わしゃ基本が争い」と曰ひうとつた神じゃし

だから、戦争とか争いとか闘いが多い世界が管理に入つてゐるらしい。

あの元の世界も多い部類なのか。

そんな中、どうかないか、と探してたら、一つ知つた名前があつた。『モンスターハンターに似た世界』。

「……これどんな世界なんですか？」

聞いてみれば、モンスターハンターによく似た世界らしい。

ただ、少し違うのはハンター達の中でもあんなゲームみたいにモンスターを狩れる奴は「」一部らしい。

……そりやそうか。

幾ら身体能力が高くても、運が悪かったなんて事はあるだろうし。そもそも、モンスターもゲームみたいにぼこぼこ出でこないといふのがでかいらしいが……。

そりやそうか。

ゲームなら古龍だろうが、クエストが一度出でくれば何回でも、それこそ何十回でも狩れるが、本来希少な古龍種だ。現実にはそんなにほいほい出でこない。

当然、討伐経験も限られるから、如何に強いハンターといえど、実際に飛竜以上の種を狩つた者は限られる、という事らしい。

反面、飛竜を一度倒せば、その広大な縄張りの領域に人が新たに空白となつた領域に飛竜が訪れるまでに街を作れるという利点もあるらしいんだが……。

「して、何か希望はあるかの？」

何でもかんでもという訳にはいかないが、一つや二つなら構わない、といふ事でとりあえず言つだけは言つてみる事にした。

「……とりあえず強い体が欲しいですね。見た目は普通で筋肉むつきむきとかじゃないけど、誰にも負けないぐらい強い、そんな感じの。出来れば格好いいと尚更」

これはモンスター・ハンター世界に行くとこうなら当然の話だ。だってそうだろう？折角モンスター・ハンターの世界に行くんだ！ハンターやつてみたいじゃないか。

でも、そうなると飛竜とかにも対抗可能な体が必要な訳で……でも、むつきむきの筋肉達磨じやなんかなあ……って気がするし。

あと、運があればより嬉しい、って事で付け加えてみた。

だってさあ、駆け出しの時に古龍に運悪く出くわしました、じゃたまらんぢろ？爺さんは快く〇〇してくれて、そうして俺は転生した……。

……ああ、確かに強い体に転生してくれたさー！

けどな……人じやないなんて誰が想像したよ！？

おぎやーと生まれてみて、初めて見た顔がこつい竜の顔だった俺の驚愕を考えて欲しい。

びっくりしながらそれでも襲う様子はなく、むしろ愛情を注いでくれているのが分かつたから、少しづつ落ち着いた。

そうして周囲を見てみると……蒼色の鱗の竜と、緑の鱗の竜が一匹ずつ。

瞬間分かった。……空の王リオレウス（亞種）と陸の女王リオレイアだと。

そして、改めて俺の体を見てみると、赤い体……そう、俺はリオレウスに転生していたのだ。

その後は簡単に述べよつ。

爺さんに頼んだ通り運は良く、といふべきか、いや、単純にこの辺はまだ人が立ち入ってなかつたのだろう。それもまた運つて事はおいといて、弟妹も無事に生まれ、育ち……。

やがて、リオレウス2匹とリオレイア+リオレイア希少種の子供達は巣立ちした。

今、彼らがどうしているかって？それは各自がそれぞれに親の縄張りから離れたから分からないな……。まあ、どつかで会えれば、その時は分かると思うが。

さて、俺はリオレウスに生まれた。だが、強さは確かに破格だった。

見た目は普通のリオレウスだ。

だが……中身は魔改造リオレウスだった。

パワーも、耐性も強靭さも、そしてゲームでいう所の特殊能力も全てが規格外だった。

咆哮一つにしてもティガレックスの咆哮を超え、風圧は龍風圧に匹敵。ブレスはラージヤンのビームを真っ向からの撃ち合いで粉碎して、相手を吹き飛ばす、といえばその度合いが分かるだろうか。

何で分かるかって？そりゃあ、運良く体感出来たからだ……この場合、古龍にまで出くわしたのは運悪くといふべきなんだろ？が？ま、空飛んでれば、行動範囲は広いから可能性はない訳じゃないだろうが……。

ちなみにゲームではライバルとされてたラギアクルスとバトルした時には、あつさり勝利して獲物として持ち帰つたと言つておこつ。

……見た目とかからG級並だと思つたんだがなあ、こいつ。

そうして、俺はある穏やかな気候の場所に巣を作つた。ゲーム風に言えば、森丘に当たるんだろうか。もつとも、巣はゲームみたい

な簡単に人が入れる洞窟じゃなく、空高い絶壁に開いた裂け目奥に広がる洞窟だつたが……。

……人恋しさがなかつた訳じやないが、こんな姿で赴いた所で戦闘になるだけだろう。

それに竜としての本能、竜生にさすがに慣れていたのもあつたんだろうな……。いや、慣れないとけなかつたというべきか。

時折、侵入してくる奴もいた。

何しろ、獲物は豊富、水も豊富となれば無理もない。だが、その全てに勝利して、この地域に君臨し続け……偶には火山やら密林、砂漠といった他の地域に行つたりもしつつ、それなりの時、きっと何十年かが過ぎた頃。

人間がやつて來た。

1 (後書き)

理想郷にも投稿してる作品ですが、今回「ひがり」にも投稿といつか、
投下してみました
よろしければお楽しみ下さい

い

2 (前書き)

続けて投下！

ハンターの仕事とはただ、モンスターを狩るだけではない。
採取もそうだし、採掘もそうだ。

或いは護衛任務などもあるし、探索だつてある。

今回はその内の探索に当たる。

ゲームでも新しいフィールドが発見された、という時にギルドからの極秘依頼、という形で「危険があるだらうから」と腕利きのハンターに探索に赴いてもらう、というものがあるが、それは何も極秘なものだけではない。

開拓村の為の先行調査。
それが今回の依頼だった。

開拓村の為の先行調査をハンターが行うのは、危険が予想されるからだ。

何しろ、これまで人が本格的に住み着いた事のない場所だ。
そこが荒地ならば、水が確保出来るか。住んだとして、生活していくく目処は立ちそうか。

豊かな土地ならば、そういう心配はないが、そういう場所にはモンスターの数も多い。

可能ならば、その生息領域を確認すると共に、場合によつてはドス級モンスターを狩る必要もある。

最悪、飛竜クラスが生息しているのならば、討伐隊を繰り出さねばならない。

ハンター達にとつて出くわす事が多い大型モンスターは、各種のボス級モンスターだ。

所謂ドスランポスやドスジャギイ、或いはドドブランゴなど。
それらは群が一定の大きさを超えると、自然と生まれてくる。

反面、特に面倒なのが大型の飛竜種だ。

彼らの行動範囲は広い。

飛行能力を保持する為に、大型故に食料もたくさん必要とする為に、行動範囲すなわち縄張りも広くなるのだ。

何が面倒かといつて、最初の調査では田撃されなかつたからといって、そこが飛竜種のテリトリーではないと一回では断言出来ないからだ。

結果的に、幾度も調査を重ねる事で、田撃情報がないか探つていく事になる。

もつとも、実際には他の調査も含めるとどの道複数回の探査が行われるのだが……。

「……いい土地だな」

五人の集団からなるハンターの一人がそう呟いた。
確かに良い土地だつた。

穏やかに広がる草原にはアプトノスの大きな群が草を食んでいる。中央には大きめの川がゆつたりと流れ、海へとそそぐ。視界には雄大な山脈があり、その麓から森も広がっている。確かにここならば、水の確保も問題なく、耕作も可能。森の恵みや狩りも大丈夫だろう。

「だが、気になる事もある」

別のハンターがそう言った。
誰もが薄々理解していた。

これだけの豊かな地であるのに、ランポスなどの鳥竜種の数が限られている。

肉食の獣の存在は生態系には不可欠だ。

草食の獣だけでは、やがて草食動物も食べるものがなくなつて減

少に移る。

生態系が維持されているといつからには、そこには草食動物を捕食する肉食動物がいるはずなのに、ランボスなどにドス級がない。それが意味する所は……。

「いる、という事か？飛竜種が」

「ぐくり、と誰かの喉が鳴る音がした。
いや、或いは全員だつたのかもしれない。」

ここにいる誰もが飛竜種との戦闘も経験しているベテランハンタ一達だ。だが、それはこんな少數ではなく、もつと大規模な部隊の一員として、だ。

何も好き好んで危険を冒す事はない。

少しでも安全に狩りを行う為に、特に危険な飛竜ともなれば、ハンター達は部隊を組み、それでも生還出来ない者は必ずいた。

「せめて、イヤンクックとかなりいいんだが……」

「古龍だつたりしてな」

そんな軽口を叩いた時だつた。
空が翳つた。

「――――――――――――――

全員が見た。

空を舞う赤い鱗の飛竜を。

アプトノスをその両脚で掴み、空を飛翔し、彼らの頭上を超えて、
悠然と山脈へと向つていく。

その姿こそ名高き空の王。

「……リオレウス」

誰かの咳きが彼らの間に静かに響いた。

2 (後書き)

とつあえず5まで一氣投下します
後は順次……

【SIDE：人間ズ】

「……空の王リオレウスか」

苦い顔で唸つた男達がいた。

開拓村（予定）の中心人物達だ。

「厄介だな」

深い溜息が漏れた。

飛竜種がいるといつても、即討伐には至らない。

理由は単純で、まず一つは純粹に危険な事。

一つは討伐資金がかかる事。

これは人数が大勢になる事や、装備にかかる金が多額になる為だ。

一つは飛竜が即人を襲うとは限らない事。

十分な獲物がいるならば、飛竜はそちらを狙う。

言い方は悪いが、人は大型の飛竜のご飯には小さすぎるのだ。

無論、逆に言えば一般人が襲われたりしたら、まず助からないと思つてもいいのだが……一人やそこらならば、これまた言うのは何だが予想の範囲内だ。

開拓とは厳しい。

村となるまでに、全く犠牲が出ず終わる事は滅多にない。

貴重な鉱石が取れる事から設けられた雪山の小さな開拓村を襲つた悲劇で有名なものでは、冬、飢えたモンスターが襲撃を繰り返し、次々と村人が犠牲となつていき、やむなく村を後に脱出した者達も街へと辿り着く過程で襲撃を受けたり、力尽きて倒れたりして、街へと辿り着いたのはたつた一人の樵だった、という話がある。

まあ、今回之地は冬とてそう寒くならない場所だから、そこまで

酷い事にはならないとは思つ。
だが……。

それでも、飛竜が空を舞う地で安心して暮らせ、といつのは酷な
話だ。

「……領主に話はしてみるか」

【SIDE：転生者】

俺は気持ちよく空を飛んでいた。
やっぱり住み慣れた場所はいい。

今日のご飯はイヤンクック。

迂闊に俺の縄張りに入り込んだ所を狩つた。

……動物化してる、なんて言わないでくれ。

長い事竜生活なんてやってると、人と話す事さえない状態が続いてる、どうしてもそうなってしまうんだ……。

もう、俺が人だった頃の生活なんて殆ど覚えてない。

何しろ、一人暮らしになつてからは必死だった。

それまでみたいに巣で待つてれば食い物がやつて来る、なんて状況じゃない。

自分で狩りをする、人間風に言えば自分で稼がないといけないんだ。

家だつてない。

俺が独り立ちして、まず探したのは住みやすい場所だつた。

人間がほいほい来る所じや拙い。

幸い、まだこの世界じや人の領域は狭い。そして、俺には空を飛ぶ翼がある。

狩りをしながら、快適な場所を探してた。

そんな折、俺はこの地でアプトノスを狩った。それがこの地に住む事になる原因となる時はあの時は夢にも思わなかつた……。

（回想）

「小僧、誰に断つて、この土地で狩りなぞしている」

俺の目の前で唸つてゐるのは……こいつちょっとしてベルキュロス？

うん、左右の翼から尻尾みたいなのが出てるし……全身が帶電してるみたいな感じだから多分間違つてないと思ひ……。

つか、お前峡谷で生息してゐんじゃないのかよ？

そんな風に思つたが、確かにこんな場所に住んじゃいけない、つて訳でもないだろ？

考へてゐるせいで、苛立つたのだらつ。放電が強まつた。

「小僧……死にたいのか？」

果たして、こんな風に喋つてゐるのつて、人が聞いたりどう聞こえるんだろ？……。

「いや、まあ……狩りをしたのは腹減つたからだよ。悪かつた」

頭を下げたんだが……次の瞬間そのまま飛び退つた。

当然だろ？、下げる頭にいきなり翼から伸びる鉤爪を鞭みたいに振るつてきたからだ。

「何するんだ」

「ふん……避けたか」

獰猛に晒つてるよ、おい……。

というか、殺る気満々じゃね、こいつ？

ここで俺が取れる選択肢は……。

1、ひたすら謝る

無理、どう考えてもやつさん殺意で一杯だ。

さつきの俺の態度が怒らせちまつたみたいだ。止まりそうにない

……。

2、逃げる。

逃げ切れるか分からんのだよなあ……。

ベルキュロスの飛行速度と俺の飛行速度どっちが早いかなんて試

した事ないし。

似たり寄つたりの速度だと最悪だ。

後ろから好き放題プレスはきまくらになってしまつ。却下。

3、説得する

1に通じるな、却下。

4、戦う

……それしかないかな。

これまでもやむをえず戦う場面はあった。

でも、ある程度ダメージを与えたら立ち去つてきたんだ。

理由は、ある。

同じリオレウス、リオレイアだつたら同族つて事もあるし、なんか気が引けた。

特にリオレイアは雌だしなあ……。

火山、雪山、荒地なんかは住みにくそうだった。

まあ、その他色々あるんだが……。

「本気か？俺は古龍種にも勝つた事があるんだぞ？」

「……脅しか、ふざけた事を言つ奴だ」

やっぱ駄目か。本当なんだけど……。

しょうがない、殺るしかなさそうだ。

（回想終了）

結果は……まあ、俺がこの地で特に怪我もなく暮らしている事が
ら察してくれ。

……うん、圧勝だつた。

飛竜の中でも特に賢い、って言われる竜なだけはあつたし、それ
だけじゃなく、年経た竜だつたようだ。

でも、電撃すらまともに効かないんだな、俺の体……。

戦い方は巧妙だつた。

もし、俺が普通のリオレウスだつたら、圧勝してたのは奴だつた
だろ。

だけど、攻撃の全てがまともに効かない、じゃあさすがの奴もど
うにもならなかつた。

結局、勝利した俺は奴から「この地の新たな王はお前だ」と勝手
に告げられて……でも、奴から教えられた寝床とかの場所も理想の
ものだつたし、住みやすかつた。

結局、そのまんま俺はこの場所で暮らして、寝床も色々工夫して
今じゃ竜なりに大分暮らしやすくなつた。

こんな日々が何時までも続くと思ってたんだな、何時の間にか。
そんな時、だつたんだ。人に出会つたのは……。

3（後書き）

基本、人間はシリアル
チートリオレウスは危機感が薄いせいでのこかぼけたというかの
んびりスタイルです

【SIDE：転生者】

朝、洞窟で目を覚ます。

長い時間をかけて形成したねぐらだが、人間のそれのよつたベッドは、ない。

最初の頃は草や木を敷き詰めたベッドを作つてみたのだが……何しろ鱗が頑丈だ。防御能力が高い、という事はその分鱗が分厚かつたりする訳で、柔らかいベッドなんでもを感じるのは不可能だった。

ぶつちやけると、硬い岩の地面に寝ても大差なかつた。

それなら、安全に過ごせる場所で、土よりも岩肌。そんな場所があれば十分だ。

ぐぐつと体を伸ばし、翼を広げる。

骨なんかは転がつてない。

最初の頃は持ち帰つてたんだが……腐るんだよ、どうしても。肉も内臓も食つてしまつんだが、これが骨ごとバリバリ食えるような小型種ならともかく、アフトノスとかだと骨を残してしまつ。そうして、それに肉がこびりついて残つてたりすると……。

洞窟の奥で、外より暖かいのもこの辺は災いしている。

だから、最近は食事はもう少し下の方に専門の場所を作つてている。

のそのそと進み、外を見る。

おお、いい天気だ……。

それじゃ出かけるとしますかね。

翼を広げ、飛び立つた。

こうして飛び立つてみると、あのベルキュロスは矢張りベルキュロスらしく峡谷みたいな地形を好んでいたのが分かる。山岳地帯は確かにその下に峡谷を思わせる光景が広がっていたからだ。

あの草原はあくまで狩場だったのだろう。

確かにこの辺は獲物が限られるし、森は空から襲撃かけるには余り向いていないからな……。

少し飛べば海へも行ける。

もつとも、俺自身は海に行く事は余りない。

海洋生物なんて襲撃かけるのは難しいし、間違つてこの体で海に落ちたら後が物凄く面倒だ。貝とかなんて小さすぎて食った気がしないし……。

では何故行く事があるのか？それは草食動物が塩分の摂取に群で数日に一度は向うからだ。

まあ、海なら間違いなく塩があるからな……。

後はあれだ。繩張りの見回りだよ。

ラギアクルス、ダイミョウザザミなんてのが来る事がある。

精々、何年かに一度、ぐらいだけね。

さて、今日も狩りすっかあ……って？

草原の入り口付近に見慣れぬものを見つけた。

おいおい、あれはどう見ても……ハンターだよなあ？

何やら武器やら何やら揃えてるし、開拓とかそういう村作り、つて感じじゃない。

何狩りに来てるんだろ……ってまさか俺か！？

うーん、今は高空を飛んでるし、雲も薄雲じやあるが、それなりに今日はあるし……まだ見つかってはなさそうだけど……どうすつかなあ。

正直迷う。

俺だつても元は人間だ。好き好んで人間を襲撃、なんて考えない。いや、人間を食つて事に嫌悪感もあるし、人つてものの厄介さも分かる。

数増やしたり、罠仕掛けたり、本氣で狩る気なら何度でもやってきそう……ここがモンスターハンターの世界だつていうなら、凄腕

のハンターなんて居たらこっちが狩られかねないし……。

祖龍なんてのはまだ出会った事がないが、ゲームではそういうのや、巖竜ラヴィエンテみたいな超巨大なのも狩るのがハンターだ。いかに俺が魔改造リオレウスだとしても、狩られないって保証はない。

……でも、なあ。

ここに人が住もうってなら、俺を狩る動きは止まらないだろう。そうなると、縄張りに入り込んだモンスター同様の対応するしかないんだろうか……。

【SIDE：人間ズ】

現実には人間達の側にはそこまで何度も来れるような余裕はなかった。

これが少数で狩りに来るような、ゲームみたいな世界ならそれこそ何度も来るだろう。

でも、今来ているのはハンターの集団だ。

これだけの人数の食料や各個人の装備以外の重武装なんかは全部国が用意したものだ。

今回、これ程早く国が動いたのには訳があった。
ぶつちやけてしまえば、この地域は二つの国が領有を狙っていたのだ。

これまでも山師が山岳地帯に入つた事はあった。

その結果として、この地域は水資源が豊か、森の恵みも期待出来るし、農耕も問題なし。海も領域に入り、湾があるから漁も将来的には可能。山岳地帯からは鉱石の採掘が有望。

更にここに街道を通せば、複数の国との交易路も期待出来るという、国からは実に美味しい場所だった。

そんな地域が何故これまで手付かずだったかと言えば、単純に長

い時間をかけて、ここまで人間の領域が迫ってきた、というだけの事だ。

「いよいよ、か」

武器の手入れをしつつ、ハンターの一人が呟いた。

彼が持つのは巨大な大剣。

この大剣はダブルブロスソード。かつて彼の祖父が飛竜退治、デイアブロスと伝えられてる、を行つた際に手に入れた素材で作られたものだという逸品だ。

反面、彼自身の防具はゲネポスのそれを加工したものだ。こればかりは彼が飛竜と戦った事がないのだから仕方がない。

無論、鉱石を主体に作れるような武具は上質の物が揃えられている。

そういう面では武具よりも防具に不安がある、と言わざるをえないだろう。防具は動きやすさも重視される為に鉱石よりもモンスター素材が主体となるからだ。

「ああ、腕がなるぜ」

そう言いつつ別のハンターが応えた。

もつとも、誰も彼もが緊張を多かれ少なかれしている。

前衛と後衛のそれぞれのリーダーが打ち合わせをしているし、緊張が重なれば後衛が最悪、射線が重なった前衛を撃ちかねない。

人と飛竜。

彼らの間に、人の都合によつて戦端が開かれようとしていた。

4 (後書き)

とつあえず、あと一つ

5（前書き）

ひとつあえず5まで投下
残りも順次投下していく予定です

【SIDE・転生者】

結局俺は……ハンター達への攻撃を決めた。
無論、悩んだ。

だが、それ以外の選択肢を選ぶとして何が出来る、というのもあつた。

話し合い？

無理。

俺は何故か彼らの言葉が分かるが、あいつらは俺の言葉が理解出来ない。

言葉は分かるが、文字が書けないのでメッセージを伝える事も出来ない。

ベルキュロスの言葉が理解出来た事といい、ひょっとして一定以上の知能を持つ相手との意思疎通が可能なんじや、と淡い期待を持つ事もあつたが、あくまで意思疎通が可能なのは同じモンスター同士だつた。

おまけに言葉が俺の感覚で言えば日本語で意味が分かる、つていうのは実はこの世界の言語を覚えるのは絶望的だ、という事を意味していた。

何しろ、この世界の文字を見ても、俺には日本語に見える。
が、俺が日本語を地面に書いても、通りがかつた連中は首を傾げていた。

……どうやら、単なる紋様か何かにしか見えないらしい。

これじゃ、この世界の言語を覚えようとすることは不可能だ。もし、人の辞書を得たとしたって、和英辞典の役割を期待してゐるのに、俺には国語辞典にしか見えない、という状況で日本語を英語に訳せ、と言われてるようなもんだ。

では、逃げるか？

これも却下。

そもそも俺の方がここに長い事住んでいた訳だし、何より逃げてどうなる、ってのもある。

今後も人の領域は広がるだろ？

その度に俺は逃げ出して、新しい住処を探すのか？

きっとその時手に入る住処は前のそれよりランクが下るはずだ：

…。

大体なんで、人の庭に我が物顔で入り込んで自分の物にしようとしている、みたいな立場の連中に遠慮しないといけないんだ。

残つたのはただ一つ。

完膚なきまでに叩き潰す。

それこそ、当分新しく人が来ないようだ。

…まあ、なんだ。ハンターじゃなく、共存しよう、ってなら考えてやらんでもないんだけどな。

【SIDE：人間ズ】

予想外の事だった。

夜明け近く。

準備を整えて、いよいよ今日から狩りの開始だ、と思つていた日の事。

突如、キャンプは飛竜の襲撃を受けた。

奴は巧妙だつた。

後で生き残つた者の意見と決死の探査から判明した事だが、キャンプを見下ろす小さな丘の向こう、羽ばたきの音が聞こえないよう少し離れた所に着地、静かに接近し、頭だけを丘向こうから出してブレスを叩きつけてきたのだ。

この奇襲で、まず対空用に用意された大型武器がやられた。

更に飛び上がつた奴はそのまま上空から小刻みにブレスを叩きつ

けてきた。

厄介だつたのは奴は決して下へと降りようとしなかつた事だつた。まるで、下へ降りたら俺達ハンターの武器が待つてゐるのを悟つてゐるかのように……いや、きっと知つていたのだろう。

如何に強力な武器でも届かなければ意味はない。

ガンナー達も懸命に頑張つたのだが……奴は一撃離脱を繰り返した。

高速で飛翔しながら、俺達の上空を通り抜け、その時にブレスを叩きつけてゆく。

しかも、わざと野営地の手前で急減速して、襲撃のリズムを変えた。

……氣付けば、周囲は炎に包まれ、燃えてない天幕を探す方が難しくなつていた。

呻き声を上げるハンターが辺りに幾人も転がっていたが、そんなのはまだマシで直撃を浴びたのか黒焦げになつた死体も幾らでも転がつていた。

「もう駄目だ！」

そんな叫びを上げたのは誰だつたか。

一人二人と逃げ出す者が出了た。

怒鳴り声を上げて制止する奴も現れたが、飛竜はそういう制止する為に声を上げた奴を真つ先に狙つた。

単純に声を上げて目立つたからなのか、それとも理解して……いや、きっと理解してたんだろうな。

奴は剣士とガンナーがいれば、ガンナーを先に狙つた。

もちろん、偶然奴の鱗に命中した弾もあつたが、その殆どは……ひょっとしたら全弾だつたのかもしれないが、当たる端から弾かれていた。

そんな命中させた奴は執拗に狙われ……一人、また一人と殺られていった。

反撃する奴が消えると今度は逃げ出した奴だ。

背を向けて必死に逃げる連中を背後からゆっくりと追いかけて立てるよううに奴はプレスを叩きつけていった。

……俺が何で助かってのかって？

逃げ損ねたからだよ。

キャンプの残骸に隠れて、震えていたんだ。

奴が満足して飛び去るまで、な。

炎が迫ってきて、怯えつつも残骸から逃げ出して……他にも同じように隠れてた奴らと共に懸命に逃げ出してきたんだ。

……怪我をしてた奴ら？

ああ、いたな……そんなのも。

そんな気持ちの余裕なんてなかつた。ただ奴から逃げる事しか誰もが頭になかったよ。今にして思えば、助けを求める声もあつたよう位思つんだが……そんのはこうして生きて帰つて思い出せるから言える事だよ。

……また募集があつたら行くかつて？

よしてくれ！俺はもう奴と戦いたくなんかねえよーあんな頭のいい飛竜なんて命が幾つあっても足りやしねえー！

5（後書き）

理想郷に同じ題名で作品があります
なので、「待ちきれない！」って方はそちらにて……
元々、あちらに投稿したものをおこちらにも投下したものです

襲撃は大成功だった。

夜明け前にビームプレスを丘の影からぶちかまして、まず当たつたら痛そうな大型武器を潰した。

夜明けギリギリを狙つたのは、まだ起きてる奴がごく一部。けれど、ほんのり明るくなつて、俺からも真っ暗闇よりキャンプの細部が見やすかつたからだ。

きっと、あそこはゲームで言つ、クエスト出発前のベースキャンプだつたんだろう。安全だと思ってたから誰もが油断してた。

野生動物の飛竜の場合なら襲わなかつただろう。

自分に攻撃仕掛けでこない限り、棘竜エスピナスなんかが代表例だが、ハンターなんか無視してる。

だが、俺は違う。

そこまで人間を甘く見てはいない。

空の王らしくないと言いたくば言え。

野生に生きる者にとって最重要なのは生き残る事に決まつてゐる。

心を非情にして、俺は徹底的にハンターを叩きのめした。

……ゲームのハンターを知る身としては複雑な気持ちだったが……。

とにかく、お陰で俺は大勝利を収めた。

ハンター達のキャンプは壊滅し、僅かな生き残りはほうほうの態で逃げていった。

実の所、キャンプに僅かな生き残りが隠れてる事とか、逃げる奴の中にも装備なんかを全部捨てて、岩陰にいる事も全部じゃないだろうが気付いてた。

けど、見逃した。

別に今更、人殺しに怖気づいた訳じゃない。

そうじゃなく、この恐怖を伝えて欲しかったからだ。

……出来ればもう討伐になんて来る気が湧かないよつ。

無事作戦が成功したといつても、俺自身は警戒を強めざるをえなかつた。

人の欲は凄い。

この豊かな土地が欲しいとなつたなら、何が何でも手に入れようとするだろう。

あれからは時も頻繁に変えている。

……やれやれ、と思つて帰つてきたらハンターが待ち構えて罠を張つてた、なんて事になつたらたまたまんじやない。はあ、穏やかな日々が懐かしい……。俺は平穏に暮らしたいだけなのに。だが、俺はこの時知らなかつた。

知るはずもない。

ハンター協会がある決断をしていた事を……。

【SIDE・人間ズ】

ハンター協会は重苦しい空氣に包まれていた。

『飛竜リオレウスの討伐失敗』

それが協会に暗い陰を落としていた。
国が大々的に挺入れをして行われようとした討伐で見事に壊滅した。

これは国におけるハンターの発言力を低下させるには十分すぎるものだつた。

「……国はビリ」とる

「新たに討伐隊を組む気らしい、今度は軍隊でな」

今更引けまい。

既に隣国もまた、ハンターと軍隊双方を用いた討伐を検討していると聞く。正確にはハンター協会同士は繋がっているのでそちらから情報が入ってきたのだが。

冷静な者は皆理解している。

今回のリオレウスが極めて知能が高い危険な存在である事を。ハンター達が敗れたのはこれまでの飛竜と同じに考えてしまった事であり、彼らの責任だけではない事ぐらいは少なくとも軍上層部は理解している。

だが、一般市民は違う。

これまで頼れる相手と見ていた相手が完膚なきまでに敗北した事で懐疑的な視線を向けられている。

加えて面倒なのは、理解した上でハンター協会の発言力を削るべく蠢動していいる勢力だ。

「皆に率直に聞こう。軍隊が派遣されたとしよう。勝てると思つか？」

長のその言葉にある者は嘲笑を浮かべ、ある者は首を振り、ある者は少し考えてから首を横に振った。

全員が勝てるとは思わなかつた。

理由は単純。軍隊は実戦経験が殆どない。

日常の護衛や討伐はハンターが引き受けてきた結果だし、何より軍隊は同じ人間相手の訓練を積んでいる。巨大な飛竜との戦闘方法などありますまい。

「しかし、そうすると拙いな……」

間違いなく軍隊の派遣は今回のハンターよりも大規模なものになるだろう。

それが壊滅したとなれば、どうなるか……。

軍事力の大幅な減少、それによる他国からの干渉や脅威の高まり。最悪、戦争が起こりかねない。

ハンター達が安心して依頼を引き受けられるのも、現在の平和があつてこそ、戦争が起きれば、ハンター達とて参戦を求められる事になるだろう。

それに軍隊も討伐に失敗したとなれば、リオレウスに対する恐怖が爆発しかねない。

「……G級を呼ぶしかあるまい」

ならば。

もう、こうなれば方法は一つしかない。

ハンターの中でも一際凄腕。切り札たるG級ハンターを招集して、他が動く前に、ハンター自身の手でリオレウスを討伐するのだ。

6 (後書き)

理想郷のアドレスは……
えー、そちらは検索でお願いします
arcadiaで検索すれば見つかるかと……

この世界には古代文明の遺産が存在している。

既に明確な形では残っていないが、天高く聳え立つ塔などはかつての文明の名残だと言うのは定説だ。

また別の説では、この世界に存在する巨大なモンスターもそうした文明の落とし子だ、という学者もいるそうだ……。

俺はG級ハンターに分類される一人だ。

G級ハンターとは一般には凄腕のハンターとしか知られていない。いや、同じハンターにもそうとしか思われていないだろう。

……当然だな。G級ハンターはある種の規格外だ。最悪その実態が外に洩れれば、恐怖の対象になりかねない。

G級ハンターとは単独ないし少数で大型モンスターをも狩る者達だ。

多数で狩る相手と真っ向戦う……白兵型ならば、ドドブランゴと真っ向力比べが出来る程だ。いや、向こうが片手なのに対して、こつちは両手だから本当の意味での真っ向勝負ではないんだが……。

G級ハンターも古代文明の遺産的存在かもしけない、とはハンターアー協会お抱えの学者の説だが、何でもかんでも古代文明のせいにするのは、正直どうかと思う。とはいっても、人間型の大型モンスター並の戦闘力の持ち主が街中を闊歩してるなんて一般に知られたら、まあ、一般人としての生活は厳しいだろう。

中には力に溺れる馬鹿もいるのも事実なんだが……ギルドナイトつて暗殺者だ、と言われるのをそういう馬鹿が何時しか消えてるからだろうな。

「さて、自己紹介をしよう。ここにいるのは全員がG級と考えて良いんだな?」

ハンター協会の奥にある個室。

そこに三人の男と一人の女が集まっていた。

全員が黙つて頷く。

発言した男は一回り年齢が上の男だ。名前はガラム。三十代前半といった所だろうか？この仕事はそう長くは続けられる仕事ではないから、そういう意味ではベテランの域に既に突入している。装備はレックスメイル。武器は轟刀【虎徹】。ティガレックスの討伐を行つた事があるのだろう。最低でも五人以下の少数で一度は竜の討伐がなければG級ハンターとは認定されない。

一般的には竜の存在は少ないと言われてるし、少ないのも事実だが、間違いなく存在している。奴らは。

見た目的にも一番G級ハンターと言わされて納得出来る外見の男だ。ちなみに自分はグラビドメイルに大砲モロコシ。名前はシユウ。年は25。

……武器の見た目でアレコレ言われる事もあるかもしれないが、性能は悪くないんだ。本当に。

あと一人の男はガンナーだ。

こちらは武器は龍頭琴。防具はガノスメイルだ。……正直、女性が着てる方が見た目にはありがたいんだがな……うん。名前はラジーで……正直、何でガンナーなんかやつてるんだって言いたくなるような筋肉ムキムキのマッチョマンだ。ちなみに体も一番この中ではデカイ。

そして最後の女性だが……。

実は彼女が最強の一角だ。

武器は何と大剣ブリュンヒルデ。これはまあ歴代の積み重ねと言えなくもない。

が、防具は各自にあつたオーダーメイドだから誤魔化しようがなく、ある意味着てている防具こそが当人の実力を示すと言えるんだが、彼女が着てているのはリオソウル。すなわち空の王リオレウスの亞種を狩つた事があるという証である。

ちなみにこちちは一番小型で、可愛らしい少女だ……。多分まだ二十歳になつてないだろう。名前はエナ。

見た目があてにならないのもG級ハンターの特徴ではあるんだが。この面子はある意味それを如実に示していると言えるだろ？

「さて、今回の討伐対象はリオレウスだ」

ガラムの言葉に誰もが頷いた。

「ただ、聞いた限りでは通常のリオレウスとは異なる性質を持つようです」

これを言ったのはエナだ。

リオレウス亞種を倒した経験のある彼女の言葉は重い。確かに伝え聞くリオレウスのそれとは異なる部分が多い。まずはいきなり放ってきたというビーム状のブレス。

俺自身が以前に対決したグラビモスが使っていたのと同じような、けれど威力は攻城戦用の兵器すらまとめて粉碎するような規格外。更にその行動からして、知性も相当に高いと思われる。それは単純な罠では気付かれる可能性がある、という事もある。

「それに空からの攻撃に徹底した、というのも厄介じゃな！」

声がでかいのはガンナーのラジーだ。

もつとも、それには全員が同感だ。

俺達が戦った竜は装備から推測するに、ティガレックス、グラビモス、ガノトトス、リオレウス亞種。

……お気づきだろうか？最後を除けば飛行しないか飛行を苦手としている竜ばかりだ。

つまりはこの面子。飛行型の大型モンスターとの戦闘経験が少な

い。

「……どうにかして、地上に落とす必要があるか」

そうしないと、全員の力をフルに活用出来ない。
だが……地上に降りてくれるだろうか？

「……方法としては洞窟に誘き寄せるか、奴の巣で待ち構える、
しかないか？」

だが、どうやって？

全員が唸つた。

洞窟に誘き寄せるにしても、果たして素直に入ってくれるだろう
か？知能が相当高い、という事は自分にとつて不利な環境も理解し
ているはずだ。余程やむをえないような状況でもない限り、無理だ
ろ？。

では巣で待ち構える？

巣はどこだ？

飛竜の行動範囲は広い。

その広大な範囲をこの四人で探すのか？

これが普通の竜ならば、キャンプを張つて待ち構える。
彼らは野生動物であり、水場だつたり獲物が豊富な場所だつたり
に必ず訪れる。

そこに場合によつては一月以上に渡つてキャンプを張つて待ち構
え、戦うのが基本だ。

だが、今回の場合、水場も大きな川がある以上却下だ。
そのどこに来るかなぞ予想がつくはずがない。

獲物にしたつて、広い草原だ。そんな草原で頭の賢い空を飛ぶ大
型飛竜なんぞと相対する程、彼らは命を捨ててはいけない。

ああでもない、こうでもないと意見を交わす彼らの下にある急報

が入ってきたのは作戦会議が始まった翌日の事だった。

『隣国の軍隊がリオレウス討伐に出撃！壊滅し、リオレウスによつて王宮が襲撃を受けた！』

7 (後書き)

更に投下

【SIDE：人間ズ】

隣国が動いた、その情報はリオレウスの縄張りを挟む反対側にある国でも衝撃を巻き起こした。

抜け駆けされた。

そんな気持ちがあつたが、その討伐に派遣されたハンター部隊が逆に壊滅したと聞いて、大多数の者は「いい気味だ」とせせら笑つたが、その意味を理解出来る者達は頭を悩ませる事になった。

「うちは大丈夫なんだろうな？」

彼らの心境を表せば、この一言に尽きる。

喜ぶのはいいが、それ程までに危険な飛竜が居座っているのでは、果たしてうちが討伐可能なのか？

もし、討伐出来ないのならば、喜んでばかりはいられない。

これに対しても、軍はこう返した。

「大丈夫だ、我々ならば討伐出来る」

自分達の力を過信する者も、飛竜の戦力を危惧する者もそう言わざるをえなかつた。

そもそも過信している者は自分達が負けるとは欠片も思つていなかつたから、それも当然だ。そして、危惧する者達でもまさか「出来ません、無理です」とは言えない。言える訳がない。そんな事を言えば、自分達の首が飛び。

結果として、軍は自分達の実力を示す為に、飛竜討伐に出撃したのである。

この討伐隊は軍が主力とはいえ、使える者は何でも使うというか、ハンターも混じつてはいた。

ただし、あくまで参考程度のものであり、G級ハンターは一人も混じつていなかつた。そもそも、G級ハンターなどギルドでも限ら

れており、隣国に召集された四人がこの近隣全てのG級ハンターだつたのだから、いるはずがなかつたのだが。
しかし……。

「しょ、将軍！？何をされてるのですか！！」

多数のアプトノスが無差別に狩りたてられ、森には油が撒かれ、火が放たれていた。

「うん？決まつてあるではないか。飛竜を誘き寄せておるのだよ」
何を当り前の事を、と言わんばかりの態度に将軍の傍にある参謀に相当する者達は絶句した。

元々この将軍は武威を誇る人物だつた。

だが、それ以上に現王の弟にあたる人物でもあつた。だからこそ、単純な腕力バカでも取り巻きが発生して、この地位までのし上がつたと言える。

将軍曰く、飛竜が繩張りを荒らされたなら、怒つて出てくるだろう、と悠然と告げた。
所詮畜生だ、と……。

「し、しかし……」

尚も言い募るうとした部下に、これ以上は聞く耳を持たんと、ばかりに将軍は背を向ける。

その姿に彼は口を噤むが、内心では将軍を罵つていた。

『幾らリオレウスを討伐したからといって、この地が荒れ果てていては意味がないんだぞ！？それに……』

果たして、怒り狂つたりオレウスが出現した場合、本当にこの戦力で止められるのか、そんな不安が胸中に湧き上がっていた。

……そして、不幸な事に彼の予想は最悪の形で的中する。

【SIDE：転生者】

なんだこれは。

見慣れた光景が変わっていた。

逃げ惑うアフトノスの群。

燃える森。

森に住む動物達が炎の中を逃げ惑う。

森から飛び出してくれば、それもまた殺される。

それをリオレウスはその鋭い視力で全て見た。

元より、リオレウスの視力は高い。だからこそ、空を舞いながら獲物を正確に把握出来るし、逆に閃光玉で視覚を奪われたりする。その光景をまざまざと見ながら、リオレウスの内心に怒りが煮えたぎってきた。

人の欲望は果てしない。

だが……その為に、これをやるのか。

リオレウスの中に言い知れぬ怒りが湧いてきた。

彼の人としての理性が抑えこんで来た野生の獣が、竜の持つ原初の怒り。それが噴出していた。当人ですら勘違いしていた事だが、リオレウスという種が持つ怒りは消滅した訳ではなかつた。ただ、人という理性がそれを表に出さなかつただけの事だ。なまじ長きに渡つて封じられてきたからこそ、普段穏やかな人間が怒つた時は恐ろしい。

いいだろう、お前らがやりあつといつなら。

徹底的にやつてやる「じやないか。

【SIDE・人間ズ】

「飛竜だー！」

その叫び声が上がったのは軍が行動を開始して、一時間と経たない頃だった。

一斉に空を見上げれば、確かに空を舞う姿がぽつんと空に浮かんでいた。

この時点で、既にハンター達は全員がいなくなっていた。
彼らは野生の獣の恐ろしさというものを知っている。ハンター協会からどれ程危険な竜なのかも伝わっており、G級ハンターが召集された事も知っていた。

……逆に言えば、彼らは軍隊が正々堂々と挑むのは想定外だった。

『軍も当然、危険度は知っているだろう』

そう思っていたのに、いざ始まつていれば怒らせて、草原の真っ只中で勝負を挑むという。

確かに、陣に引っ張り込む事は可能かもしれないが……。

命の危険を、なまじ実戦に参加し続けていたからだろう。敏感に感じ取つた彼らは誰ともなく姿を消した。

もちろん、それが出来たのは今回彼らがここへ来たのはあくまで国の中でも一部の者からのお願いであつて、正規の依頼ではなかつたからだ。それもアドバイスをくれれば、という程度のものだつた。そんな煮えきらぬお願いになつたのは、軍が面子の為に正規の依頼を断つたからだ。

だからこそ、『善意の協力者』をお願いするしかなく、ギルド協会もお金を払えば依頼として成立してしまつ為に、優遇などを裏で

約束して、一部の者を派遣するに留まっていたのだった。だからこそ、アドバイスなりを無視するならば、一言断れば彼らが帰るのを止める手段がなく、将軍が『帰りたいなら帰るが良い』と言った事がそれを後押ししてしまった。

「よつし、来たか……全軍射撃用意……む？」

将軍が氣合の籠つた声を上げたが、何時の間にか空からリオレウスの姿が消えていた。周囲に確認すれば、雲に入った後、どこに行つたかよく分からなくなつたらしく。

きょろきょろと見回す軍の耳に風切り音が響いてきた。

なんだ？

そう思つた時。

前衛の『兵の頭上を超低空飛行でリオレウスが飛び越えた。

「……??」

引き起こされる風、龍風圧は兵士達を問答無用で吹き飛ばす。

一直線に飛来するリオレウスを真っ向睨み据えて、将軍は剣を抜いた。

「来たか！この……！」

名乗りを上げよつとして。

将軍はそれを果たす事はなかつた。

高速で襲い掛かつたりオレウスは派手に煌びやかに着飾つた将軍の姿を見誤りはしなかつた。上空から見て、彼が周囲からかしづかれるえらいさんである事も確認した。

そして、その結果は、将軍が最後まで口にする前にその巨大な爪が将軍を押し潰すという形で結実した。

「が……つ！？ふ……！」

その巨体故の重量はもがいても抜け出す事など出来るはずもなく。懸命に振るつた剣は力の入らぬ姿勢と怪我故に鋼鉄の壁を殴つたかのように弾き飛ばされた。

慌てて、將軍をそれでも救えとばかりに周囲の人間が動こうとしたその機先を制するように。

リオレウスが吼えた。

最早暴力。

そうとしか言いようのない轟音が辺りを満たした。

リオレウスの前方近辺にいた者達は咆哮によつて生み出された衝撃波によつて吹き飛ばされた。

そればかりではない。

バインドボイスすら超える、ティガレックスのそれすら上回る余りの轟音に鼓膜を破られ、耳から血を流し、悲鳴を上げて転がる者が続出した。

ゲームでは高級耳栓などといったものが存在する訳だが、現実にはハンターであつても耳栓など装着する者はいない。音とは周囲を感じする為の重要な要素であり、竜の咆哮にも耐えるような耳栓などしそうものならば、まともに音が聞こえなくなつてしまつからだ。そんなものをしようものならば、密林を歩いていて急に虫の音が聞こえなくなつた、複数で戦つていて味方がモンスターに気付いて注意を促したとしても気付けないのではないか。

ハンターと理由は異なるが、兵士達にもまた耳栓をつけたりする理由はなかつた。そんなものをつけてしまえば、指示が聞こえなくなる。それは軍隊としての活動を封じるという事以外の何物でもない。

それ故にまともに音を聞く事になつてしまつたのだ。

それを見届ける間もなく、リオレウスは弱弱しくもがく將軍の頭を咥え……次の瞬間、胴体から引き千切つた。吹き上がる血、轟音をもたらした咆哮。その二つから人が立ち直る前にリオレウスは空へと飛び立つ。

上空へ舞い上がつたりオレウスは大きく息を吸う。その行動を見て、まだ何とか動けた一部の者は必死になつて転がるが、大多数は動けぬままだつた。

ガノトトスと呼ばれる竜がいる。

水に生息するかの竜がゲームで取る行動の中に、水面から顔を出したガノトトスがウォータージェット状の水を頭を振り上げる事で一直線に自身手前から奥へと放つてくる攻撃がある。まるで地面を削る刃のように……。

それが高熱のビームとなつて再現された。

8 (後書き)

まだまだ続きます

軍隊のど真ん中を切り裂いた高熱ビームによつて部隊は瓦解した。直撃を喰らつた者は一瞬で炭化どころか焼滅し。むしろその通過コースの周囲で炎に包まれ転げまわる者が続出した。

中には弓を構えて上空のリオレウスに向けて撃つ強者もいたが、元より下から上へ向けて撃つというのは重力の影響もあり、難しい。全てが届く事さえなく、力なく途中で勢いを失つて地面に落ちてきた。

いや、彼らもまたパニックに陥つていたのだろう。ただ、ひたすら届きもしない矢を放つ事で恐怖を誤魔化しているのだった。

だが、それも繰り返される攻撃に次第に散発的、どころか次々と死体となり、逃げ出す者が増えた。

リオレウスが逃げ出す者ではなく、抵抗する者を執拗に攻撃している事に誰かが気付くと、それはますます加速し、何時しか全員が逃げ出した。

【SIDE：転生者】
そうだ、逃げるがいい。
悠然と高空を舞いながら、彼は必死に逃げる者達を見下ろしていった。
前回は見逃した。
だが、今回は違う。

徒步で逃げる彼らの方向を確認してゆく内に、街道を発見した。ただ、それと同時に前回のハンター達とは依頼は異なるのでは？という疑念も持つていた。前回逃げた連中の逃走方向も一応確認は

行っていた。その先に岩山を利用した大きめの都市があつたので、あそこから来たのかと納得した訳だが、今回はそれとはまるで逆だ。それでも彼の支配領域の手前まで伸びる街道を発見した彼は悠然と帰還した。

焦る事はない。

どのみち徒步で逃げる者達が動ける距離など自分には僅かな時間でいいのだから。

【SIDE：人間ズ】

兵士達は懸命に逃げていたが、やがて肉体の限界に達し、その場にへたりこむ者が続出した。

しばらくは恐怖に満ちた顔を周囲に向けていたが、どうやら飛竜が繩張りから逃げ出す者を追つてこないと判断すると、不安を抱えつつも次第にまとまって国へと向いだした。

のろのろと足を引きずる敗軍は、何しろ食事も何もかも放り捨てて逃げ出した集団だ。

一部の参謀らが何とかまとめはいるものの、脱走者が相次いだ。早々に食料を確保せねばならない。

場合によつては村からの食料を強奪という事件まで起こしながら、必死に彼らは歩を進めた。

先発で送られた兵士、その大部分は逃げてしまつたが、中には生真面目な者もあり、彼らが伝えた情勢により何とかギリギリで食料が届きだした。

「やれやれ、あと少しだな」

兵士の一人がそう呟いた。

草原に既に都市が見えていた。

まだ距離はあるから、行軍の速度を考えると明日辺りに街に入れるだろうと安堵の声を上げる兵士らとは別に上の立場の者達は悲壮な覚悟を決めていた。

敗れたのに加え、如何に忠告を聞かなかつたとしても、将軍は将军。

王の弟は王の弟。

将軍が死んだ以上、彼らが責任を追及されるのは必至だった。とはいっても逃げた所でどうしようもない。既にいい年をした彼らが今更護衛なんぞで一からやつていける程甘い世界ではなかつたらだ。

だが。

暗い未来に溜息をつく彼らの、その上空を。

竜が飛来した。

それが全てを変える事になつた。

誰かが恐怖の叫び声を上げた。

その眼前で、王宮に高熱のブレス、ビームが叩き付けられた。

【SHIDE：王宮】

街には全く被害はなかつた。

だが、叩きつけられるブレスは王宮に次々とダメージを与えていた。

泡を食つて王宮から飛び出す者もいた。

だが、立派な服を着た老人が飛び出そつものなら、即座に連射して叩き込まれた炎で黒焦げになつてしまつ光景を見てからは誰も飛び出せずにいた。

「だ、誰か何とかせい！！」

王が怒鳴つていた。

だが、どうしろといふのか。

「軍はどうした！将軍は！？ハンター達は何故奴を攻撃せん！？」

軍は既に敗れた。
将軍は死んだ。

ハンターとはいえ、空を悠々と舞う相手に対しては手の出しありがない。

G級ハンターが動員された事を知る者もいたが、現状の王に告げても、何故隣国に、と喚くだけと見て、誰も口にしようとしない。もつとも、この王も普段はここまで取り乱す人物ではない。

この人物も通常は威厳を見せる人物だったのだが……窮地こそ人の本性が現れる、というべきか……飛竜の襲撃があつてから、狼狽する事甚だしかつた。そんな彼がこうしてまだ生きているのは、ほんの僅かな幸運。同じく飛び出そうとして転倒、その脇を同じく恐怖で錯乱した大臣の一人が駆け抜けといって怒鳴りつけようとしたその眼前で黒焦げになるという……ある種の幸運ゆえだつた。

もし、そのまま走り出していたら、今頃黒焦げになつていたのは王だつただろう。

結局、王は生き永らえた。

……悪運だけはあつたらしく、実際、彼は建物内部ではなく、門の陰にいて出るに出れなかつたが故に王宮が崩壊するのと引き換えに助かつた。ただし、息子の王子らは全員死亡したが、……。

……ただし、彼はその後、小鳥の羽ばたきの音にも怯えるようになり、まともな生活が送れなくなつてしまつた。

そのような精神を病んだ状態で国政が取れる訳もなく、結局この

後間もなく王は病氣として強制的に退位という名の幽閉を受け、この先王との王位争いで失脚して街に住んでいた先王の従弟が継ぐ事になる。

全てを奪われ、それ故に王宮に誰一人身内がいなかつた、彼は即位する時。

「人生何が幸いするか分かつたものじやない」

と呟いたが……失脚したからこそ家族全員無事だった当人としてはきっと嘘偽りのない気持ちだったのだろう。

ただ、この後、王はリオレウスに対して不干渉を決定する。さすがに、大被害を出して、國の建て直しが精一杯という状況下で彼の地に手を出す余裕がなくなつた、とも言つのだが……。

9 (後書き)

第一次投下、とうあえず一〇話まで……

「……そうか、壊滅したか」

G級ハンター達にも隣国的情報は伝わっていた。
彼らがこうして留まっていたのは、実は情報収集の為だ。その過程では幾つもの想定外の話も得る事が出来た。

「まず、リオレウスの危険度についての追加情報だ」

強力無比な咆哮。

話を分析する限り、その威力はティガレックスに匹敵するものと最低でも判断しなければならない。

「つまり、咆哮だけでも前方にいて、ガードし損ねたら吹き飛ばされるって訳じゃな」

渋い表情でラジーが呟いた。

彼はガンナーではあるが、ハンター達の後衛というのは軍隊とはまるで異なる。

元々G級ハンターはごく少数で動く為に、僅かな連携の乱れから前衛が突破される事も多いし、そもそも竜が突進してくれば、抜かれるのが普通だ。ガードの基本は受け流しが基本であつて、受け止めではない。

すなわち、ラジーもまたガンナーではあれど、至近で咆哮を浴びる危険があるという事であり、もし、そうして動けない所で攻撃を喰らえば、ガンナーの防具は剣士のそれより薄い為に一撃で重傷を負いかねない。そう考へると、彼の鍛え上げられた筋肉の鎧はそれへの僅かでもの対抗策なのかもしない。

「……それと、討伐に対して慎重な意見も広がっている」

これは隣国の惨状がもたらした部分が大きい。
もし、今回G級ハンターを送り込んで、同じ事が起きたら。権力者だけにその辺は敏感だ。

「それに加えて、ようやくと分けられた周辺の村からの情報が混乱を生んでいる」

どうも、あのリオレウスは集団で入り込まねばそこまで危険ではないのではないか、そんな意見が出ているからだ。

ただ、森の恵みを、川の恵みを分けてもらう、といつのは周辺の自然と共に生きる人々からは当然の理屈だが、縄張りの外から見ると、縄張りは非常に豊かな土地だ。人に荒らされていないのだから当然だが。

この為に、子供らが森に入り込んだり、獵師が狩りに決死の覚悟で初期は入つたりしていたらしいのだが。

「襲われた人がいない」

それどころか、かつてこんな事があった。

知らず知らずの内に獲物を求めて入り込んだ獵師が、足を滑らせて谷を転げ落ち、身動きが取れず呻いていた。その眼前に飛竜が降り立ち、「俺もここまでか」と思い、目を閉じたが、次に意識を取り戻したら村に向うキャラバンに乗っていた。

何と、飛竜が彼らの前に軽く口で咥えて、運んできた彼を置いて、そのまま飛び去ったのだという。

それ以来、彼は縄張りに入る際は、獲物を得た際は必ず出る前に決まった所に獲物の半分を置いていくそうだが、代わりに一度も襲

われた事はないそうだ。

かと思うと、子供達が釣りをしていて、ついつい縄張りに入り込み、そこで凄く釣れる場所があつたので夢中になつて釣つていると、気付くとランポスの群に包囲されていた。

追い詰められて真っ青になつていた所へ、飛竜がやつて來た。ランポス達はといふと、リオレウスの姿を見るなり、蜘蛛の子を散らすように逃げ去つたが、リオレウスはそのまま水を飲むと、どつしりとその場に居座つた。

殆どの子供は怯えて釣りをしなかつたが、ガキ大将の子供は意地になつて釣りをしたが、何も襲われる事はなく、夕方に帰る段になつて、彼らの後をリオレウスが悠々とついて來たそうだ。

びぐびくしながら家路についたが、村が見えると、リオレウスは一声軽く吼えて空に舞い立ち、帰つていつた、という。

こんな話が探せば探す程ごろごろ転がつており、現在では何と近隣の村の住人は普通に縄張りに入つて、川や森の恵みを分けてもらうのだという。

大勢で入ろうとすると、彼らの上空に飛来して、嗜めるように吼えるという事から、今では数人の集団で時折入るようにしているだとか、かつて飢饉の折にやむをえず村の人間が大勢押し寄せた時、舞い降りた飛竜に村長が事情を説明して、このままで生きていけないので何とかお願ひします、と村人全員で頭を下げた所、飛竜リオレウスはじつと聞いていたが、やがて軽く一声吼えると軽く頷いて飛び去つた。

そうして、飢饉の間は以後は黙つて見過した、といつ……。

また、今回情報が正常に伝わったように、単なる移動のキャラバンならば特に襲われる事もないのは彼らの間では有名な話で、普通に通過しているのだとか。そういうえば、情報伝達がいやにきちんと来ると思つたものだつた。

大幅に迂回するならとんでもない時間がかかるだろうが、通らせてもらうだけなら構わない、というのならば確かに隣の国の状況も

普通に手に入るだろ？。

昨今では【竜王様】と一部では崇められており、今回ギルド連中や軍隊がボコボコにされた件も「天罰だ」と囁いてたという。

「……無茶苦茶頭良くないか？」とか、完全に人の言ひ事理解してるだろ？」

俺は呻き声を上げざるをえなかつた。

「冗談じやない、人に負けないぐらい頭がいい飛竜なんて相手したくないぞ。

「そもそも、それだと周囲の人は協力してくれないのが明白」

エナもぼやく。

獵師だつて、山師だつて、こんな環境ではハンターに会つた所で正確な情報なぞ提供してはくれないのは間違いない。

彼らのような地元に詳しい人材の協力がないと、初めて赴いた地で使えそうな素材や洞窟の在り処などは全く分からぬ、どころかこちらに不利になるような場所を教えられかねない。

ガラムが苦い顔で今回の討伐の問題点を上げだした。

「つまり、今回のリオレウスは本体は通常のリオレウスより強力。攻撃力が通常種のそれより桁違いで、おそらくは防御も比例するだろ？……。国は混乱状態で真つ当な支援は期待出来ず、周辺の村々に至つては最悪敵に回る可能性すらある……最低でもまともな情報が手に入る可能性は皆無」

口にされる言葉が増える度に、全員の顔が暗くなつていぐ。いや、無茶苦茶だろ？。

「……違約金払つて、帰れんかの？」

どじか遠い田をしつつ呟いたラジーの言葉に反論する者はいなか
つた。

全員そういう事なんだろ？……。つか、俺もすぐにでも帰りたい。

10 (後書き)

第一次投下]]]]までー

ハンター達も一応ギルドに提案はした。

少なくとも、國の方針が定まるまでは様子を見たらどうか、と。G級ハンター達としては、このまま國が不干渉を決め込む事を内心祈っていたのだが、彼らの立場上、「無理です、出来ません」とは言えない。故にそういう対応になつたのだが、ここで彼らが見誤つていたのは、ハンターズギルドとて人の集まりだという事であり、上層部もまた権力にしがみつく人間がいる、という事だった。

要は、潰れたハンターの面子回復の為、そして自分達の立場の為にG級ハンターらは出発する事になつてしまつたのだった。

「……結局、じつはなつたか」

アプトノスの引く竜車に乗つて、シユウが溜息をついた。
現在の彼らの服装はごく普通のキャラバンが使用するような服装だ。

見るからにハンターな武器と防具をまとつていては、周辺の村人を刺激すると判断しての事だ。

「今日は最初からケチがついてる……正直、引き返した方がいいとは思うんだが、な」

同乗するガラムが溜息をついた。

今回は各種の装備品、所謂大タル爆弾から痺れ罠など。回復薬Gや秘薬、毒消しといったものを搭載した竜車と、食料などを積んだ竜車の一台で赴いた。

その上で、事前にキャラバンなどから可能な限り聞いた情報から使えそうな場所に見当をつけて、そこに装備品や食料を移しておい

てから戻つてくる事にしたのだった。

今回、大きな問題となつたのはどうやって各種装備や食料などを運び込むか、という事だった。

村人らの手を借りるのは危険すぎる。

竜の目がある所で下手に運び込んだら、真っ先に焼き払われかねない。

なら、通過は安全といつ事だから、普通に通る振りをして運び込もう、という訳だ。

「お気をつけ」

今回、その為だけについてきた御者役のギルドの人間が真剣な表情で告げる。

食料に関しては、今後定期的にギルドの人間がキャラバンを裝つて運び込む予定だ。

「しかし、夜にしか動けんのがなあ……」

「やむをえない」

とにかく、見つからないように動くとなれば竜が基本的には動かない夜を狙うしかない。

幸い、基本的には奴は昼動いている。こちらが身を潜めて、その間に奴の戦力分析と住処の特定を……。
などとその晩は思つていた。まさか、その翌朝に悪夢を見る事になるとは思わなかつた。

「なあ」

「 「 「」「 「

「これってどう判断したらいいと思つ?」

俺達の視界にはティガレックスがいた。

俺達は夜の内に山岳地帯へと移動した。

これまでの話を総合すると、住処が山岳地帯にあるのは間違いないかつたからだし、隠れるならそちらの方が楽だつたからだ。だが……。

拠点と定めた洞窟。

その下にあるちょっとした平野部。そこにティガレックスが降り立ち、そこへ更にリオレウスがやつて来るというのは想定外だつた。

「……おそらく、繩張りにティガレックスが入り込んだ、という事だろう。だが、好都合だ。これでリオレウスの戦闘力を間近に見れる」

などとガラムが真面目腐つていられたのは僅かな時間だった。まず双方が吼えた。

互いに空気を吸い込んで全力で至近距離から、だ。ティガレックスの咆哮は通常の飛竜とは異なり、その衝撃波すら伴う咆哮を浴びれば、人間など吹き飛ばされる……。

「……おい、ティガの方がバランス崩してあるんじゃが……」

ふらふらとよろけたティガレックスは幾度か頭を振ると、リオレスを睨みつける。

だが、悠然とリオレスは佇んでいる。

怒ったように、ティガレックスは突進を行つ。幾度も繰り返される我武者羅な突進はティガレックスを相手どる際には動き回るという面倒な……。

「……ティガレックスって裏返しでも飛べるんだね」

エナが無表情で感情を感じさせない口調で言つた。
リオレウスが突進してきたティガレックスに回転尻尾アタックを
一撃。

まともに頭部に喰らつたティガレックスはそれで腹を空に向けて、
裏返しで空を舞つた。

見事なまでのカウンター。そして、パワーだつた。

そうして、ふらふらと拳動が定まらぬまま必死に起き上がるティ
ガレックスが敵わぬと悟つて逃げる前に。

リオレウスは大きく息を吸い込みビームを放つた。後に【プラス
ターブレス】と呼ばれるその一撃はただの一撃でティガレックスの
胸部に大穴を開けて、絶命させてしまった。

崩れ落ちたティガレックスをリオレウスは両脚でしっかりと掴む
と、上機嫌な様子で空へと軽々と舞い上がつた。……何故上機嫌な
のが分かつたかって？……鼻唄歌つてやがつたんだよ！リオレウス
が！！

なんなんだ、あいつは！ガラムが余りにもあつさりとティガレ
ックスが片付けられた事に落ち込んでいるが（あいつが倒したのは
ティガレックスだ、幾度も死ぬかと思った死闘だつたらしい）、そ
んなものは全員が似たり寄つたりだ。

……なんで、俺達、こんな仕事引き受けてるんだろうなあ……。

1.1（後書き）

さて、更に5話投稿してしまいましょう！

「帰還すべきだ」

「帰還するべきじや」

「帰還推奨」

ガラムは頭を悩ませていた。

シユウ、ラジー、エナ。今回の討伐に参加している自分以外のG級ハンター全員が一致して、撤退を主張していたからだ。その気持ちはガラムにもよく分かる。

物凄くよく分かる。

あんなりオレウス、どう相手しinというのだ……。

というか、あれをリオレウスと呼ぶ事自体おこがましい。

幸いなのは、食事場所と思われる場所を突き止められた事だ。

元々は住処を、と思ったのだが、どうやら食事場所と寝る場所は異なるらしく、奴が舞い降りた場所は開けた石舞台でも言つべき場所。バリバリという音に耐えて、飛び去った後確認に言つてみれば、あるわあるわ。

希少な竜の素材とでも言つべきものがあちこちに転がっていた。正直、この食い残しの素材だけで、四人で分けても一財産出来るのではないだろうか？

丸々残っている轟竜の頭殻を見ながら、ガラムは真剣に思つたし、他の面々も呆れていた。それこそ頭殻や鱗、堅殻、尻尾のような竜の素材だけで今回のティガレックス以外のものまで混じっていたからだ。

普通は食事場所のような重要な場所を突き止めた、となれば喜ぶべき話なのだが……こんな開けた場所である事が問題だ。

普通の動物なら、食事に夢中になつている間に忍び寄つて、といふ事も出来るだらうが、あの頭の良い飛竜がこれだけ視界の良い場所でこそこそ忍び寄る人間を見逃すとも思えない。というより、明らかに周囲を焼き払つた形跡があり、草などが僅かしか生えていない。ひつそり姿を隠して忍び寄るような相手対策を考えての事だとしたら……。

「……だが、帰つてどうなる」

その言葉に全員が沈黙する。

全員がきちんとその意味を理解出来る頭があるのは幸いだ。別に殺される、とかじやない。自分にはどうにもならない、そう判断した場合、帰還して増援を求めるなり、より腕利きのハンターの派遣を求めるのはむしろハンターにとつては義務だ。それが出来ないような奴ならば、見得を優先して、無謀な突撃しか出来ないなら後に残るのは死体だけ。もしかしたら、ひょっとしたら極々稀にG級になれる強さがあつて、何とかなつてしまつ事がある、かもしない。

そうして、幸運が重なつてG級ハンターに登り詰める者がいる、かもしけない。

だが、そんなものは物凄い幸運の果ての話だ。で、ここにいる彼らは、といえば初期も含めて撤退した経験がある。そして、今回の討伐においても撤退は認められているからこそ、こんな意見が出る。

だが、撤退した場合どうなるだらうか？

「今のハンターズギルド上層部は焦つている

だからこそ、下手に撤退が出来ない。

もし、ここで撤退したらどうなるだらうか？ハンター上層部は諦

めるだろ？

……下手をしたら焦りからもつとバカな事を仕出かしかねない。

「いっそ、ここにハンターズギルドを制圧して、本部に状況説明した方がいいんじゃないかな？」

シュウが苛立つたような声で言つたが、ラジーもエナも反応しなかつた。

内心では賛成なのか、拙い兆候だとガラムは思つ。実を言えば、今回ガラムが他と比べて、比較的多少、といつ訳ではあるが熱心なのは裏の事情があった。

彼らはリーダーに任じられたのがガラムだから、と思つているだろ？、実際それは間違つていない。

だが、同時に彼は今回の討伐が終わればギルド上層部の席の末端に入れる約束を得ていた。

G級ハンターだ。まだ他の者に比べて若い事もある、経験さえ積めばガラムはギルドのトップに登り詰める事も出来るだろ？。自分もハンターとしてはもう年だ。そんな思いが、今回の熱意にも繋がっていた。

「さすがにそれは拙いだろ？……G級ハンターが不満を持つたら反乱まがいの事を起こす、といつ前例という事にされかねない」

分かつてゐるからこそ、だろ？

シュウもつまらなそうに鼻を鳴らしだけだつた。

歴然とした知性はある鼻唄が物語つていた。

したがつて、彼らの中からは「話し合ひをしてもいいんじゃないのか？」という意見もあつた。

こちらの言葉を理解しているのならば、そういう方法もあるんじやないか、という訳だ。

だが……。

「話をして、何をやるというんだ?」

所詮、彼らは権力を持っていない、個人的な武力を持っているだけのハンターである。

彼らが何かしらの約束をした所で、権力者がそれを認めるかどうかは別問題だ。

もつとも、実際に話し合いをしたとしても、リオレウス側から条件の提示が出来ない以上現実には難しい話ではあったのだが……。

「けど、どうするってんだ。それなら」

シユウが不満げにガラムに言つ。

彼からすれば、挑んでも死ぬだけだと判断していたからだ。確かに彼の武器はガードを行う事が出来る。

だが、ティガレックスに一撃で穴を開けるようなブレスを放つてくる相手だ。僅かでも受け流し損ねたら、その時彼に待っているのは間違いなく死、だろう。

いや、直撃でも喰らおうものなら、死体が残るかさえ怪しい。

そして、彼より防御において劣るフジーやエナの場合、どうなるかなど考えるまでもない。

「方法はある」

住処はまだ確定出来ていない。

山岳地帯は霧の発生も多く、視界も山々が連なっているせいで利きづらい。

一旦飛ばれると、追うのが難しいのだ。

けれど、一つだけ。残骸があつたが故に、食事場所は分かつた。

それなら……。

ガラムはそう考え、彼の作戦案を提示した。……気付かぬ内に、自分自身が焦つて いる事を意識せず。

12 (後書き)

本日は1月15日まで

「…………」

全員が息を潜めていた。

まだそんな必要はないと分かつていても、緊張する。

結局、ガラムの意見が通つたのは、全員このまま帰つたらギルドがどう暴走するか分からぬ、という事が頭にあつたからだ。ひつ。

現在、シユウの傍にはラジーが同じく息を潜めている。
きつと別の場所に潜んでいるガラムとエナも同じように緊張しているはずだ……。

「来たぞい」

ラジーがぼそりと呟いた。

力強い翼の音が聞こえてくる。……いよいよか。

【SIDE：転生者】

今日のじ飯は何時ものアフトノスだ。

最近は、いけないと思いつつ、この場所が食事場所としてはお気に入りだ。

何故かと言われば、この石舞台みたいなのが実は岩塙の塊だからだ。

何で、こんな所にこんな風にぽつんと転がっているのかと思いまや、近くの筋肉に鉱脈が露出していた。どうやらそつから剥がれ落ちたらしい。

が、その筋肉といつのは切り立った崖だ。

そつから塩を削るのは面倒臭い。

だが、ここなら引っかけば楽に塩が手に入る。

引き裂いて大まかに捌いた肉に削った塩を振り、軽くプレスで炙る。火力を強めにしないのがコツだ。

これで良い匂いの焼肉になる。

時には森でハーブを取つてきたりして、香草蒸しみたいなのに挑戦してみた事もある。裂いた腹にひたすら詰めるのが面倒臭かつたけど……なかなかいけた。

初期はそれこそ生で食うしかなかつたからな……これでラージャンみたいに指のある手があれば、もつと調理だけじゃなく、調味料にも挑戦出来るものを。

そう思いつつ、今日も舞い降り、適当な場所にアプロトノスを置こうとする。

ここも骨で結構散らかってきた。今日は掃除して帰るかな、そんな風に思つて一步踏み出した時、足元で何か力チリと作動する音がした。

【SIDE：人間ズノシュウ＆ラジー】

「……作動したつ……」

言ひなり、ラジーが身を起こし、口を引き絞る。

今回の仕掛けは簡単だ。

骨が散らかっているのを利用して、その下に痺れ罠を仕掛けた。
無論、一個だけじゃない。

どれか一個だけでも作動してくれれば……。

そんな風に思つたのだが、見事に踏んづけてくれたようだ。
だが……。

「やっぱ効かねえかよー畜生！…」

ガラムは仮にもリオレウスだから効くんじゃないか、なんて甘い希望を持つてたみたいだが、こちとらあれがリオレウスだなんて思つちゃいない。それはラジーも同じだ。だからこそ、即座に反応出来た。

そう、奴は痺れ罠を踏んづけたにも関わらず、きちんと作動してゐるにも関わらず、警戒して周囲を見回している。その様子には痺れ罠にかかるた獲物特有の動くに動けずもがくような様子はあるでない。けれど、それならそれで、こつちは予定通りに動くだけだ。

ラジーが引き絞つた矢を放つ。

俺達の位置は上手い事に奴の背後。……周囲の地形から降りてくるとしたら、こっちが背後になる可能性が高いと踏んでいたが、当たつたようだ。

その矢はさすがにG級の腕だけあって、見事に奴の尻尾の付け根。リオレウスの尻尾の斬り落とし安」とされる部位に正確に命中しそうあつさりと弾かれた。

「…………」いつも予想通りだと哀しくなるのう

血漫の一品がいともあつさりと弾かれた事に、ラジーはどうか寂しげだった。

だが、ここからだ。

案の定、一撃当てた事によつて、奴はこちらに気がついた。ぐるりと頭部を巡らし、こちらに向き直る。

次はこちらの番だ。俺の役割はラジーの盾役……ラジーはその為にやや後方に下がり、再び矢を放つ。

今度の狙いは顔……。

こちらもあつさり弾かれたが、それでいい。動物の習性として顔に物が飛んでもれば……目を閉じる。

それはあのリオレウスの皮を被つた怪物も同じ事だつた。
さあ、後は最後の一矢だが……これで駄目なら、後は……。

【SIDE：人間ズノガラム&エナ】

懸命に身を伏せていた。

お前は一体何をしているのだと、何故こんな事に命を賭けているのだと頭の中で喚きたてる声が聞こえる。

何時からだつただろう。この声が脳裏に響くようになつたのは。危険に挑む時に感じる血湧き肉踊る高揚感を上回るようになつたのは。

……分かつてゐる。自分が年を取つたのだという事ぐらい。何時からだつただろう。いつして恐怖を抑えつけなければならなくなつたのは。

……それも分かつてゐる。

自分が弱くなつたのは、娘が生まれてからだという事に。ギルドの受付嬢をしていた妻に一目惚れしたのは、自分が始めて田舎から出てきて、都市の、今所属しているギルドに入つた時だつた。

それから口説いて、一人前になつて……妻となつてくれた時は嬉しかつた。

そして、娘が出来て……怖くなつた。

自分が一人を残していく事になるんじやないかと恐れるようになつた。

ハンターの仕事なんでものは常に命がけだ。G級ハンターなんて呼ばれてはいるが、そんな自分だつてある討伐で死んでしまうかもしない。そうなつたら二人は……そう考えると途端に怖くなつた。自分の事を覚えていてくれるだろうか？もしかしたら、すぐに忘れてしまうのではないか、いや、娘は自分の事をはっきりと覚えて

いてくれるだらうか？

死にたくない。

そう思つようになつてからは、密かに引退の為の活動を始めた。だが、俺はハンター一筋にやつてきた。今更獵師なんて出来はしない。農民をやううにも種のまき方すら知らない。

必然的に、俺はギルド上層部に入る道を探つた。別に下つ端からでも構わなかつたが、G級ハンターという立場がここで足枷になつた。G級ハンターをいきなりギルドの下つ端としてこき使つようになつては、ギルドの体面に関わる、という訳だ。

そうして、やつと掴んだのが今回のチャンスだつた。

これが最後だ。これが成功すれば、俺はギルド上層部に入れる。そうすれば、妻を安心させてやれる。朝出かけて、夕方帰つて、妻や娘と食事をして、いつか娘の花嫁衣裳を見る。そんな『普通の』生活が出来るようになる。

痺れ罠は駄目だつた。

だが、矢によつて注意をひきつける事には成功した。

頭部にはねる矢を確認する一瞬前に、工ナ共々隠れていた場所から飛び出した。

隠れていた場所は岩舞台の陰。覗き込めば見つかる可能性も高い、そんな場所。

だが、賭けには勝つた。

一息に体を跳ね上げ、襲い掛かる。

太刀と大剣。

その一撃が襲い掛かつたのは……奴の翼、その薄膜。

前情報から、この飛竜がすぐ空へと舞うのは知つていた。ハンターだと悟れば、きっとまたしても空へと舞い上がるだらう。……そなれば、勝ち田はない。

なら飛べなくするまで。

だが、翼そのものを破壊するには時間がかかるだらう。だが、薄

膜ならばどうだ？

そこならば、鱗も殻もない。ひょっとしたら……そんな賭けは、だが、成功した。

一撃、二撃、三撃！

連続して放つた攻撃が、奴の翼の薄膜をズタズタに切り裂く。反対を見れば、エナもまたその薄膜を破壊する事に成功していた。これで、まずは第一段階。

そう思った次の瞬間。

奴の薄膜が瞬時に再生した。それこそ、瞬き一つする間だった。目を閉じて、また開く。

それだけで作戦の第一段階が成功したという証は失われてしまつた。

そして、奴が、リオレウスがこちらに頭を向け……。

あと2つ

……びっくりした。

何か踏んだので、ギクッとしだが……ビックやら無事だつたみたいだ。

いやー驚いた。

痺れ異だつたのかな? 多分、そうだろう。ネットとかが広がる訳じゃないし。

効かなくて良かつた……こればっかしは実際に驗らつてみないと分からぬからなあ。

けど、もつと我ながら驚いたのはその後だつた。

まさか、翼の膜を狙つてくるとは予想外だつた。

確かにあそこには他と違つて殻も鱗もないからな……頑丈な武器で攻撃されたらどうにもならないだろうから、目の付け所は良かつたよな……まさか超速再生があるとは思わなかつただろうが。

いや、俺も知らなかつたんだよ。

何しろ、これまでまともな怪我つて奴を負つた事がなくつてさ……いや、ひょっとしたら怪我してたかもしない。ただ、気付かなかつただけで。なんて、今回の再生速度を見て思つてしまつた。

なんかそういうして考えてみると、確かに痛かつた事つて昔の独り立ちしてしばらぐの間はあつたような気がするなあ。

さて、しかし、いっしょとしても喧嘩売られた以上は買わないといけない。

……装備とかからして、いっしら絶対凄腕ハンターだよな。

先だつての軍隊との戦いを思い返してみると、軍隊の場合はモンスターの素材を用いた武器つて奴を見た覚えがなかつた。やっぱり数を揃える必要と装備を揃える必要があるからだろうな。だとすると……手加減なんてしてられるか!

確かに、戦闘力は弱いかもしれない、俺に比べれば。でも、俺より間違いなく不利な戦いでの経験が豊富なはずだ……そんな相手に油断なんてしたら、ちょっとした事で逆転されかねない。

さあ……全力全壊だ！！

……あ、でも少しばかり加減するかな？

【SIDE：人間ズ】

ガラムが感じたのは全身を打つ衝撃だった。

咆哮。

ティガレックスすら上回る咆哮がガラムを吹き飛ばした。エナはからうじてガードが間に合つた、がバランスを崩して倒れこんだ。た。

だが、ガラムの武器は太刀だ。

太刀は切れ味も攻撃力も高いが、反面ガードが全く出来ない攻撃一辺倒の武器だ。

こんな至近距離で咆哮を喰らえば、まともに吹っ飛ばされるしかない。

ゴロゴロと転がつて、それでも必死で立ち上がる。ここでただ呻いているだけ、というのはハンターの戦闘の最中には許されない。そんな事をしていれば、待っているのは死だけだ。

耳は大丈夫だ。

あの咆哮の凄まじさはハンター達に聞こえない、というリスクを考えても耳栓をする事を選ばせた。

高級耳栓と一般的には呼ばれる最高級の完全に音をシャットダウンする耳栓を用いていた。こうしてまともに咆哮を喰らつてみれば、それが正しかったと言わざるをえない。もし、耳栓をしていなければ、今頃鼓膜が破裂していただろ。……そうなれば、どのみち音など聞こえなくなつっていた。結果が同じなら、ダメージを受けなかつた分、鼓膜破裂による痛みがない分、マシだ。

起き上がりつて、前を見れば、一人激戦を繰り広げているのがエナだつた。

いや、激戦というよりは命がけで遅滞戦闘を繰り広げているといつた方がいい。

(これでも効かんか……)

G級ハンターの一撃は凄まじい。

人外、その真実の姿を知る者達はそう言う。弓でさえ、その強弓はそんじよそこらのバリスタのそれを超える。もつとも、現状ではそれも無理だ。

ガラムも駆け出した。破壊力で言えば、エナの一撃が今回のチム中では最大だ。シユウも間もなくこちらに到着する。一人が何とか注意を引きつけてくれれば……奴を仕留める算段もある。まだ奴は飛び立つていない。

飛び立つ前に奴をしとめなければならない。……如何に甲殻が硬くとも関節は防ぎようがない。何とか関節なりを一時的にでも破壊して……狙いは目だ。幾ら無敵にも思えるリオレウスといえども、脳を破壊されればさすがに倒れるであろうじ、目は鍛えようがない。それには自分の太刀の方が向いている。

駆け寄ったガラムは叩きつけるのではなく、甲殻の隙間を狙い、攻撃を繰り出す。

「俺は死なん……娘の花嫁衣裳を見るまでは……！」

小さくガラムは呟いた。

【SIDE・転生者】

……えーとどうしよう?

耳が小声でもきつちり捉えてしまった咳きに、俺は困惑した。
なんかやりづらいな。

とはいえ……やっぱり強いわ、この人達。

弓の使い手は正確にこちらの甲殻の隙間がある所を狙つてくる。
大剣の人は多少は手加減したとはいえ、それをダメージ受けながらも防ぎきった。

太刀の人はあの咆哮とともに喰らつたはずなのに、耐えて、突きを放つてくる。狙つてるのも関節だ。

そうして、そこへガンランスの人気が加わった。

うむう……甘いのは分かつてゐるんだよな。でも、娘さんかあ。軍隊とかあんだけ蹴散らしておきながら何を言つんだって事も理解してる。あの入達も子供いた人一杯いただろうしね。

でも、こうして目の前でそんな事言われたらなあ……。

そんな風に考えてたのが悪かったんだろう。

急に目の前にいた太刀使いと大剣使いが少し距離を取つた。あれ?
次の瞬間、横手から衝撃が来た。

【SIDE・人間ズ】

隙があつた。

何故か分からぬ。だけど、動きが妙に鈍かつた。

しかも、ガラムとエナの二人に意識が集中してゐるっぽい……その隙に腰を落とし、ガンランスのスイッチを入れる。

シューっと音がして青白いガスが噴出す。

だが、ぼーっとしてゐる、という印象のリオレウスはまだ気付いていない。

頼む、気付かないでくれ……こつちは打つ手が殆ど残つてないん

だ……。

矢張り、無謀だった。

そんな思いはある。ガラムがどこか焦っていたのも知っている。だが、それでも、だ。結局、あいつの作戦に賛成して、こうして戦いを挑んだ以上は俺達自身の責任だ。

だから……今は全員で生きて帰る為に全力を尽くす！

竜撃砲！！

轟音と共に衝撃が来る。

ガンランスの代名詞とも言える砲撃はまともにリオレウスの脚部に直撃し、その姿勢を僅かに崩させた。とはいえ……それだけだ。別に足をやられた、とかそんなもんじゃない。

どつちかというと、ちょっとと考え事してたら足払われてこけそうになりました、そんな程度だ。

だが、それで油断したのが悪かつた。

たたらを踏んだりオレウスは慌てて態勢を整えようとして、向きが完全にこちらに向いた。そして、向きを変えた脚がまともにシユウを襲つた。

「がはっ！？」

通常ならば、ガンランスはランスと並ぶ防御能力に優れた武器だ。ガードして受け流す事も出来ただろう。

だが、今は竜撃砲を放った後だつた。世の中には作用/反作用の法則というものがある。リオレウスにバランスを崩させるだけの衝撃を受けて、ハンター側もバランスを崩していた為にガードが致命的なまでに遅れた。

まともに直撃を受けて、シユウはボールのように吹き飛ばされた。頑丈なグラビモスの素材を用いて作られた装甲が割れ、シユウの肉体にリオレウスの爪が傷をつける。

とはいって、さすがにグラビドメイルと言つべきか、致命傷レベル

のそれは防ぎ、だが、その事がシユウに更なる苦しみを与える事になつた。

リオレウスには毒がある。

それがシユウを襲つた。手足が痺れて動きが鈍り、呼吸が出来ない。

呼吸が出来ないから、助けを求める事も出来ない。出来たとしても、果たして助けに来るような余裕があつたかは別だが、そのせいでポーチからリオレウス用に調合された毒消しを取り出そうとしても震えて上手くポーチが開けられない。

やがて、力が入らなくなる瞬間がやつて来た。だらり、と力が抜け……地面に投げ出される。

「……ついてないぜ」

それはこんな仕事を回された事だつたのか、それとも……。いずれにせよ、G級ハンターの一人だつたシユウはその言葉を最期に永遠にその心臓を停止させた。

あと一つ

目の前でシユウが倒れた。

最初はただ倒れただけかと思った。

だが、G級ハンターならばすぐに立ち上がりつておかしくないというのに、彼は動かなかつた。

駆け寄つたラジーが既にシユウが息を引き取つているのを確認したのはその直後だ。

グラビドメイル、頑丈極まりないグラビモスの堅殻を用いて作られたその鎧をも碎き、リオレウスの毒が入り込み、そして彼の命を奪つた。

間違いなく、一撃を受ければ、他の者も同じ運命を辿るはずだ。

「……おかしい」

エナがぼそりと呟いた。

荒い呼吸を整え、態勢を整えようとする中、その声は静かに響いた。

「どうした？」

「……何故飛ばない？」

飛ばない？それは有難い話では……そう考えて、自分の間違いに気がついた。

奴はこれまで飛来しつつの攻撃を加え続けてきた。

だが、今回はこうして間を取つた、取つてしまつたのに追撃をかける気配も飛ぶ気配もない。

「……その必要を感じていないのでかもしれない」

確かにそうだ。

情けない話だが、現状相手に脅威と思わせる事すら出来ていない。と、突如としてリオレウスが突進してきた。

急ぎ、エナは大剣を盾とし、自分の背後に隠れるよう言つてきた。確かにこの状況では下手に回避を取ればシユウの「の舞」……そう思つたが、直後、自分達の前に突入してきたりオレウスは手前の地面にプレスを叩きつけると共に、ふわりと宙を舞つて後方に退いた。

「――！」

だが、それで高熱に晒された地面が爆発した。正確にはこの辺りの大地がたつぱりと吸い込んでいる水分が一瞬にして蒸発して、爆発と同じような現象を引き起こした。

それでも懸命にエナと二人耐えたが、それまでだった。

一步踏み込み、超信地旋回をかけて叩き付けられた尻尾がガラムとエナの二人を吹き飛ばしたからだ。

それでもなまじ態勢が崩れて踏ん張れなかつたのは幸いだつただろう。お陰で、一人とも吹き飛ばされ、地面に叩きつけられはしたもの、衝撃による骨折程度で鎧が碎かれず、毒に犯される事は避けられたのだから……。

「がつ……は……」

ガラムは血を吐いた。

エナはガラムよりは軽傷のようだが、矢張り転がつて呻いている。そして、リオレウスを見たガラムは戦慄した。大きく吸い込まれる呼気。

咆哮ならまだ良い。だが……拙い、おそらく来るのはあのプレス。

い。ティガレックスをも一撃で葬るあの一撃が来れば、死体すら残らな

そう考へ、必死にもがくが、体は何か起き上がれただけ。これまで、なのかな……。

そう考えた時、だつた。

吼え声と共に自分の体に何かが激突してきた。

直後に、一瞬遅れて吐き出されたフレスがほんの僅か前までいた場所を薙ぎ払った。

【SIDE・転生者】

「わあああ、たまにやる

事故なんだけどさ、ミスった！

ハンターの一人がお亡くなりになってしまった。

純粹な事故なんだけど、うん、殺しに来た以上仕方ないよね。

■ ■ ■

そう思つて、トドメを刺す事にした。

せめて苦しまないよにしてやるのとしたんだが……そこで大声

上にながら、その腰間を抜けたが如かいだりかよれえ?つて思つて、こつちもタイミングがずれてしまつた。

まさか、そんな所通つて行く奴がいるとは思わないじゃないか！

かさ隠性一回り便
か／かに・二二二の月一月に

で、そうしたらね……。

【SIDE：人間ズ】

「逃げいーー！」

そう叫び、立ちはだかつた男がいた。

ガンナーたるラジーだ。

その手に拾い上げた轟刀【虎徹】を携え、彼らの前に立っていた。どうやら、ガラムとエナに体当りするようにして抱え込み、射線上から逃げしてくれたようだったが、その後がガラムとエナの前に立ちはだかつていた。

「勝ち田はあるまい。もう、我々でもじうにもならぬよ」

ラジーはどこか澄んだ声でそう告げた。

確かにそうだろう、シユウは死に、自分とエナは骨をまとめて叩き折られ、戦闘不能に近い。大人しく療養すればまだ助かるだろうが、戦闘はまず無理だろう。

「だからこそ逃げるんじゃ。……申し訳ないが、こいつは借りるぞい。わしの武器は走るのに邪魔じゃったからリオレウスの向こうに転がつとるでなあ」

かか、と大笑する。

まさか……ラジーの奴死ぬ気か！？

そんな思いを読み取ったのか笑つて言った。

「なに、どのみちこの足では逃げられぬでなあ」

見せ付けるように持ち上げた右足を見て、息を呑んだ。

……足首から先がなかつた。

「どうやらい、先程の一撃で消し飛ばされたらしい。

確かにこれでは走れない。

逃げ切れぬから、囮になるつもりなのか……。

「そんな顔はせんでもええ。……ガラム、お前さん娘さんの為に帰らにやならんだろう? エナは、まだ今回の中では一番苦い。先に年寄りから死ぬのが筋つてもんじや」

「……知つていたのか」

思わず呻き声が洩れた。

「……でも、それなら私の武器を使って。その方が……」

「そりゃあ、無理じや。ほれ」

示された先を見て、息を呑んだ。

……エナの武器、あの大剣ブリュンヒルデが破壊されていた。あのブレスの一撃で……確かに素材が竜とはいえ鱗や尻尾などである以上は幾ら強化されているとはいえ、ティガレックスのあの惨状を考えれば可能性がないとは言えなかつただろうが……。

だが、同時にこれで諦めもついた。

最早、我々ハンターの手元にある武器自体が、今ラジーが手にしている轟刀【虎徹】だけなのだ。

「ほれ、さつさと行けい。行つて、こやつと戦う無謀さはきつちり伝えてくれよ。まあ、見逃してもうひとつ代金代わりじやと思つてもうつんじやな」

その方が余程大変じゃからなあ。そつちはお前さん達に任せるわい。

そんなラジーの笑顔が澄んだよつて見えたのは、きっと覚悟を決めたから……命を捨てたから……。

自分があの時、撤退に同意していれば……そつ御つと悔しそが募る。そんな自分の体をエナが抱え上げた。

「上手く動かないなら、私が運ぶ。……大剣もなくなつたから、大丈夫」

情けない。

盾となるだけの動きさえ出来ないとは……。

涙を情けなく流しながら、ガラムはそのまま運ばれていった。

……

「ふむ、待つてもらえたのかな? こちから荒らしておいて申し訳ない」

ガラムらが去つてから、ラジーはリオレウスに向き直つた。

不思議とこの間、リオレウスは攻撃を仕掛けるでもなく、ただ黙つて、こちらの話が終わるまで待ち続けてくれた。

いや、待つてくれたのだろう。

「すまんなあ。手出しをしたのはこいつじゃといつのこと、半分を見逃してもらつ形になつてもうて……。わしとシュウの命で何とか勘弁してくれると有難いわい。ああ、無論彼らには何がなんでも、もつこには襲撃かけないよう努力してもらつでな?」

その言葉に、リオレウスは分かつてゐ、と言いたげに軽く呟え、

頷いてみせた。

「さて、ではもうしばらくなだけお付き合って頂こうつかの」

そう言つて、ラジーは刀を構えた。

そして、この時を最後に以後彼の姿が目撃される事は終になかつたのである。

15（後書き）

とこう訳で、これにてハンター達との戦いは終了です
あともう少しだけ続きます

尚、死んだ奴に『えられたのがこれなら、生まれた奴にはどんなのが思われるかもしません
ただ、基本戦いの神様ですから、当然『えられたのも戦闘とかそういう方向です
まあ、世界によりますが、世紀末世界なりか ウミみたいになつてるかな？

G級ハンター 壊滅。

その報はハンター協会を大混乱に陥れた。

「……四人のG級ハンターが手も足も出なかつた……」

どこか急激に年を食つたような声でハンター協会の長が呻いた。
手を抜いたとは思わない。

今回送り込んだ四人のハンターの内、二名が死亡し、残る一人も重傷を負つた。

この事実をハンター協会は隠そうとして、物の見事に失敗した。
理由は単純。

堂々とガラムとエナが他のハンターらからの問い合わせに答えたからだ。自分達が完敗した、という事實を。

一旦漏れ出してしまえば、人の口に戸は立てられない。あつとう間に拡散していった。

無論、慌てて呼び出した上層部は一人に「何故話したのか」と問い合わせたが、「別に口止めされなかつたからな」と平然と答えられてしまつた。

重傷を負つていた為に、帰還後そのまま治療に直行した結果として口止めが遅れたのは確かだつたが……。

「それに、どのみちどうやってあの化物を倒す氣だ

「……」

公聽会の場で、周囲を殺氣染みた雰囲気に包まれながら、ガラム

もエナも平然としていた。一人とも覚悟を決めているから、容赦がない。

所詮、今この場にいる面々はハンターから足を洗つて長い上に、G級ハンターだった経歴の者が一人を除いていない。彼らはハンターとしては並だつたが、上手く政治の世界を泳ぎきつて権力を手にした者達だった。

そんな人間に睨まれても、凶暴な竜種と対決してきた彼らからは、そよ風に等しい。

ましてや、今は死んだ二人の為にも、これ以上の戦力投入を防がねばならなかつた。

「一つ良いかな？」

「何でしょう、副議長」

その唯一のかつてのG級ハンター。
ナンバー2を務める副議長は淡々とした口調で問いかけた。

「奴と戦つてみてどうだつた？」

「戦闘力はティガレックスを赤子扱い、ブレスの一撃で大剣ブリュンヒルデすら破壊する程。痺れ罠も全く通用する様子はなし。龍琴弓で関節狙つてすら弾き、竜撃砲の直撃にも僅かによろけるのが関の山。よしんば弱い所に攻撃を当ても瞬き程の一瞬で再生してしまう。知能は歌というものを理解して、自分で鼻唄を歌う程バカみたいに高い。正に化物中の化物。周辺の住人が崇めるのもむべなるか、ですな」

成る程、と副議長は笑つた。

殆どの連中が尻で椅子を磨いてきた連中だから、それがどの程度

の脅威なのかよく理解出来ていなかつた。

結局の所、ハンター協会の上層部に文官が多かつたのが今回の原因だつたと思う。

実感がないから、無謀な事も命じる。

いつもして、不満顔もする。だから。

「成る程、確かに無謀だな。ならば討伐は以後禁止するしかあるまい」

「…………副議長…………」「…………」

一斉に非難の意を込めた怒声が上がつた。

「冗談ではない。ここで終わつたら自分達の面子が立たないではないか！」

そんな意を込めた視線で副議長を睨んだ彼らだが……ゆつくりと副議長が視線を合わせてゆくと、誰もが自然と目を逸らした。そして、会議室にいる幹部七名全員の視線が逸れた確認してから、溜息をつきながら言つた。

「納得がいかない。討伐は成し遂げられねばならん、か？」

一斉に賛成の声が上がつた。

誰もが副議長と視線を合わせる事なく、互いに「やはりそう思うか！」だの「当然だ、我らの誇りにかけて」などと言い合つてゐる。それに対しても、副議長もG級であるガラムもエナも無表情になつていた。

長である議長は、とこつと、どこか哀しげな表情をしてゐた。

「ならば仕方あるまじ」

.

副議長の言葉は、そこまでは幹部達も望むものだった。だが、そこからが異なっていた。

「ガラム、エナ。申し訳ないが、彼らを連れて行つてもらえないか?リオレウスの所へな……」

誇りとこつならば、彼ら自身に行動で示してもらおう。そう断言する副議長に驚愕を浮かべた幹部達だつたが、その言葉を合図として即座に会議室に駆け込んできたギルドナイツ達に、或いはガラムとエナに瞬く間に取り押さえられた。

「ふ、副議長…これは一体!…」

「は、離せ!離さんか!…」

「や、やめひ、何をするか!…」

口々に叫ぶ彼らに副議長は冷ややかな視線を向けて告げた。

「分かつておらんな。ハンターズギルド本部はG級ハンターの喪失にこれ以上は耐えられんという事だ」

この地域のリオレウスがむやみやたらと人を襲わない、共存出来るというなら。

依頼がないなら、放置しておけばいい。

G級ハンターに至る人材は希少であり、世界のあちらこちらでその手は求められている。

そんなG級ハンターが二名も死んだ。この状況は中立都市に居を構えるハンターズギルド総本部にとつて看過する事は出来なかつた。ましてや、この少し前、王宮が討伐依頼を引っ込めていた。早い

話が、この幹部達の主張は既に依頼も何もない、ただの自分達の面子だけを考えて、しかもその癖をして金はギルドに出させようという……ギルドにとつても害しかない主張だったのだ。

元よりハンターの事を考えない発言が目立っている連中だった事もあり、今回の騒動になつた訳だ。

まだ、G級ハンターの率直な意見を聞いて、引くなら見逃す予定だつたのだが……。

「それでは手はずどおりに頼む」

「了解しました」

そして、人間達の動きもまた最終段階に至る。

16 (後書き)

ラストまであげますよ

【SIDE：転生者】

先だつてのハンター達も特に問題なく終わった。
大勢が駄目だったから、少数で来たんだろうし、それなりに選抜
はされたんだろう。実際、結構驚かされたが、特に問題もなく無事
終わった。

ただ、本当の意味で驚かされたのはそれからしばらく経つての事
だった。

空から見て反応に困った。

ある日狩りに出てみれば、地面にでかでかと文字が……。

『話し合いがしたいので、是非来てらえませんか？ ハンターズ
ギルド』

……こんな文字が平原に多分染めた丸木を使って書かれてたら、
反応に困る。

傍に天幕が幾つかあるのを見ると、あそこにハンター達はいるん
だろう、多分。

さて、困った。

俺はそれなりに用心深いのだ。……これが罠で、天幕の中にはび
っしりとハンターが詰めてたり、でっかいバリスタが照準を合わせ
てたりしたら……うーん。

と、悩みはしたが結局降りる事にした。

ここで警戒してもしうがない。

虎穴にいらずんば虎子を得ず！ つてのもあるし、今後ずっとハ
ンターを警戒し続けるのも大変だ。

話し合いで解決するのならそれに越した事はない。

……話が出来るのか、って問題はある訳だが。

さて、来てみれば罷とかではなかつた。
その点は良かつた良かつた。

こつちが喋れないけど、理解はしてるって事を理解してるみたいで、幾つかの条件と提案をしてきた。

一つ皿はこつちの食事場所の片付けをさせてもられないだらうか、
つて事。

要は素材もりえません?つて事らしい。

ちょっと迷つたんだけど、交換条件を出した。ふ、その為にい飯
時に飛来したんだぜ。

要は香辛料とかの調味料を提供しろ、つて事。

塩だけじゃやっぱ物足りないのよ。

言葉が通じないから、時間かかつたけど、最終的には「ひょっと
して、素材と調味料の交換つて事では?」とギルドの下端の子供
が言い出した事が突破口になつた。

バカな事を言つなど叱られていたから、じつもむつとやらやつとい
話だと勘違いしてたらしい。

こつちが頷いてるのを見て、唖然としてたつけ。

ま、こつちにしてみれば食べ残しなんだけど、向こうからすれば
命がけでしか手に入らない貴重な素材だからな……でも、価値観が
違うんだよ、根本的に。

それから一つ皿は相互不干渉。

といつても、向こうが勝手に行動するのを妨げないで、つて話じ
やない。

要は、「私らはここで狩りはしません。だから、あなたも私達の
街を襲撃しないでください。あ、もちろん私らもランボスとかに襲
撃された場合は反撃しますし、街の連中がバカやつて襲撃かけた時

の反撃は仕方ないです。ただ、なるだけ被害を抑えてもらえたと助かります」、つて話。

まあ、それなら問題ないだろ？

こうした交渉は時間がかかった。
別に難しい話をした訳じゃない。

ただ、言葉が通じない上に、こっちの身振り手振りとか顔の様子とかが人間は分からぬえ。

同じ人間同士なら、何となく雰囲気とかで分かるんだろうけど……。

最後に、人間達は檻に押し込められた老人連中をどうしますか、
つて示してきた。

……何でも最後の最後まで、俺を狩る事を主張してた連中らしい。
で、とうとうギルドの総本部含めた最上層部、下のハンター連中全員から総スカン食らった拳句に、こうして連行されちゃうみたい。
ふんふん、俺が手出しするなら煮るなり焼くなり好きにしてくれ
と。

手出しそしないなら、このまんま総本部へ連行されて処断される、
つてか。

まあ、こんなもの貰つても仕方ないので、丁重に……と思つても
られたかはともかく、お断りした。

だつてねえ……こっちが顔を近づけただけで、顔真っ青を通り越
して真っ白になってるわ、失禁するわ、卒倒するわ……土下座して
命乞いしたり、他の奴に責任なすりつけようとして連中同士で罵り
あいの喧嘩になつて周囲から止められたり……いや、これ、関わり
たくないわ。

ほつとした。

基本的にはお互に手を出さずに、仲良くやりましょう、って事ではあつたんだが、本当にリオレウスに知能があるのか、怯えてた連中も多かつた。

もつとも、最初は怯えて、途中からは畠然としたり顎が外れそな顔になつて、最後は最低でも人並みの知能があると皆が普通に考へて動いてたな。

ちなみに、私は新たにギルドの幹部の一人に入る事になつた。理由は単純。文官が増えすぎた結果が今回の面子優先の行動に繋がつたからだ。

もつとも、ハンターばかりだと筋ばかりになつて、事務活動に支障が出る可能性があるから、当面は文官とハンターのバランスにハンターズギルドは四苦八苦する事になるだろう。

私自身も当面は文官仕事に苦労する事になりそうだが、今後は今回のような事がないように自分の全力を尽くしていかないといけない。……自分自身の行動の反省も踏まえて。

エナ自身も幹部昇格を誘われたのだが、彼女はまだ現役を続けるそうだ。

で、問題となるのが彼女の武器だ。

ブリュンヒルデは破壊されてしまった。さて、どうするか、と思つてたんだが……想定外の方向から事態は解決の方向に向つ事になつた。

何と、それを聞いていたのだろう、今回の交渉は一日では終わらなかつたのだが、翌日見た事もない鱗やら殻やらを持ち込んでくれたのだ。

一つ一つが恐ろしく巨大なそれらは、倒したのかと思ったのだがどうも当人曰く……いや、こっちが確認したのに頷いてくれただけなのだが、どうもこの種の竜が倒れた場所があるのであるのだと。要は死んでも鱗や殻は残つたって事かな……どうも俺らが辿りつくのは本当に難しい絶海の孤島のようだが。

風雨に晒されてはいるが、そんじょそじらの竜の素材より強力じゃないか、って取つてきてくれたらしい。

……信じられるか？最後はエナの奴とか子供達、リオレウスの背中に乗つて飛んでたんだぞ。

怖くなかったんだろうか？そう思つて後で聞いた所によると、それ以上に興味の方が強かつたらしい。

……そして、街に持ち帰られた鱗を初めとする素材はリオレウスが狩つた素材は希少な武器として売りに出され（ハンター限定で、装飾品としては却下だ！）、あの巨大な殻や鱗はエナの武器の素材として活用された……問題は、こんな化物がまだ世の中にはいるって事か。

こいつの正体は総本部でもその正体は掴めなかつた。まだまだ世界は広い、って事なのだろう……。

ちなみに、ブリュンヒルデに勝るとも劣らない良い武器が出来たとこつ事だけは言つておく。

17（後書き）

後で一部修正しないと……
理想郷の方は修正したんですが、こつちは原本だから

『庭園』。

そう呼称される土地がある。

竜王と呼ばれる強大な飛龍が統治する領域だ。かつてはリオレウスという事で飛竜、とされていたが、何時しかその余りの力故に、そして通常のリオレウスと余りに異なるが故に何時しか古龍に分類されるに至つた。故の飛龍。

その最初はハンター や軍隊が撃退された事から始まつたという。手出しが出来ぬが故に、相互不干渉の約定が結ばれたのだという。その後、人の技術は進んだ。

戦術も進み、飛竜種の討伐も以前よりスマートになつた。

古龍種も、人の領域が広がるにつれて接触するようになつたが、それすら討伐が行われるようになつていつた……だが、その中でも、人の領域の只中にありながらこの領域だけは人が手出し出来ないそのままであり続けた。

相互不干渉は人が代替わりする時に。

或いは、結ばれた後でもそ知らぬ振りをして破られた。

その全てが打ち砕かれた。

このような事があつた。

古龍のブレスすら防ぐ盾による陣形をもつて、前衛で防ぎ、砲撃を加えようとした事があつた。

前衛は真っ向からのブラスター ブレスによって盾ごと消滅、そのまま後衛まで一直線に最後尾までぶち抜かれ、総大将までが綺麗に消滅して壊滅状態に陥つた。

無論、その後で街が反撃を喰らい、王宮が壊滅。王も王家も消滅し、国自体が崩壊した事があつた。

そうして何時しか世界に人が広がるにつれて、その領域は保護区として認められる事になつていった。

人の手が加えられぬが故に、古来よりの自然がそのままの姿であり続けるその領域は、人が手を入れない保護されるべき領域、聖域として各国共同での声明で開発を放棄するに至つたのである。そうして、更に時は流れ……。

「……おい、逃げ切れたかな？」

「そこそこ森の中で囁く者がいた。

彼らは密猟者だった。

この自然保護区は遙かな古代から人の開発の手が全く入っていない為に、希少な自然が今尚豊かに広がっている。

その領域に君臨するのは【竜王】。

彼ら密猟者達は、この地に入るまではその存在を甘く見ていた。

伝説は所詮伝説。

大昔のトカゲの討伐に失敗が連續した事から話が大きくなり、その後は運良く手出しされる事なく、気付いたら保護区になつていただろうと……。

それ故に、彼らは希少な素材を狩る為に、この保護区に侵入したのだ。

何故か、この保護区では監視の軍隊などが中にいない為に……。もつとも、その原因を彼らは自分達の命を代価に悟る事になつた。土地を荒らしていた彼らが持つ発展した竜種の鱗すら貴く火器。それらを全く無視して弾き飛ばし、襲い掛かってきた飛龍によつて、彼らは自信も、足も失い、仲間の半数以上を失い、必死で逃走した。

「……わがんねえ。とにかく、隠れておいて、明るくなつたら早く逃げよ!」

もう、彼らはこの場所に留まる気はなかつた。

正に王。

今尚、人が手出し出来ぬ存在というのを思い知つたからだ。

武器も彼らは放り出して逃げ出していた。

武器は威力が高くなると、どうしても豪張るようになつていつた。それこそ、小鳥を撃つならもつと小型の武器もあつただろうが、この領域には飛龍を頂点に、今では数が減つた小型の竜種が当たり前のように存在している。

彼らは小型ではあつても竜種。

小型の武器で傷つけられる程甘い相手ではない。だからこそ大型火器の出番であり、だからこそ豪張る為に【竜王】の前では、そんなもの放り出して逃げるしかなかつたのだ。

「……なんか音がしなかつたか?」

とにかく、散々な一日だつた。

そう思つた彼らだが、まだ一日は終わつていなかつた。

「……！？ら、ランポス！」

「ドスランポスもいるぞ！？」

そう、ランポスの群が静かに忍び寄つていたのだ。
昼間なら問題なかつた。

彼らぐらいなら撃退出来るだけの武装を彼らはしていたからだ。だが、今は違う。

装備を失つた今では、彼らはランポスですら退ける力はなかつた。

「ひ、ひいい！来るなあ！！」

「た、助けてくれええええええええ！――ぎやああああああああ！」

今や狩る者と狩られる者。ハンターと獲物との関係が逆転した彼らの悲鳴は森の中に響き、けれど木々に吸い込まれ、誰にも聞かれる事はなかつた。

波の音は静かで、波の音が聞こえていたのである。

庭園

そこは人の世界が広がつた今尚、自然がそのまで残り続ける地。
ただ一体の【竜王】によつて、人が立ち入れぬ領域である。

【とある大学】

「……以上で今日の授業は終わりだ。この自然保護区は現在では極めて希少な金属素材や植物が多数眠っている。少量ならば【竜王】との盟約によつて持ち出しが可能だが、大規模な採掘、採取は禁止されている。学者の中にはここに長期間用の拠点を設けて、観察を行いたいという意見もあるようだが、【竜王】が領域の中に人工物を設ける事を嫌う事、かといってテント程度では小型の竜種などの襲撃を受けた際に危険だし、大規模な兵器を持ち込む事は【竜王】の攻撃を受ける事になるからそれも適わないでいる、というのが現実だ」

【とある軍人養成校】

「うむ、今では速度だけなら人は【竜王】を上回る速さの兵器も

ある。けれども、ミサイルも機関砲弾も弾き飛ばす相手だからな……。そうだ、現行の航空機に載せられる最大口径の機関砲弾でも全然効かんらしいのだ。正に竜の王だな。おまけにブラスター・ブレスは射程は長いは火力は戦車でも一撃で蒸発するわで、どうにもならないのが……」

これにて本編は終了です
以後は外伝となります

遙かな未来、人の技術は、欲望は発展しましたが、それでもチート
は全開です

正確には、年を重ねるごとに体もでつかくなつた上に、当然それに
伴つて装甲とかもアップされてつたので、人の技術が発展しても、
それを上回り続けたというか……

神様との一番最初の約束は延々生きています

これからは外伝として、色々な龍種との出会いや対決を書いていき
たいと思います

私は動物学者のヘンリー・カーライルという。

今日は世界で最も有名な龍について話をしたいと思う。

そう、彼の【竜王】だ。

【竜王】を称して、『世界で最も広大な土地を治める王』と呼ぶ事もある。

これは紛れもない事実だ。

実効支配しているのがどちらであるか不明な地域もあるので、正確な領域は不明だが、最低でも世界でもその『庭園』の領域を国とするのならば、世界でも五指に入る広大な国、という事になる。

その最初期の領域はもつと狭かつた。それは確かだ。

では、何故現在、ここまで広大な領域を支配するに至つたか、だが……その理由は、【竜王】自身の成長と、人間の馬鹿さ加減の象徴。この二点に尽きる。

【竜王】の成長に関する簡単だ。

最初期の【竜王】のサイズは当時対峙した記録から通常のリオレウスサイズ、全長17m程度であったのではないかと推測される。これに対して、現在の【竜王】は全長50m以上……正に化物だが、体が大きくなれば食事の量が増える為に、行動範囲も広がるのは理解出来るだろう。

……もっとも、昨今の【竜王】の食事量が体格から推測されるそれより異常に少量という研究もあり、外燃機関を備えているのではという説もあるぐらいなのだがね。

まあ、証明も何もなされていない話はさておき。

それ以上に大きかつたのが、人間の愚かさが招いた事態だ。

【竜王】が自分から人の街を襲つたという話はあるにはあるが、非常に怪しい、つまり自分達から仕掛けたのに、襲われたと主

張しているとされているレベルのものしかない。

これに對して、人の側から盟約を破つて【竜王】を攻撃した、といふ話には枚挙に暇がない。

結果として、【竜王】から反撃を喰らつて、壊滅した国は多数あつた。

それだけ、馬鹿をやつた国が多い、という事もある。

そうして、壊滅した国に大抵の場合起きたのは……街のゴーストタウン化である。当然だろ、飛龍の襲撃を受けて、しかも国の象徴というか一番防御が固いはずの王宮がボロボロ。軍隊もハンターも手も足も出ないという光景を目の当たりにしたのだ。そんなものを見せ付けられて、安心してその国で暮らす事など出来るはずがない。

まず、金のある者が逃げ出し、更に……という訳だ。

最後は金のない者達が僅かに残るスラムと化していったという。

そうして、もうけられた街は当然、【竜王】の飛来圏外であり……これだけで【竜王】の領域は広がったも同然になる。そしてそれが繰り返されていく内に、今の領域になつた、という訳だ。

ちなみに、【竜王】の領域の正確な広さが判明したのはごく最近の事だ。

静止衛星軌道に送られた気象衛星による画像から割り出されたものでね……ちなみに【竜王】の領域の上を飛ぶ周回軌道上のスパイ衛星みたいなのは全く存在しないのは有名な話だ。……何故かつて？【竜王】が全部撃墜してしまつたからだよ、周回衛星軌道上の衛星を……本当に生物なのかね？

しかも、壊した方法が生体レーザーと判明した時、当時の動物学者達は揃つて壁に資料を全力で投げつけたそうだよ。

……ああ、生体レーザー自体はちゃんと実験室レベルでは発生可能だそうだがね……。

遺伝子組み換えを施した生きたヒト細胞を用いたレーザービーム放射に成功しており、未来には患者の体内でレーザーを発生させてガン組織に直接照射といった事もありえるかも、という話です

話を戻そう。

【竜王】の『庭園』に入るには外に設けられた唯一の港町ドンドルマを用いる。

他にもない訳ではないが、そのいずれもが漁村のレベルで、大型船を入れるのはここだけだ。

最初期と異なり、上が馬鹿をやつても、下の民衆は何も知らずに生活している者も多く、そうした人間の村が領域に入つたからといって、【竜王】は出て行けとは言わなかつた。これまで通りの生活をする限りは、人が己の領域で暮らす事を認めた訳だよ。

現在も、尚昔ながらの生活を維持する彼らはカリユート族と呼ばれているが、遙かな古代からずっと自然と共に存続を続けている民族だと言われている。

彼らの村へ行く時、車は使えない。

使えるのは、今ではこの領域でしか見る事が出来ないアフトノスを用いた竜車だ。

なに？ それでも強引に、或いは裏から持ち込んだりする事はないのかつて？

愚問だな。そんな事をしたら、それこそ【竜王】に怒られるだけだ。

かつての戦争で、この『庭園』に眠る資源をものにしようと艦隊が派遣された事があつたが、今も尚、ドンドルマの沖合いには戦艦を含めた大艦隊が軀を晒している。……怒った【竜王】に本国を攻撃されて軍隊が半壊状態に陥つて降伏した事から、『同盟軍は連合軍に負けたのではなく、【竜王】に負けた』と言われる所以だな。

（）の他にも自然回帰論者や、自然保护団体の内でも特に自然と一

緒にあるべきだと主張する者が暮らしている事もあるが、外部で環境テロを行つた者は何故か【竜王】にばれて、入れてもられないな。いや、犯罪者特に密猟者が入り込む事はあるんだが……犯罪者でも、『庭園』で自然と共に生きる道を選ぶなら見逃してもらえるらしいんだが、中で犯罪やらかしたらあの広い領域のどこでやつても絶対逃げれないというんだ……。

【竜王】はカリュート族には神として崇められているが、本氣で神様かと言いたくなるよ。

ちなみに、生体レーザーが確認された事で、竜種が遙か古代の文明の兵器であつたという説が証明されたと主張する学者もいる。

現在は、『庭園』には範囲が広くなつたからだろうな。他の竜種も多数生息している。ここでしか見られない大型の竜種も多い。私達動物学者にとつては正に宝の山だよ。危険なのは確かだがね。

……さて、これがその【竜王】だ。

この写真は領域の外、旅客機に近づいた際に撮影されたものだ。見ての通り全長およそ50m強。

半透明のルビーのような装甲に全身を包まれている。

この全身の至る所から屈折させた生体レーザー砲を撃つ事が出来る上、口から放つブラスター・ブレスの威力と来たら……かつての大戦では大型戦艦の艦橋の一一番上から艦底まで一直線に、或いは一番分厚い砲塔すらぶち抜いて見せたそうだよ。

おまけにこの巨体で音速突破して、機動性はレシプロ戦闘機よりも小さい旋回性能を見せたそうだが……。

おまけに、超感覚、とでも言えばいいのかな？衛星軌道まで攻撃する力まで持つていて。

とにかく、人にどうこう出来る相手ではないな。それだけは確かだろう。

写真ではまだ綺麗なだけだが……実際に見ると、もう体に震えが走る。

あれを畏怖、と呼ぶんだろうね……。

実際に見た事があるのかつて？ああ、あるよ。

カリコート族には『竜王祭』と呼ぶお祭りがあるんだけどね？その中でも、中心となる部族が行う『大竜王祭』、各地のカリコート族の代表となるハンターと呼ばれる村を守る戦士が集まって行われる祭りに、【竜王】は姿を見せる。

この祭りには、見学者は誰でも受け付けるが、写真などは嫌われるから写真は取れない。

空から舞い降りて来た時……あの姿を一目見た瞬間、体が凍つたね。

あれは現地に向つのは大変だし、他の大型竜種に襲われたら命の危機もあるのも確かだが……それでも、私は生きている内にもう一度見てみたい。それだけの価値がある姿だったよ。

……おっと、もうこんな時間だね。

それでは今回の講演はこれで終わつとこむじりつよ。

外伝1（後書き）

18の最終話から大分未来の話になります
チートリオレウスはこんな進化を遂げました

遙かな未来の話。

何者にも犯される事なき【竜王】として君臨する今の時代。彼はある靈峰の頂付近にある洞窟にいた。

ふと今の境外を見ると、激しい嵐が吹き荒れていた。

その光景を見て、ふと思い出す事があった。……あれは確か、そうう……まだ自分が住処を決めず、巣立ちして彷徨つてている頃の出来事だった。

ゆっくりと空を舞う。

空の旅は快適だ。

……かつて、人だつた頃に見たあるアニメで、空を飛ぶ事が好きな魔法少女の話があつたが。うん、分かるよね……。自分の力でこゝつして空を自由に舞う、といつのは何物にも変えがたい何かがある。

そんな風に空を飛んでもると……おや、積乱雲？

……いや、行つてしまえ。

物は試しだ。……危なかつたら、もつ突つ込まないようこしよう。

そしてそれが……。

後に地上に甚大な被害を出した天災の始まりだった。

「……矢張り薄暗いな」

至る所で稻光が光る。

余波程度なら大丈夫だが、直撃を喰らつたらどうなるかは試した

くない。

効かなかつたとしても、痺れるのは御免だし、好き好んで打たれたいものでもない。

とはいえ、人であつた頃には体験出来ない事だ。

……？

なんだ？

今、何か動くものがいたような……いやいや、サイズでかかつたような。ジャンボジェットなんてこの時代にある訳ないし、竜種だって案外、空を好んで飛ぶ奴は少ない。

当然かもしねり。

何しろ、空つてのは食い物が少ない。

獲物を探すには向いてるんだが、それよりは地面を動き回る方を優先した方がいいに決まってる。子育てだって、その方がやりやすいからね……。

リオレウスとかベルキユロスとかを除けば、後は古龍種ぐらいじや……。

……古龍種？ そういえば……いやいや、まさか？

そう思つた時、稻光が光つた。そして、それが奴の姿を露にしてくれた……。

「おいおい……」

東洋の龍を思わせる姿。

通常の竜種とはまた異なつた美しさを持つその巨体は。

「嵐龍……アマツマガツチ」

『来たか、久方ぶりの来訪者よ』

脳裏に声が響く。

後に、ベルキュロスと戦った時には、これが俺の会話能力なんだ
と気付いたが、この時はてっきりアマツマガツチの特殊能力か、そ
れとも向こうが合わせてくれたんだと思つてた。

だつて、古龍だもの。

……その後長く生きる事で、複数の古龍とも出会ひ事になるが、
これがその初めての出会いだった。

「あー始めて。ああ、飛びながらでも?」

『構わん。その場に浮き続けるのは、難しかね?』

そりやそうだ。

そりや俺だつてホバリングというか、その場所で浮き続ける事は
可能だけど、矢張り普通に滑空してるのが楽だもんね。

「けど、久しぶりの来訪者ですか」

『ここまで来る者は余りおらぬ故。お前達リオレウスもこの高度
までは必要を感じぬからだらう、余り昇つてこぬし、嵐の中に入る
事も珍しい』

あー、成る程。

確かに、普通にリオレウスが飛ぶのは最初の巣立ちによる縄張り
探し＆確保とその維持、番探し、後は獲物探しだ。その内、高く飛
ぶ必要があるのは最初の縄張り探しぐらいのものだ。

他の場合はいずれも地上が見えないと意味がない。番探しの時だ
つて、リオレイアは地上を好むからどうしたつて低く飛ぶ事になる。

それに、こんな嵐の中に入つたつて良い事は何もない。

俺だつて突入したのは、人間としての好奇心による所が大、だ。

『まあ、良い。とりあえず、我が領域に入ってきたのだ。通行料を払つていつてもらおう』

はあ？

何だそりや、通行料つて……一体何を要求してくる氣だ、こいつ。……繩張りかあ。同じリオレウスやリオレイアなら話し合いといふか、最初にいるのに気付いて『出てけ』って言われる段階で出たら喧嘩必要なかつたし……同種族ならその必要がない限り、さつさと出て行けば問題なかつたからな。

かといって、他の竜種の領域つて殆どの連中は空飛んだら、諦めたしなあ……。

こいつ何要求してくるんだろう？って思つたら……！

「おわー！？って、何しやがる！…！」

『……なあに……簡単な事よ。……空にあるというのは食い物が限られていてな？自然と共にあれば然程量は必要とせぬが……偶には肉を喰らうといつのも良いものだ』

……つてこいつ俺食つ氣かよ！？

その日、地上に生きる人々にとつて災害が起きた。上空に発生した積乱雲が次第に広がつただけではない。激しい嵐が周囲を巻き込みだしたのだ。

突発的に起きた嵐に、人々はただ家に閉じこもるしかなかつたがそれでも多くの家が破壊され、多数の死者が出た。それが竜と龍の戦いだと知る者はいなかつたが、激しい咆哮を聞いた者は大勢いた。

……もつとも皆はそれが風の音だと信じて疑ひ事はなかつたのだが。

「の野郎！ やつぱさすがに古龍だけの事はある……！」

地力が凄い。

ゲームでは古龍としては弱いなんて言われてたが……あれと今では決定的に違う点がある。

……それはここが空の上だという事。

ゲームでは地上に降りてきたし、地上にいるハンターを攻撃しようとしてた。逆に言えば、本来空を、嵐を住処とするアマツマガツチにはアウエー、苦手な領域だった訳だ。

今は違う。

ここ、積乱雲こそが奴のホームグラウンド。

こちらが慣れていない場所に、あちこちで光る稻妻に、吹き荒れる暴風に悩まされていくといふのに、あちらはむしろそれらを当たり前のように利用していく。

稻光をこちらの目くらましに使う。

暴風が吹き荒れたら、それに巧妙に乗つて自身の機動性を上げるのに使用していく。

おまけに破壊力も強い！

いつの肉体が恐ろしく頑丈なのは実感出来たが……ここは空だ。はたかれたら、さすがにバランスは大きく崩れる。

「畜生……さすがに古龍だな……」

『貴様もな……リオレウスとは思えぬ……一我が一撃をこれだけ喰らつて尚、平然としているとは……』

一瞬、さっさと逃げてやるつかと思つたが、逃げ切れるか分から
ない。

あつちはこちら以上に空がホームグラウンドだ。

こっちも攻撃を当ててはいるんだが……最初こそ向こうも揺らい
だが……どう見ても見切られてるよな。何しろ、同じ空を飛ぶ相手
に対してのこっちの接近戦闘の手段は一つ。

一つは尻尾を利用しての縦回転サマーソルト。もう一つは脚の爪
での掴みかかり。後者は速度は落ちるわ、隙も大きいわで実質前者
だけだ。一つだけとなれば、それを警戒しておけば何とかなる。

一方、向こうの尻尾アタックは蛇のような柔軟な体が功を奏して
いる。

「……じつなりや勝負だ」

距離を取る為に飛翔する。

瞬間、突然に逃げ出したように見えたんだろう、向こうの動きが
一瞬遅れた。

追おうと動きだした所で向き直り、息を吸い込む。

『?逃げ……いや、そういう事か!面白い!…』

向こうも気付いたのだろう、息を吸い込みだした。
そう、もう分かつただろう。

ブレス勝負だ!!

互いの吐き出したブレスが激突する。
リオレウスからは熱線、ブラスター・ブレスが。
アマツマガツチからは膨大な水流がそれぞれ吐き出され、激突す
る。

声は出せぬが、アマツマガツチからは驚愕の様子が見える。当然
だろう、通常のリオレウスのブレスは火球に過ぎない。連続して放

つた所で樂に押し流せると読んだのだろうが……。

生憎、ここにいるのは規格外のリオレウスだ。

蒸発する事で発生する膨大な水蒸氣が上がり、一瞬の均衡の後……

水流を貫通した熱線がアマツマガツチを貫いた。

『ぐ……ぬうー。』

「うう……！直撃はしなかつたか！」

水蒸氣で視界が遮られたせいだろう。

前足に相当する箇所の片方を吹き飛ばしたもの、仕留められに至らなかつた。

とはいえ、向こうもさすがに予想外の事態にこれ以上の戦闘を諦めたようだつた。

『……ただのリオレウスではないな。此度は引かせてもらおう。』

そう言つて、睨みつつ、アマツマガツチは引いてゆく。

追撃はしない。

幾ら怪我をさせたといつても、これで向こうはもう油断などしないだろう。それに、あちらのホームグラウンドである事は未だ変わらないのだ。

「……ああ、疲れた」

安堵の溜息をつき、どつかでメシを食つか休む場所でも、と地上を見て、ぎょっとする事になつた。

「……ひつやひでえ。……俺知らね」

大型台風が暴れ狂つたかのよつた惨事が地上に展開していた。

確かに、短いよつで長いよつな戦いを繰り広げていたし、向こうの竜巻に抵抗したり、直上からの水ブレスも一発ならず回避したが……。

別に彼のせいではないのだが……何となく気が引けて、さっさと逃げたのだった。

……もう昔の話だ。

懐かしい事だ。

まあ、この嵐の中だ。わざわざ狩りに出かける必要もあるまい。そう考へると、偶にはのんびりするかと改めて寝そべつた。

外伝2（後書き）

異伝とかも書いてみますかねえ……
空間ねぼけてぶち抜いてみたりして、別の漫画とかの世界へ！
……やめとくか

異伝1・リリカルなのは編1

「始まる」

クロノの呟きが合図だったかのように、巨大な触手が海から飛び出す。

「夜天の書を呪われた闇の書と呼ばせたプログラム」

はやてが空を舞いながら呟く。

「闇の書の、闇……は？」

だが、その声は最後の最後で呆けたような声に変わった。
それも仕方がないだろ？

海に盛り上がった黒い半球。

それが解けるように割れて、それが姿を現した時、そこには異形の化物がいた。

そこまではいい。

そこまでは予想の範囲内だった、のだが……。
直後にその上空の空間が割れて、何かが降りてきた。

「なんだ、あれ、は……」

クロノの言葉は次第に小さくなつていった。
そこに現れたのは……。

「……竜？」

「ゴー！君、あれ……一体なに？」

フェイドが呆然と呟き、なのはも呆気に取られた様子で一番詳しそうな知り合いに声をかけるが、当人も見た事がない。竜という存在がいるのは知っているが、あれはそのどれとも異なる気がする。

「あつ！」

アルフが思わず、といつた様子で声を上げた。

一際目立つからだらう、闇の書はそれを敵と看做したらしい、触手を一斉に振り上げて攻撃態勢に入った。

誰もが動こうとして、味方とすら決まつていらない事に思わず躊躇する。その一瞬について、闇の書の攻撃が竜へと直撃した。黒い光が幾本も立ち昇り、竜の体を穿つてゆく。

思わず全員が顔をしかめ……直後に目が点になった。

当然だらう、その全身が穴だらけになつた、と思った次の瞬間には元通りに治つていたのだから。

「なんだ……あれは」

シグナムでさえ呆然と呟いた直後に、竜が怒りの咆哮を上げた。思わず全員が耳を抑える。

それ程、強大な咆哮だった。

『クロノ君ー』

「エイミィー？」

『気をつけて！あの竜の咆哮だけで、結界が揺らいでる……』

その報告に驚愕した。

現在使用されている結界は闇の書を封じる為に、とりわけ頑丈なもののはずだが……。

だが、エイミィによる単なる力によるものではないという。そう、まるで結界を構成する魔力が咆哮を聞くなり引き寄せられた、そんな動きなのだという。

直後、再度闇の書の攻撃が放たれた。
しかし……。

「は、はじいたあ！？」

「いや、あれは……吸収したんだ！」

ヴィータの声に、ザフィーラが正確な答えを導き出す。
先程は効いた攻撃が今度は完全に無効化されるどころか吸収された、それはつまり……。

「進化したの……？あの一瞬で？」

シャマルが目を見張つて言った。

直後、お返しとばかりに竜が大きく息を吸う。

膨大な破壊力を秘めたブレスが闇の書へと叩きつけられ……。

「全部貫いた！！」

全員で一枚ずつ破つていくはずの闇の書のバリア。

四枚四種類のそれがただの一撃で全てぶち抜かれ、闇の書へと直撃する。

その光景にこの場の最大火力の一人、高町なのはは驚きの声を上

げる。

自分や、ヴィータでさえあんな真似は出来ない。

そこからは下手に彼らが介入出来なかつた。

超音速で飛行しながら、何故か全くソニッケューブも何も発生させず飛び回る竜は全身から砲撃の代わりといつよつに、闇の書が放つた黒い光とレーザーとを混せて撃ち放ち、時折放つブレスは容赦なく闇の書を破壊した。

闇の書も負けてはいない。

抉られ、粉碎され、それをまた即座に再生し、また別の攻撃を放ち、と獅子奮迅の暴れようだ。

面倒と感じたのか……突如、竜が上昇を始めた。

一瞬、逃げるのか？と思つたが、それが間違いである事はすぐに分かつた。闇の書の上空およそ1000mで静止したからだ。

何をするのかと思つたが、次第に今度は息を吸う事なく、竜の口元へと光が集い、光球を形成してゆく。

「！…まさか集束砲撃か！？離れる…！」

真っ先にクロノがそれに気付いた。

慌てて、全員がそのまま距離を取る。

闇の書も飛び去る彼らを完全に無視して、竜を迎撃せんと力を束ねる。

そして　一瞬の間の後、双方が力を放つた。

激しく激突する力は瞬間、拮抗し……直後、下から吹き上がった流れを吹き飛ばし、そのまま闇の書へと直撃した。

その身を構成する全てを消し飛ばされ、そして　。

「…エイミィー！闇の書の反応は…！」

アースラ艦長リンディ・ハラオウンは竜の正体は分からぬが、これは好機だと判断した。

「Jの際、相手が何でもいい。闇の書がその身を吹き飛ばされたといつのなら、この機を逃さず転移させ、アルカンシェルで消し飛ばす……そんな田論見はエイミィの呆然とした言葉で消えた。

「……ありません」

「えッ？」

「闇の書の反応……完全に消えました。コアJと完全消滅したものと思われます」

唖然として、勝利の咆哮を上げる竜を彼らは地上で、軌道上のアースラから眺めていた。

闇の書すら倒すあの竜が敵対したらどうするかと真剣に考えた一同だったが、竜は直後に身を翻し、次元の狭間へと姿を消した。

慌てて反応を追うも、追尾不可能と判断された。

……この後、時空管理局は竜をオーバーS級生体ロストロギア【竜王】と呼称し、その存在を追い求める事になるが、その後遂にその存在を発見する事は出来なかつたのである。

……あーびっくりした。

寝ぼけて、次元の壁ぶち破つてしまつた。

いきなり攻撃されるわ、こっちの防御抜かれるわで焦つたからちよつと手加減し損ねたけど……大丈夫だよね？

……でも、あれ、どっかで見たような気が。

何しろ、遙かな大昔の話な為に、人であつた頃見たアニメの事を

思ひ出せなかつた【龍王】であつた。

尚、喉に引っかかつたよつた思いから懸命に考へた彼が思い出したのはその翌日の事。

氣付いたからこそ、「しまつたーーーなのほやフロイト、ほやしてお話しぐらいしてくれば良かったー」などと思つたのは、彼を中心とする者達には秘密の話である。

異伝1・リリカルなのは編1（後書き）

異伝を書いてみました

実はもう一つ書きかけてたんですけど……かなり難しい
もう一つが完全シリアルな世界と場面だからなあ……

異伝2・とある魔術の禁書目録編（前書き）

このお話には『とある魔術の禁書目録』のネタバレがあります
まだ第一部の最終刊の辺り読んでないという方は先にそちらを読んでから、読まれる事をお勧めします

……よろしくですね?
ではどうぞ

それは激しい戦闘の最中に突如として現れた。

「何だ、あれは？」

要塞『ベツレヘムの星』の中で顔をしかめたのはフイアンマ。ローマ正教の暗部の一人、『右方』のフイアンマだった。

戦況は現状自分の圧倒的優位。

『ベツレヘムの星』が起動し、サーチャ・クロイツェフをコアに顯現させた大天使ガブリエルことミーシャ・クロイツェフは順調に暴れている状況だ。

学園都市製のAIM拡散力場の集合体でもある風斬氷華、科学の天使も。

学園都市の誇る超能力者の頂点、レベル5の第一位たる一方通行も。

先程加えた『一掃』にて順調に優位に立つた。後はこれを繰り返していくば、そう思った矢先にそれは出現した。

『一掃』を放った直後の空に、まるで入れ替わりのように出現したのだ。

「竜？まさか、聖ジョージの竜とでも言ひ氣か？」

そう呟いてフイアンマは奇妙な表情になつたのだが、それは確認していた他の者も同じ事だ。

第一王女キヤーリサも。

フランスの『傾国の女』も。

騎士団長も。

或いは『後方』のアックアが。

それぞれの方法で、その姿を確認し、それぞれに困惑していた。

突如として出現した巨大な竜は科学の天使と一方通行、双方の頭上にそのまま舞い降りると、第一弾の『一掃』をその体で受け止めてみせた。

いや、少々異なるだろう。

ただ単に翼を広げて出現した結果として、彼らに傘を投げかけるような形になつただけだ。だが、強大なはずの攻撃をそれは受け止め、今も尚悠然と空を舞つている。その姿からは傷ついた様子など微塵もない。

西洋の魔術師達が一斉に何とも言ひがたい顔になつたのはただ単に、ドラゴンという存在が基本的に恐ろしく強大な力を持ち、同時に神の敵として存在しているからだ。

実際、サタンの姿を巨大な竜の姿とするものもある。

前述の聖ジョージの竜などは十字教にとつての代表的な例だが、根本として竜とは邪惡の象徴のようなものだ。すなわち、神の前に打ち倒される存在であるはずだつた。

そして、この場にいるのはローマ正教、ロシア正教、イギリス清教といった違いこそあれ、根本的に十字教の関係者か、それを信仰する国の住人だ。そこへ竜が現れたとなれば、好感情が生まれにくいのは当然だつただろう。即効攻撃を仕掛けなかつたのは、その余裕がなかつた事、他ならぬ大天使の攻撃に晒されていた以上、それと敵対してくれるなら何でも良かつた、といった事があつたのは事実だが……。

これは違う。

同時に、そんな気持ちもあつた。

今、空に出現した巨龍は羽ばたきもせずただ、そこにあり。

そして、水の大天使は最早科学の天使も最強の超能力者も見てはいなかつた。

それどころか、誰も知る事はなかつたが、遙かな極東の地、学園都市でエイワスもまた理解出来ぬ存在に興奮していたのだ。

力が振るわれた。

一撃で山をも碎く天使の翼が竜へと襲い掛かる。

一瞬それを視界に納めた誰もが身構え、余りに自然な消滅に目を見張った。

力が振るわれる。

大天使の、世界を滅ぼす程の力が次々と振るわれ、襲い掛かり、だがその全てが消えうせた。

「馬鹿な……」

フィアンマは目を見張った。

天使の力とはどこにでもあり、どこにもない。

力とは意志を持つて、方向性と共に振るわれて初めて知覚出来る力となる。

だが、あの竜は天使の振るう力を、それを再びただあるだけの力と変えている！

それでは傷つけられるはずもない。

車をイメージしてもらうといい。暴走する車は凶器だが、ただそこに停車しているだけの車ならば、自分から突っ込まない限り無害だ（迷惑かどうかは別として）。今、眼前での竜が行っている事は、正にそれ。暴走して突っ込もうとする車が、いきなり竜の直前で停車したままの無害な車に変じたようなものだ。

そうして、しばし沈黙していた竜は口を開いた。

何か攻撃するのか、と思つた者達は、直後に起きた現象が信じられないかつた。

大天使が解ける。

大天使が解け、竜に吸わされて行く。

大天使は一瞬抗うように見えた。

けれど次の瞬間には大天使はその全てをこの世界から消していた。

そうして、竜はその高度を上げる。

『ベツレヘムの星』と同じ高みへと舞い上がった竜の姿に次はあの要塞かと誰もが思った。

だが、竜は要塞に手を出す事はなかった。
まるで見守ろうとするかのように。

そこで決着を見守りつと/orするかのように。

「……あんたが何者か分からぬけど、感謝する」

中で呟いた少年がいた。

強大な超能力を振るえる訳でもない、魔術を振るえる訳でもない。その身に宿る異能はただ、他の異能を打ち消す右手のみ。けれども、ただ一人の少女を救う為にここまで、第三次世界大戦のど真ん中にいる『右方』のファイアンマの前まで来た少年が。

そうして竜はその戦いの終盤、時が来た『ベツレヘムの星』へと天界からの力が集い、地上へと放たれんとした時、動いた。

それだけで、力はその本来の役割を失い、消えた。

そして、遂に上条当麻が『右方』のファイアンマに勝利し、核となる力を失った『ベツレヘムの星』が降下を始めた時、今一度動いた。

「うわ！？」

『右方』のファイアンマを射出し、一人残つて崩壊してゆく『ベツレヘムの星』を少しでも被害を抑える方向へと運ぶ為に動こうとした上条当麻。

そんな彼の下へ竜が再び姿を現した。

妹達の一人ミサカ一〇七七七号操るハリアーと共に現れ、彼を救おうとした御坂美琴。

彼女の救出は困難だった。その理由は『ベツレヘムの星』が激し

く動いていて、ハリアーの着陸が困難であつた事。これではさすがに自衛隊のレスキューチームでも無理だつただろう。そして、上条当麻自身が今、この『ベツレヘムの星』から離れる事を望まなかつた、からでもあるのだが。

だが、竜相手では関係なかつた。

数m、場合によつては十mを越す上下運動があるからどうだ？竜も多少は難しいだろうが、それでも飛行機とは圧倒的にランディングの条件が緩和される。

そして、異能を打ち消す『幻想殺し』ならば、美琴の力による引き寄せは断ち切れても、竜によつて振るわれた直接的な力、より正確には服を咥えられて背中に運ばれる、という状況からは逃げられなかつた。

ついでとばかりに空を滑つて、インテックスの遠隔制御靈装が飛んでくる。それを思わず右手で当麻がキャッチするとその手の中で、それはボロボロと崩れ落ちていった。それに安心した隙をつかれ、飛び降りる間もなく、竜は離陸していた。

「お、おい、このままあが地上に落ちたら…」

巨大な竜の背中に乗せられた上条当麻は叫んだ。

周囲の大気がこの高度にしては明らかに異質な程穩やかで気温もまた落ち着いているのだが、先程まで『ベツレヘムの星』の環境にいた当麻はそれには気付かず、より重要な事に意識を配つていた。

なお、ハリアーの御坂美琴もまた、彼の姿を竜の背中に確認して、安堵すると共に併走していたりする。

既に彼はこの竜が異能で生み出された訳ではない事を悟つていた。当然だらう、一応現在は邪魔になつたらいけないと触つていなかつたが、その背に降ろされた時、竜に触れた。だが、竜は全く揺らぎもしなかつたし、当麻もまた、これが単なる異能の存在とは違う事を理解していた。

そんな当麻の叫び声を前に、首を捻つた竜は一ヤリと微笑んだようには思えた。

「それはまるで『任せろ』とでも言っているかのよくな……」

呆気に取られた彼を乗せた竜は再度口を開いた。

「あれは……」

「誰かがそう呟いた。
力が集う。」

竜の開いた口の前に、大天使すら上回る力が集結する。
学園都市は純粋にその集まる力に戦慄し、魔術師側はその力の余りの自然さに呆然とした。
あれだけ強大な力でありながら、あれは空を引き裂く力ではない。
あれは……。

「まさか、あれは地球という自然の化身たる存在なりけるのかしら」

イギリス清教の最高責任者たるローラ・スクワードは渋い表情で呟いたが、魔術師達にとつてはそうとしか判断出来ない現象だった。

そして、放たれた一撃。

ただ、その一撃で、音も無く『ベシレームの星』はその短い存在した歴史を終えた。

「……ありがとな」

地上へ降ろされた上条当麻はその横に舞い降りたハリアーから降りて来た二人、御坂美琴とミサカ一〇七七七号と共にその姿を見上げていた。

その当人ならぬ当竜はとこうと、頷いてみせると共に、視線を横に向けた。

そこには一方通行と、彼が救つた『打ち止め』更に番外個体がいた。

狙つたかのように竜は、いや事実そうなのだろうが、竜は彼の傍へと舞い降りたのだった。その一方通行の目にかつてのよつた狂気も何もない。

ギリギリの所で護りたいものを見つけ、それを救い、悪党である事の意味を失つた彼はただ守るべき者の為にそこにあつた。

そこへと視線を向けていた竜は静かに周囲に響き渡るよつた吼え声を上げた。

「な、に……？」

癒されてゆく。

本来あるべき姿へと戻されてゆく。
一方通行は自身の破裂した血管のみならず、自身の脳すら本来あるべき姿へと戻つていく感覚を実感した。

兵士達や魔術師達は自身の怪我が癒されていく事を感じ、エリザーナ独立同盟国ではトップたるエリザーナからして、自身の不調が瞬く間に拭い去られていく事を感じていた。

或いは第四位麦野沈利の作り変えられた体と『体晶』に侵された体と共に癒し、体から異質な内臓が吐き出され、あるべき臓器すら修復されてゆく。

そう、本来あるべき自然な姿へと、失われた腕や足をも再生されてゆく。

竜の姿が見える者は何時しか跪き、祈りを捧げていた。

彼らの目には正に神の降臨にしか思えなかつただろうし、学園都市の住人でさえ、学園都市の技術を持つてすら癒せなかつた体を即座に癒してしまつその姿に思わず『神の奇跡』という言葉を連想し

てしまつた程だ。

やがて満足したかのように、竜は空へと舞い上がり、いざこへと消えていった。

……その姿を追おうとする試みはその全てが失敗した。

「なんなのだ、あれは……」

アレイスター・クロウリーは考えていた。

今回、彼は『右方』のフイアンマを仕留めに動いた。だが、切り飛ばしたはずの彼の腕も再生し、同時に複数の場所へと存在したはずの彼には嗜めるような、そんな事はしてはいけないと言われたかのように一つに戻された。

「……計画の大幅な修正、いや変更が必要かもしけれない」

学園都市の只中にある窓のないビルの中、その中央にある巨大な『容器』の中に逆さまに浮かびながら、クロウリーは新たな思考に入つた。

……なお、【竜王】が直接手を出さなかつた理由は単純である。

「やっぱり、主人公の戦いには手出したらいけないよね!」

ふと思いつて書いた作品

チートを最早超えてるという批判は『容赦下さい』
少し書き足しましたが、チートリオが最終決戦で見てたのは、特等
席で小説の場面を観覧してた、という事です。w
まあ、やばくなつたりしたら手貸すつもりでしたが

「……今度はどう?」

昨今、次元の壁が妙に薄く感じるようになつていて【竜王】だつた。

最初の頃は壁を間違えてぶち破つてしまつたような感触があつたのだが、それも次第に薄紙程度の感覚で抜いてしまつてはいるような気がしてならない。

まあ、戻るのは難しくない。ちょっと日帰り旅行の感覚で行けばいいだけの話だ。

……などと気軽に考えていられたのは僅かな時間だつた。

「なんだ、この雑種は」

ふんぞり返る黄金の鎧を纏つた男。

傲慢極まりないこの男の片手には円筒形を連ねた剣もどき。

……成る程、今回次元の壁が薄く感じたはずだ。次元が切り裂かれたのでは、そのように感じるのもむしろ当然の話だろう。

乖離剣エア。

それが振るわれたとなると、可能性としては一つ、第四次かそれとも第五次か。

そしてその答えは目の前にいる一人組みが答えを出している。純粹に感嘆している大男と、呆気に取られている少年。

「おお、これは凄いのう! これ程の竜、生前にも日にかかつた事なぞなかつたぞ!」

「なつ、ななななな何で！？何でこんな幻想種がこんな所に
！？」

征服王イスカンダルと、そのマスター、ウェイバー・ベルベット。
後のロード・エルメロイⅡ世。

彼らがいるという事は、そして一人が英雄王と対峙しているとい
う事はすなわち第四次聖杯戦争、それもイスカンダルの宝具たる【
王の軍勢】が破られた直後、といった辺りか……。

「目障りだ、失せろ」

ギルガメッシュの背後の空間が揺らぎ、そこから幾本もの剣が出
現する。

世界に竜殺しの伝説が多い。

逆に言えば、ギルガメッシュの蔵にもそうした竜殺しの属性を持
つ宝具が多数収まっている。

そうした属性を持つ武具が襲い掛かったのだが……。

「なに！？」

全身から放たれた光が闇が悉くそれらを撃ち落す。

第五次アーチャーの全力攻撃の速度ならば矢の速度は最大でマッ
ハ11に達するが、ギルガメッシュの撃ち出す速度はそこまでには
至らない。それが災いした……いや、或いは音速の11倍だろうが
撃ち落したかもしれないが。

「くつ、ならばこれはどうだ……【天の鎖／エンキドウ】！」

「こちらは見事に絡みつき、動きを止め
もつとも……。

「ちい、動きは封じる事が出来ても、攻撃が撃ち落されるか……！しかし、【天の鎖】がこれ程までに効果を発するとなると、こ奴、神性が極めて高いという事か……」

そんな事をぼやいているアーチャーとは別に混乱状態に陥っている者もいる。

ライダーのマスターたるウェイバーだ。

ライダー自身は興味津々に観戦中で、「ほづ、こりや凄い！」などとのたまつているが、ウェイバーにしてみれば神秘が駄々漏れに等しい。

何しろ、相手は全長50mを越す巨体だ。

不幸な事に、現状、アーチャーのマスターも教会の監督役も当初のそれとは異なっていた。

遠坂時臣や言峰璃正ならばここまで派手なものになれば、最悪令呪を使ってでも何とかしようと思いただろう。

彼ら一人は聖杯戦争や魔術師の基本原則に忠実だったからだ。だが、今は二人とも殺され、現在のマスター＆監督役は共に言峰綺礼が兼ねている。監督役としてはまだまともに動く男だったが、アーチャーを止めるような男ではない。

いや、一応念話で説得はしていたのだが、ギルガメッシュに令呪を用いてまで止める腹がなかつたというべきか。

お陰で、魔術の隠蔽という部分で真面目なウェイバーが泡を食つていた。

……最大の問題は、彼にはだからといってどうする事も出来なかつたという事だつたが。

言峰自身も既に教会の戦力を動かして全力で隠蔽工作を図つていつたが、それだけで足りず、「突如出現した巨大な幻想種」の情報を教会ならず魔術協会にも送る事で全力での隠蔽工作を図つてはいた。この状況にセイバーも苦い顔をしていたが、切嗣は完全に無視し

ていた。

「放つておいていいのですかーー？」

『構わない。あの竜は見た所無差別に暴れている様子はない。下手に手を出して暴れられるよりマシだ』

「しかし……！」

『ぐどい。今はそれよりもアーチャーがあちらにかかりきりになつている間に言峰綺礼を叩く』

切嗣にしてみれば、自分で仕留めるのがほぼ不可能な相手である以上、セイバーによつて仕留めるしか方法はない。そして、アーチャーがあちらにかかりきりになつている現状は願つてもない状況であつた。

「ぐ、これでは埒があかん……！」

アーチャーは苦々しい呻き声を上げた。如何に動きを止めようと、相手も射撃攻撃が可能で、こちらを次第に圧倒しつつある状況では拙い。

このままでは押し切られると判断したギルガメッシュはありつけの盾の原典を開け、防御に回すと同時に再び乖離剣エアを回転させる。

この場にいるもう一人の雄ともいいくらいダーはといえば、完全に見学態勢に入つてゐる。この状況で間に割つてはいつて勝利を横からかつさらおうとする程無粋な漢ではない。ウェイバーにしてみればここで襲撃をかける事も考えたが、以前ならばともかく、今では彼の事を理解し、配下となる事を選んだ男だからこそ、そんな

姑息な事はこのイスカンダルには相応しいとは思えず、黙つていた。

「【天地乖離す開闢の星／エヌマ・ヒリッショ】……なに？」

「ぬう…？」

「嘘だらう！？」

ギルガメッシュにしてみれば、自身の最強攻撃が。ライダーとウェイバーにしてみれば【王の軍勢】すら打ち碎く攻撃が眼前で無効化されてゆく光景に目を疑う。……そう、無効化されてゆくのだ。空間そのものを破壊する攻撃が。

「ば、馬鹿な……」

さすがに呆然としたのがギルガメッシュにとつて致命的な隙となつた。

実を言えば、【竜王】自身は周囲が周囲である為に大規模破壊攻撃を避けていたのだが、その全身から正確に放たれる攻撃はそれだけ十分すぎる程だつた。

宝具を放つ間に、展開していた防御陣が揺らいでいたのも災いした。

「ぐつ…? しまつ……！」

一撃が抜けた。

それで姿勢が崩れたギルガメッシュに更に一撃、更に……と立て続けに直撃が入る。

黄金の鎧はそれでもよく耐えた。

だが、流れを止めるには至らなかつた。

「ぱつ、馬鹿、な……！－！我がこのよつな……！」

この時、言峰綺礼もまた討ち取られていた。
さしもの彼もセイバーと切嗣の一人がかりの攻撃には対処出来なかつた、といつべきか。

そして……。

聖杯が起動する。

本来ならば、セイバーとライダー一人が残る状態では起動するはずがない。

だが、ギルガメッシュはその容量が巨大であった。通常のサーヴアントならば一體分に相当する程に。

だからこそ、五体を小聖杯に飲み込んだ所で起動したのだ……

黒き聖杯が。

「……なんだよ、あれ」

「……せい」

ウェイバーは呆然と呟き、切嗣はその危険性を理解したが故にセイバーに令呪をもつて破壊を命じようとした……だが、その前に動いたものがいた。

口を開いた【竜王】が第一陣の流れ下つた泥を飲み込んでしまつたのである。

「……何だか不味そうじゃのう」

「……うん」

間近で見ていたライダー組にとつては何とも言いづらそうな顔をした竜に気の毒そうな視線を向けたが、セイバーは呆然と黒き聖杯を眺めていた。

これは違う。

第四次では本来、それを認識する前に令呪で破壊を命じられていったが、即座に泥が竜によつて吸収されたのを見た為に、切嗣も一瞬反応が遅れた。だからこそ、それを見る事が出来た。

「切嗣……これは、これは何なのですか！これが聖杯だというのですか！？」

『……セイバー、僕の願いは破れた。この聖杯はあつてはならぬ』

ぐ、とセイバーは呻いた。

分かつていて、分かつていて、彼女はそれでも迷つた。アイリスフイールとの約定を破つて良いのか、自身の願いは……そんな彼女に切嗣は深い溜息と共に令呪で改めて命じようとして。

巨大な力に竜に急ぎ視線を向けた。

莫大な力が竜の口に集中しつつあつた。そしてその向けられる先は……。

「な……！ま、待つて！待つて下さい！」

思わず、といった様子でセイバーが叫ぶ。

この状況にあっても、それでも彼女は縋つてしまつた。それでも、己の願いを叶えたい、叶えてくれるのではないか、そう縋つてしまつたのだ。

だが、そんな声が届く事もなく、【竜王】の一撃は天を切り裂いた。

そうして、聖杯を、空間の裂け目を破壊し、消し飛ばしていった。

「あ、ああ……」

思わず、といった風情で手を伸ばすセイバーだが、彼女の伸ばした手は何も掴めなかつた。分かつていた、分かつっていたが、それでも……それでも彼女は僅かな可能性に縋りたかつた。アイリスフィールとの約定を果たせぬ以上、せめて彼女の願いを叶えたかつたが、そのどちらも破れた。

そんなセイバーに反して、さばさばしたものだつたのはライダーことイスカンダルだつた。

「ふう、こりゃ仕方ないわい。あんなもんに頼つてもろくな事にはならん」

頭を搔くライダーに、ウェイバーも黙つて頷いた。
確かにあれは、違う。それが彼にも分かつた。

……あんなものを自分達は殺し合いをして願つたのか、と思えたのは、まだ彼が若かつたからだろう。魔術師としてはまだ正常な感覚を残していたからだろう。

おそらく、時臣ならばこれでも【根源】を望んだかもしけず、その場合璃正と対立していたかもしない。

雨生龍之助であれば破壊を歓迎したかもしがれず、言峰綺礼ならば淡々と現状を受け入れ歓喜を感じただろうし、エルメロイならば怒鳴り散らしだらうか？間桐雁夜ならば……何と思つただろう？

一晩が明ける頃には聖杯が消えた事により、サーヴァントの維持も限界に達していた。

そして、残つた二組の別れはある意味対照的だった。

ライダーとウェイバーは一晩語り明かし、そして最後は笑みをも

つて別れた。

セイバーは……打ちひしがれたまま消えていった。切嗣は彼女に何も投げかけようとしたが、彼女もまた何も彼に言葉を投げかけようとしたが、救いは破壊したのが竜であった事、あの聖杯が破壊されねばならないものである事を彼女も知る事が出来た事であつただろうか。

この後、教会も協会も隠蔽に四苦八苦する事になるのだが、事態はこれだけでは終わらなかつた。

柳洞寺のある山に大きな穴が開いたのである。

強烈な一撃によるものだつたが、その痕跡もまた隠蔽されてゆく事になる。

だが、同時に失意の余り、姿を晦ませた人物も居た。

……間桐臘顕である。

そう、彼の攻撃は地下の大聖杯を完全粉碎していたのである。

彼の妄執ともいうべき願いが叶えられる可能性が崩壊したが為に、そしてその攻撃を止める手段などなかつた為に、それ故に彼は失意の余り桜に宿すはずであつた自身の中核含めいづこかへと消えた。自らの願いが叶わぬと知つて命を絶つたのか、それとも未だ妄執晴れず、世界の何処かで蠢いているのか、それも分からぬが、間桐はこれによつて魔術師としての力をぼほ失つた。

桜も殆ど魔術を知らぬままに全てが終わつてしまつた為に……慎一も妄執に晒される事がなかつたが故に、案外仲良くやつてゐるようである。

そして、魔術師としての力を失つたが故に、魔術師としての枠から解放された彼女は凜とも接する機会が自然と増えた。かなりの間、心の傷は癒えなかつたようだが、実は一番に彼女に何くれとなく世話を焼いたのは、そして彼女の回復に大きな役割を果たしたのは妄執に囚われる事のなかつた間桐慎一であつた事は歴史の皮肉であつたといえよう。

……まあ、遠坂凜自身は大聖杯が破壊されたという事を知らないが故に、何時か聖杯戦争がまだあると思つて準備を続けていたのが……。最早起きる事がない、と知る者はいなかつたのである。何しろ隠蔽に入つた者達も完全に破壊された大聖杯からは、それが聖杯戦争の根幹システムである事を見抜けなかつたのだ。

また知る者はごく一部であつたが、北欧でも一つの古き家系が壊滅した。

娘を助けに入り込んだ一人の侵入者があつたが、それより僅かに早く襲つた巨竜によつてAININGSBERLNと呼ばれる古き家系が混乱に陥り、その間に侵入者は一人の少女と共に混乱に紛れ脱出。だが、AININGSBERLN自体が壊滅した為に、それが知られる事はなかつた……。

尚、遠坂凜が知る事はなかつた。

才能に溢れ、資金的にも言峰のような金銭無感覚ではなく、藤村組が何くれとなく世話を焼いた結果としてまだ史実よりマシな財布を持つた彼女は協会本部で金髪のお嬢様共々第二魔法に至る事になるのだが……。

それを成し遂げた大きな原因が、ある時ひよつこり次元の壁を破つて自分が与えてしまつた影響の様子を見に來た巨竜にあつた事を知る者は当事者と、宝石翁以外に知る者はいない……。

今回はフェイト／ゼロです

……ゼロの使い魔とかマーラグ、トリコなんかも書いてるんですけどねえ

うーん、他に何がいいかな

自分が全く読んでない、見てない作品は厳しいし……

異伝4 -ストライクウィッヂーズ編（前書き）

A r a c a d i a (理想郷) にも投稿しております
最近は外伝をあちらに、異伝(異世界介入)をこちらに投稿しておりますので、外伝は現時点であちらに10まで掲載中です

異伝4 -ストライクウィッヂーズ編

戦艦大和がネウロイ化し、空を飛ぶ。

ロマーニヤ公国はベネチア上空に出現した超巨大なネウロイの巣へと攻撃をかけた。

この戦闘に動員された兵力は巨大なものがあつた。

参加各国だけで、大和を提供した扶桑皇国に、ブリタニア連邦からはキング・ジョージ五世級戦艦がプリンス・オブ・ウェールズ以下四隻、帝政カールスラントからはビスマルク級戦艦が、ロマーニヤ公国からは復帰したヴィットリオ・ヴェネト級戦艦が参加し、リベリオンは今回戦艦の派遣はなかつたものの護衛艦艇としてフレッチャー級駆逐艦多数を派遣している。

全ては戦艦大和を至近に送り込む為。

搭載された魔導ダイナモの安全稼動時間は僅かに十分。その間に空を飛び、ゼロ距離射撃を行うには当然、近距離まで近づかねばならない。

その為に、精銳の五〇一戦闘航空団も投入された。

本来ならば、もつと投入したかったのだが、予備戦力がなかつた元より巣に直接攻撃を仕掛ける以上、ネウロイの数は膨大な数が予想されており、初心者ウィッチを投入した所で生還が帰しえなかつたからだ。かといって、ベテランを引き抜ける程各戦線は余裕がない。

五〇一戦闘航空団の副司令官である扶桑の坂本美緒少佐からは自分達にやらせて欲しい、という意見もあつたが、却下された。
無論、ウィッチに功績を占有されるのでは、という者達もいる。
だが、ウィッチを前線に出す事を嫌う人間にも色々なタイプがいる。

ある者はまだ十台の少女達を、ただ魔力がある、というだけで前

線に出す事を嫌つた。

ある者は彼らの背後に隠れている事しか出来ない自分達を嫌つた。ネウロイを倒すのは確かにウイッチが最も有効なかも知れないが、友を家族を殺したネウロイを自分達の手を倒したいと願つた。

また、ある者は長くはウイッチでいられない、すなわち経験豊富になる頃には前線から離れなければならない、不安定な戦力に頼る事を嫌い、遊兵化してしまつてはいる通常戦力をどうすればよりネウロイに対して有効とする事が出来るかを探つた。

そして、將軍達は少しでも勝利の可能性を上げる方法を探つた。どうするのか、何か倒すべき手段・確証でもあるのか、を求めたのに返ってきた答えが「ウイッチに不可能はありません!」という根性論では作戦を立てる側としては採用する訳にはいかないので。

まあ、作戦自体は順調に推移した。被害を考慮しなければ。

五〇一戦闘航空団はベテランとエースが多数揃つた部隊であり、比較的経験の少ない部類に入るペリー・ヌ少尉、ビショップ曹長、宮藤軍曹らも他部隊ならば立派な戦力に数えられる実力を有している。激戦ではあつたが、戦闘航空団は欠員を出す事なく、最終作戦は発動した。

ネウロイ化した大和が空を飛び、一撃を加え……だが、そこで停止した。

魔導ダイナモが低下したのか、それとも無線操縦装置が故障したのか……とにかくあと一撃、あと一撃が放てなかつた。

撤退を決意した指揮官らを尻目に飛び出そうとしたのが坂本美緒であつた。

彼女は自分がもう飛べなくなる事を悟つていた。

既に力を吸い上げる妖刀と呼ぶべき烈風丸からすら力を引き出せなくなり、大型ネウロイどころか小型のそれすら倒せなくなつた自身の最後の戦場と思い定めた為であつたが……。

「なんだ、あれは」

飛び立とうとした瞬間、彼女らは新たな存在に直面する事となつた。

坂本美緒だけでなく、天城に移乗していた杉田大佐や、ミーナ中佐も同じような言葉を呟いていた。

「美緒、あれはネウロイ?」

離陸直前だつたが故に駆け寄ってきたミーナの言葉に急ぎ、眼帯を外して魔眼で見てみるが……。

「……いや、コアがない。あれはネウロイじやない」

「だとしたら、あれは一体……」

出鼻をくじかれたが故に、一旦飛行甲板に着陸した美緒と並んで二人だけでなく五一戦闘航空団、いやオペレーション・マルスに参加し、それを見る事の出来る位置にいた全員がその姿を見詰めていた。

そう、突如空に出現した巨竜の姿を……。

「ネウロイが!」

富藤芳佳が叫ぶが、直後、エーリカ・ハルトマンが「おー」と感嘆したような声を上げた。

それはそつだろつ、無数のレーザーと思われる光と何か分からぬ黒い光(という言い方も変だが)によつてあれだけ多数いたネウロイが瞬時に空から消えたからだ。

もう、一機残らず、あつという間に片付けられた。

その姿に複雑な思いを抱えている者もいた。

ミーナもそうだったし、バルクホルンやサー＝ヤやエイラもそうだ。

彼らに共通しているのはいずれもネウロイによって母国を失い、家族と音信不通になつたり、といった共通点を持つ。彼らからすれば、これだけの存在がいたのなら、何故もつと早く、という思いがあるからだ。

いや、これが味方とは限らない、などと考えてはいたが……。

「いや、ネウロイとてお互い相打つ事も原因は不明だがある事は分かっている……あいつだつてその可能性がまだない訳じゃ……」

そう呟いていたバルクホルンの言葉に、誰も反論は出来なかつた。現在のベネチア上空に位置する巨大なネウロイの巣。それが出現した際、それまであつた巣は破壊された。黒ズボン隊を率いてトライヌス作戦を行つた竹井醇子の目前で、人型ネウロイがネウロイのビームで攻撃され消滅する、という光景を人類は目撃している。だが……。

「でもコアがないんだよね～？」

ハルトマンの言葉にバルクホルンも沈黙した。
困惑しているのは他の一同も同じだ。
強大な咆哮が響いた。

「きやつー」「うわつー」

それを合図としたかのように激戦が繰り広げられる。幾つものネウロイが出現する。

中には大型のネウロイすら混じつてゐるし、これまで五一戦闘

航空団が相手をし、苦戦したのと同型とも思えるネウロイすらいる。

だが、それでも関係ない。

その全身から放たれる光は、闇は確かに一撃ではネウロイのコアを外す事もあるかもしれない。だが、一体辺り数発が襲い掛かれば全体が消えてゆく。

その一方で、ネウロイからの攻撃は全く効いていない。

如何に数に差があるうど、これでは結果は見えている。

ネウロイも最早、連合艦隊への攻撃は全く行っていない。全力で竜に対して攻撃を仕掛けている。

その竜は……。

竜自身はその口元に力が集結してゆく。

あれは何だらう、とウィツチの誰かが思った。

単なる砲撃ではない、でも魔力でもない。恐ろしい程の力でありますながら、けれど恐怖を感じない。

その力が放たれ……超巨大なネウロイのコア、巣のコアを飲み込んでいった。

次の瞬間、独自にコアを持つもの以外の小型ネウロイが全て粉々に砕け散った。すなわち巣が破壊されたのだろう。残るネウロイも瞬く間に破壊された。

「凄い……」

「そう呴いたのは誰だつただろうか？」

「でも、あいつが次にこっち来たら勝てんのか？」

そう空気を読まずに呴いたのはエイラ・イルマタル・ユーテイライネン。少々空気を読まない所があるというか……お陰でサー二ヤから「エイラ！」と叱られているが、その言葉に戦闘航空団一同だけではなく、近くに来ていた航空機の搭乗員や整備員、乗組員らも固

まつた。

先程の一撃で、巣となる超巨大コアだけでなく、ネウロイ化した大和まで消滅した。

さて、現在の疲弊した戦力で、ネウロイをたたた一匹で圧倒した竜に勝てるだろ？ 答えは否だ。

（素直に帰つてくれれば良い。だが、果たして帰還してくれるのか？……万が一に備えておきたいが、下手に戦闘準備を整えて、こちらを敵と看做されたら……）

扶桑皇国海軍では杉田大佐が樽宮をはじめとする参謀らと話した上、警戒は怠るな、だが武器は向けるなど命令を下した。

これはロマーニヤ公国のレオナルド・ロレダンを初めとする他国艦隊でも同じであった。

戦えば負ける。それを理解していたからだ。

突然、ぐるり、と竜が回転した。

直後に吼える。

だが、それは先程の戦闘開始を告げるような声ではなく、優しい声だった。

船で燃え盛る炎が静かに鎮火し、消えてゆく。

海が盛り上がり、空を飛んで海に投げ出された者達が次々とまだ生き残っている船に運ばれてくる。

海で艦上で怪我で呻いている者の怪我が急速に癒されてゆく。
しばらぐは果然としていた者も多かったが、次第に歓声が広がってゆく。

「……どうやら、味方と思つて戻さうだな」

「まあ、敵ではなさうですね」

そんな会話が天城の艦橋でも為された。

と、そんな中、ふつと竜が姿を消し、次の瞬間には天城の真正面にいた。そんな気を抜いた一瞬と重なった為に思わず彼らも驚きの声を洩らす。だが、その迫力を前にしてふと気付いた。

今、目の前にある存在は恐怖をもたらす存在ではない。むしろ、扶桑の人間にとつては懐かしい、そう、歴史の長い神社仏閣を訪れた時、自然と頭を下げたくなるようなそんな雰囲気を纏っていた。その視線は坂本美緒へと向けられていた。彼女も何かに魅入られたかのようにその視線を向けていたが、やがて竜は軽く吼えると、そのまま空高く舞い上がり、やがて雲と同程度まで上がった次の瞬間には忽然と消えさせていた。

「ふう……なんだつたのかしら」

ミーナ中佐が思わず呟いて、傍らの坂本少佐に視線をやると、彼女は呆然と自身の両の掌を見詰めていた。

「……美緒？」

「……感じるんだ」

思わず、といった様子で声をかけたミーナに美緒は呆然としたまま呟くように言つた。

「全盛期よりは落ちてる。けど……間違いなく私の中から魔力を感じられるんだ」

疾風丸によつて残り僅かなそれも全て吸い上げられたはずだった。だが、それが再び感じられる。

試しに履いたままだつたストライカーゴーライトを軽く動かしてみるが、少し前までの飛ぶのもやつとな感覺は全くない。再び甲板に降りて来た彼女は泣き笑いのよつな顔でミーナに言つた。

「飛べる。……私はまだ、また飛べるんだ……」

そんな彼女をミーナは黙つて笑顔で軽く抱き寄せた。

そこへ五一戦闘航空団の一団も笑顔で押し寄せてくる。いや、彼らだけではない、艦隊全体でよつやく勝利したといつ実感が湧いたのだろう。歓声が聞こえてくる。

「これにて、オペレーション・マルスの完了を宣言する」

そう放送をかけてから、杉田大佐は空を見上げた。

今回の作戦は成功したとはいえ、色々と不備も発覚した。今後はその辺りの修正に大忙しになるだろう。だが、とりあえずは……勝利した事を喜ぼうではないか。

この日、人類はまた奪われた空の一部を奪回する事に成功した。

異伝4・ストライクウイッヂーズ編（後書き）

今回はストライクウイッヂーズ第2期です

あの作品も色々突つ込み所の多い作品ではありますけど……ウイッチを前に出したくない、という人にも色々いると思うんですよね。実際、司令官級の人達になれば、下手したら自分の孫と同じぐらいの女の子を、ただウイッチだからという理由で最前線に放り出す、つてのに忸怩たる思いを持つている人は決して少なくないのではないか、と思います

ストライク世界のウイッチは基本、20歳ぐらいでシールドに必要な魔力を失うので前線から離れないといけない（一部例外あり）

逆に言えば、ウイッチ達はちょっと年配の兵士になれば自分の娘ぐらいの子、つて人は多いでしょうし、第一期のマロリー大将だけじゃなく、純粹に前に出したくない、何とかしたい、つて人は決して少なくないんじゃないかな、つて思つてみたり

もっとも【竜王】自身はそこまで介入するのはよくない、つて思つてるのでこの場面だけで帰つてますが

異伝5・リリカルなのは編2

「一体俺の時間軸はどうなってるんだ。ふとそう思った。

理由は単純だ。目の前にどこか生氣の抜けた様子で立ちすくむ人の少女の為だ。

彼女自身とは会話は為しえなかつたが、彼女の抱くまだ幼い竜とは意志を通じる事が出来た。それによると幼竜の名はフリード、少女の名はキャロ・ル・ルシH。

もうお分かりだと思うが、リリカルなのは第三期で登場した彼女である。

あの後はちよこちよこの世界にゲートを設置して入り込んでいる。

ゲートなんて言つてるが、要は目印をつける事で、一いちらの世界を見失わないようにしている、というのが正しい。
さすがにあの時点では、あの状態の彼女を放置するのは忍びなく、とはいえ俺には接点のある管理局の人間なんておらん。
で、まあ、信頼出来そうな奴を探してあちらこちらの次元世界を回つてみたのだが……。

「……本気で酷い世界だよなあ

表立つては確かに平和を享受している世界なのかもしれない。

だが、裏では酷いものだつた。

ちなみにエリオも実は既に回収済みだ。

言つておくが狙つて回収した訳ではない。ある次元世界に入り込んだらジャストタイミングで連れ去られる所に介入してしまったのだ。このタイミングの良さに苦笑してしまつた。……最近では本気

で因果に干渉してゐんぢやないかと思つ。

「 やあ、元氣かね？」

にこやかにやつて來た男に領きを返す。

当初は真つ当な人間のやつている孤児院を探してキヤロを預けた。……いや、だつて俺のこの団体じや子育てなんて出来ないし……もちろん、あれからも接点を持つ事で竜の暴走は完璧に抑えてあげます。今では、キヤロの竜制御は完璧、といつていい。

……管理局もなあ、保護するならきちんと制御方法教えてやれよ。教えもせずに役立たず扱いとか何考えてるんだ、と言いたい。

ちなみにこの世界は一応管理世界ではあるが、殆ど人がいない穏やかな世界、だった。

だつた、というのは俺が仮の住処としてるのが広まつてしまつたせいだ。主に裏で。

管理局はオーバーS級口ストロギア【竜王】と呼称してゐるのも知つた。

お陰で回収なんぞと抜かしてやつて來た奴らがいたんだが……つむ、【説得】してお帰り頂いた。

だつて高圧的なんだもん。

或いは問答無用か。

次元航行中では魔導師は役立たずだ。だからこいつと巡航艦との戦闘になる。

で、もつて……この連中つてはつきり言つて弱いんだよな。とにかく射程が短すぎる。

完璧に魔導師偏重の弊害だな。余りに射程が長すぎたら、魔導師が役立たずになるつて恐れてるんだろう。まあ、アルカンシェル搭載の空母と見ればまだいいのかもしれないが……。

さて、そんなこんなで不可侵領域と化しつつあるこっちでの俺の住処。そうなると、そこに逃げ込んでくるような連中、入り込んで

くる連中もいる。……迫害を受けるような奴らとか、犯罪者だ。
もちろん、犯罪者連中でこの世界でも支配をしようとした連中は

悉く殲滅してきたけどな！

昨今ではキャロが俺の巫女みたいになつてゐる。……フリードに意志
を伝え、フリードからキャロへ、つて流れだ。

最近ではヴォルテールまで移住してきたお陰で、余計意志を伝え
やすくなつたのは有難い。

え？ キャロのいた世界の守護竜的なヴォルテールが移住してきて
大丈夫なのかつて？ さあ？

当人曰く、自分の愛し子を迫害するような連中なんぞ知らん、だ
そうだが。

さて、話を戻そう。

移住してきた連中の中で、一際大物がいた。それが目の前の男ジ
エイル・スカリエッティだ。

こいつだけは物怖じしなかつた、とにかく。

なんだが、最近は随分と吹っ切れた様子だった。

とはいって、言葉が通じないのは未だ同じなので、黙つて頷いてお
く。

「 どうか、とりあえず念話を改良してんんだがねえ。なかなか上
手くいかんものだ！」

「 どことなく嬉しそうなのは、こいつの場合難易度が高い程やる氣
になるからだろ？」

いや、本当に簡単な事と不可能と思える程難易度が高い事とじや、
やる気が全然違うんだ。今は、俺が念話を使えるようになれば、と
色々と改良を繰り返している。

「 まあ、そう遠くない内に完成するだろ？ 期待していくてくれた
まえ！」

笑いながら帰っていくジェイル・スカリエッティ。

……ここに来てから、フリーダムになつたよなあ、とつくづく思う。

実はスカリエッティ、ここに来てからは研究内容が大幅に変わった。

戦闘機人はいるんだが、俺には通じない。

最初の頃は色々とちょっかいをかけてきたんだが……最近では手を出してくるのは純粋にバトルマニアとして勝負を挑んでくるトレ、意地で一度ぐらいは勝つてやるというか誤魔化してやると幻術を試すクアットロぐらいか……。ちなみにシルバーカーテンが俺に通用した事は未だ一度もない。

で、意外だったのは俺との話の後、さつさと遺体保存していた連中を復活させる事に専念、解放した事だ。

お陰でルーテシアとメガーヌは今ではここで暮らしている。……いや、初期は色々わだかまりがあつたようだが、最近では大分関係修復が進んだようだ。

……スカリエッティに関しては、この世界にやつて来た時、俺に問答を仕掛けてきた、というか答えを知りたかった、というべきか。人を超えた何かなら、自分に対する答えを返してくれるんじゃないか、そう思つたらしい。

キャロという通訳を介して返した答えは単純だ。

『無限の欲望、とは何か』

『人間』

うん、人間程、色んな欲が尽きないものはないと思う。

そもそも生きる事自体が三大欲求として認められている、すなわ

ち食欲、睡眠欲に性欲だ。

それ以外にも金が欲しい、あれが欲しい、これが欲しい……マニアだのオタクだの呼ばれている人間の特殊なものも含めればもうきりがないし、それに終わりはない。

だから、アルハザードの『無限の欲望』ってのは他ならぬ『人間』を生み出す技術だつたんじやないか、そう思つてたんだよねえ。スパロボRのデュミナス（あれ、P.Sに移植されたデュミナスより一番最初の方が良かつた……）も、創造主は人を作り出そうとしたんじゃないかと思う。

まあ、その辺を言つてやつたら、きょとんとした後、大笑いして問い合わせてきた。

『じゃあ、今からでも変われるかな?』

『その気があればな。お前の場合、才能には苦労していないみたいだし』

いや、本当に。

結局、こいつの場合、人造という事となまじつか才能があつた事が災いしたんだろう。おまけに傍にいたのがあの脳みそ三兄弟（兄弟じゃないけど）だし。

何と言うか、あれから本氣で反転したんじゃないか、つてぐらいに人の役に立つ技術開発に燃え出した。

いやさ、『非人道的なものなしで開発成功する方が難しいだろうが……』なんて言つたせいで、却つて燃えたらしい。

……困難が目の前にあれば、余計に燃えるタイプだつたみたいだ。今では別名で特許もアレコレ取つてる上、かつての悪名を知らない人達からは変わってるけど腕のいいお医者さんとして、この世界では知られている。犯罪者連中に対しても、本当の悪党というよりはやむをえず裏の世界に入つて、それに疲れた、つて奴らが多いから

この世界でのんびりと畠やつたりしてゐる人が多いからなあ……スカラエックティの事も黙つてゐるみたいだ。

え？ 本当の悪党連中？ 一時的には隠せても、すぐにボロ出して悪事を始めようとするとから潰してゐに決まつてゐじやないかね。けど、ようやつと意志を通じさせる事が出来て、念話が出来るよう改良されたらもつと住みやすくなるなあ、こいつの世界……。

ちなみに、この世界が管理局から第01管理不可世界『龍王の庭園』などと呼ばれている事を全く知らない【龍王】であった。

異伝5・リリカルなのは編2（後書き）

巫女さん的な子……

つて訳で、キヤロになつてもらいました

正確には、【竜王】 フリード キヤロの伝言ゲームですがw

スカリエッティに關しては見てる限り、人間だよなあ、つて感じでしたね

とにかく、自分の欲求に素直な面はありましたけど、そこらへんは教育の問題だと思います

だって、教育したのがあの三脳だし……

密かに次元世界でも発展してゐる世界になりつつあります

管理局では素直に協力を求めるべきだ、つて派閥討伐すべきだ、つて派閥など実はかなり混乱状態だったり……そこ等への続編は書くかなあ……

異伝6・リリカルなのは編3

ふう、とリンディ・ハラオウンは深い溜息をついた。

彼女は実質引退していた。

理由は単純、引き取ったフェイト・テスタークロッサ・ハラオウンの存在だ。

彼女に親として愛情を注いあげたい。その思いから彼女は提督に在籍はしていたものの、半ば引退を決め込んでいたのだ。これが認められたのには、出世を狙う連中から彼女が危険視されていた事も大きかった。

何しろ、ジュエルシードに伴う次元震解決、闇の書の完全消滅に関わるなど立て続けに大きな案件を片付ける事に成功した彼女だ。このままいけば、管理局の三提督を継ぐ立場へと昇進していくのは、と思われていた所へ彼女から「養子に迎えた娘と一緒に暮らしてあげたいので今の地位から退かせて下さい」と言つてきたのだから、渡りに船だつただろう。

そのフェイトが自立した後も、特に目立つ席につくつもりはなかった。

既に子供一人は確固たる地位を築きつつある。

クロノは提督の一人として、エイミィと結婚して家庭も設けた。フェイトはまだ子供はないが、かつての夢だった執務官として忙しい日々を送っている。

だから、自分としてはこのまま縁の下の力持ちをして、そのまま引退して孫の面倒を見る生活もいいかな、などと思っていたのだが……。

「全く、何でこんな事に……」

「しょうがないじゃない、なり手がいなかつたのよ

目の前では友人であるレティ・ロウランが苦笑している。

現在問題となっているのは第0-1管理不可世界『竜王の庭園』だ。この世界、管理世界の只中にあり、以前は一応管理世界に加わっていたが……諸事情により人口が極めて少ない、寂れた世界だったのである。

それが一変したのは、闇の書事件で出現したオーバーS級生体口ストロギア【竜王】の存在だった。

当初は同一存在かは不明だったが、その後の確認で同一存在であると認定された。

そこで回収艦隊が向つたのだが……全てが惨敗した。

「……アルカンシェルを時間差で連発しても全然効果なし、ってどういう相手よ」

当初は鹵獲というか捕獲といつ名の回収を目指したらしい。

だが、言葉を理解はしているようだが、回収を拒絶された事から当初は鹵獲に移行したのだが……完敗状態で、やつとこさ航行可能な状態でふらふらになりながら離脱、完璧に見逃してもらった、という形で終わつた。

そこで次はもう殲滅するしかないと覚悟して向つたのだが、砲撃加えても全然効果なし。遂にアルカンシェルを放つたのだが……直撃にも平然としていたというからもう何をか言わんや、だ。

ここに至り、管理局は何とか会話を成立させるべく、交渉役を求めたのだが、なり手がない。最終的に白羽の矢が立つたのがリンディ提督だった、という訳だ。正確には伝説の三提督に拝み倒されたというべきか。

「はあ、まあ【竜王】が積極的にこちらに攻撃をかけてこないだけマシと思つしかないわね……」

「相手にされてないだけかもしれないけれどね」

そのレティの言葉に、一人して苦笑する。

あの世界もただ【竜王】だけがいるのならば放置か、封鎖しておけば良かった。

居場所を失つた流浪の民らが新天地として流れ込んだ時も、これで各管理世界での問題の一つが解決するとむしろ歓迎された程度だ。問題だったのは、管理世界の犯罪者らが逃げ込んだ事だ。

「あれさえなれば放置しておいても良かつたのに……」

管理局の艦船があれからあの世界に近づけないかといえば、そんな事はない。

幾度となくあの世界へと向かい、降り立つた者もいるが、その殆どが犯罪者を連行しようとした瞬間に【竜王】にたしなめられ、それに反発して撃滅された。

「フェイトも困惑していたわね

愛娘であるフェイト・テスタークッサ・ハラオウンはあの『竜王の庭園』に降り立ち、帰還した数少ない魔導師だ。

彼女によると、困惑したといつ。

あの世界では犯罪者だった人物が真っ当たり生きている、というのだ。

ある農場で大規模農業を行つてゐるのがフッケバイン一家だと知つた時は驚愕したという。彼女ら曰く、【竜王】のお陰で自分達の感染や衝動が完璧に抑えられているのだといつ。

自分達とて好き好んで犯罪をしていた訳じゃなく、自分達の持つ要素の影響がなくて、穏やかに暮らせるというのなら、それでいい

じゃない、という話だつた。むしろ、彼らのような感染者がいたら、この世界に来るよう一応声をかけてくれないか、という旨を伝えられた程だ。

とにかく、フェイントは今回は調査に専念する事にして、犯罪者だった人物らにひたすら接触を図つた。原因は下手に手を出して、未帰還となつた同僚達の存在ゆえだ。

部下らに対しても、それが出来ないなら艦に戻るよう通達し、手を出さない事を徹底させた。

そのお陰で、かなり詳細な情報が集まつたのだ。

「外の世界で犯罪を犯していようが、あの世界で犯罪を犯さないなら放置する。けれど、新たに犯罪を犯すなら容赦しない、か……」

管理局に対しても敵対する腹はない。

そこで自分達のルールを適用するなら容赦しない、といつ事のようだが……管理局からすれば、管理世界で犯罪を犯した以上は何らかの処罰を与えないといけない。

もつとも、現状ではあの世界自体を牢獄と看做し、通常の移民はともかく犯罪者に関してはあの世界から出ない事を条件に、犯罪者には手出ししない事が現状まとまりつつある。

とにかく、あの世界では力を制御出来なかつた者達が、それ故に疎まれ、それ故に犯罪に手を染めてきたような者達が次第に集まりつつある。

気持ちは分からぬでもない。

あの世界では、多少の暴走など押さえつけられるだけの力の持ち主がいるし、そもそも暴走する前にやんわりと制御されてしまう。

竜の巫女、そう呼ばれる少女も『初めてこの世界に来た頃は暴走してもおかしくなかつたんですよ』と笑つていたといつ。けれども、常に彼女の傍にいる竜フリード程度ではそもそも暴走すら出来なかつたといつ。穏やかにフリードを通じて、制御をじっくりと学び、

そうして彼女の今があるという。

……正直、スカウトしたい人材だ。他にもそういう人材はいるら
うしている。

最近では、「犯罪者に対しても何かしらの利益を求めるべきだ」「うまく制御でき
ずに折角の力を扱えずに入り人材をあの世界に送つて制御を学ばせ
てはどうか」といった意見もあるそうだ。

実際、可能ならばその方向でまとめて欲しい、と内々に話もされ
ている。

「まあ、頑張つてまとめてきなさいな」

「気楽に言わないでよ……」

多分大丈夫ではあるが、物凄く気疲れするであろう仕事なのは
間違いないのだから……。

異伝6・リリカルなのは編3（後書き）

お休みだったのでも、一氣にもう一話
管理局からすれば、犯罪者が集っている以上、放置できませんでした
せめて言葉が通じれば、話は変わったんでしょうが、次元航行中では
は通訳もおりず……

ジエスチャーだけでは限界があつて、戦闘に突入しました
誤解が招いた悲劇というのが近いかな？

二度目は前の事があつたので、最初から戦闘やむなし、で向つて……
でも駄目だつたから、こうなれば何とか対話で解決できないもの
かと探つて……このようになつてます

異伝7・リリカルなのは編4

今回の派遣に息子と娘の一人もついて来たいと願つたが、置いてきた。

最悪、全滅する可能性もある。そんな所に一人を連れて行くつもりはない。

無論、口に出したりはしなかつたし、表向きは「二人とも仕事を放つて行く訳にはいかないでしょ？」と藁つて出てきたが、二人とも頭のいい子達だ。あの様子だと理解した上で、それでも笑みを浮かべて私を送り出してくれたのだろう。

「リンクティ提督、間もなく『竜王の庭園』です」

管制官の声も緊張を隠せないでいる。
さあ、ここからが本番だ……。

【SIDE：転生者】

最近、管理局への対処に困っている。

彼らにも色々いるし、何より彼らが来る理由も分かるからだ。

……そりやあ、犯罪者がゴロゴロしてりや、逮捕しに来るよなあ。最初に来た艦隊の司令官は実の所、かなりマシな部類だった。色々な方法でこっちに『そちらに犯罪者が逃げ込んでるから引き渡して欲しい』と連絡してきたんだが、うん、こっちは向こうの言葉は理解出来るんだが、伝える方法がないんだ……。

せめて、地上に降りてくれればいいんだが、かといつて代表一隻だけ降りて下さい、ってどう云えればいいのやら……。

しうがないので、ついておいで、つてつもりで背を向けたら拒

絶されたと判断した連中がいたらしく、攻撃開始となつた訳だ。

そんな状況だから、こっちとしても一旦撃破して退散に追い込んだ訳だが……。

次に来た連中は大分強硬だった。まあ、前回がアレじゃなあ……、元々が誤解にあるからな……艦隊戦と呼んでいいかはともかくとして、こっちも幾隻かは叩き落したが、基本は追い返すのに腐心した。

何とか意志疎通が出来ないもんかと思って、一隻だけの調査に来た場合は見逃していたんだが、来る連中来る連中どうしてこいつらえ性がないかね……結局十隻来て、調査と話し合いだけで帰ったの一隻だけだった。

……片方がフェイトだったんだが、彼女が手を出さない事を選択したのは、矢張り『闇の書事件』でこっちの力を見ていたからなんだろうか？

もう一隻はフェイトの後だったから、手を出さないなら帰れると教えられてたのかもしれない。

そんな所へ新たに一隻の船が来た。

いやあ……タイミングよかつたね。とはいえる、こつからは重々しく話さないと拙いだろう。……軽い口調の方が楽とはいえ、交渉時にへらへらした態度を取る事がんまりよろしくない結果を招く事ぐらいは誰だつて理解出来る。

さて、そんじや行くか……。

【SHIDE・リンクティ】

「…」ひかりは時空管理局のリンクティ・ハラオウンです」

とにかく今回はありとあらゆる通信手段を搭載してきた。

アルカンシェルを積んでいても役に立たないのなら、と割り切つて、それを取り外してまで通信手段を搭載してきたのだ。中には翻訳機も混じっている。

とにかく意志疎通が出来ないと話にならない。だからこそ、言語解析の為に大型のコンピュータまで搭載してあるのだ。

『聞こえている何用か』

だから、素直に念話を響いてきた時は驚いた。

この次元航行状態で念話を、この距離で飛ばしてきた事にもだ。

『そう驚く事もあるまい。先だって、この地に移ってきた者の人が私用の念話を完成させてな』

なんと……。

同時に、何故もつと早くそれが完成しなかったのかと思つてしまふ。

……それがあれば、あの悲劇はなかつたのかもしれない。
そう、悲劇だ。

【竜王】自身はそこまで叩き潰す意志はなかつたのかもしれないし、全般的に見れば見逃してもらえた、といつてもいいかも知れないが、だからといって無傷で済むはずもない。
いや、よそう。今更言つてもせんのない事だ。

「そうでしたか……その方の名前を伺つても？」

ジエイル・スカリエッティという名前を聞いて、体が傾きそうになつた。……高名な次元犯罪者の一人ではないか！……彼もこの地に移住していたのか。

とはいって、娘が集めてきた話では、この地で犯罪を犯せば、【竜王】に粉砕されるというから、ここでは犯罪を犯していないのだろう……多分。

……しかし、この地には実は相当な戦力が結集している。その大多数はこの地へと移民した、或いは逃げ込んだ者達が乗ってきた船だが……これがこの地を放置出来ない理由の一つになつている。

飛翔戦艇フックエバインが代表例だが、この他にも管理局の艦船に対抗可能な大型戦闘艦船だけで二十隻以上が存在し、更に通常の輸送艦、移民船、貨物船などを合わせると既に下手な管理世界を大幅に上回る防衛力と交易能力を備えている。……おまけに最近では新技術すら開発されている。

だからこそ、この地を無視出来なくなつたというか……。

『それで如何なる用事かな?』

そうだった!とにかく、これは好機だ。
話し合いで解決しなければ……。

幸いというか、【竜王】自身は極めて穏やかな性格だった。力をもてあまし、制御出来ずにはいる子などの訓練も引き受けてくれる事になつた。その為に、この地には管理局の訓練施設の一つが設けられる事も決まつた。……もっとも、下手に探つたり、逮捕して連行しようとするなら容赦しないと念を押されたが。

これに関しては管理局でも徹底しなければならない。

【竜王】からはこう告げられた。

『暴走する者がいる、中には正義感から突つ走つてしまふ者がいる。確かにそうだろう。組織が大きくなれば当然そのような人材が混じるのは当然の理屈だ。だが、それはあくまでそちらの事情に過ぎない。そちらが制御出来ぬのならば、それが招く事態に対しても

彼らを選抜した汝らも責を負う。それは忘れぬ事だ』

つまり、暴走した人間が出たら、管理局本局にも責任を取つても
「らづ、といふ事だ。

これとは別に、犯罪者、だつた人達との対話も積極的にこなした。
この地……正確にはこの次元世界全域にいる限りは私達は手を出
さないけど、ここから出る場合はこれまでの犯罪の都合中、追わざ
るをえない、という事を伝えたのだ。

大抵の者は苦笑していただけれど、一部の承諾は求められた。
つまり、自分達以外の移住者の交易は認めて欲しい、という事だ。
その中に、自分達が欲しい物が混じっている物や、作つた物が混じ
つているかもしれないよ?という話だつたが……まあ、それぐらい
はこちらも譲歩する。ただし、違法な物であれば取り締まざるをえ
ないけれど……。

後に、管理局本局や地上局が使用している装備にもこの地で開発
された品が混じっている事を知つた時には諦めの境地に至るしかな
かつた。……誰が開発したのかは怖くて聞けなかつたけど。

異伝7・リリカルなのは編4（後書き）

幾人かの方から「竜王甘くない?」って話がありましたので補足甘く見えるのは、管理局の気持ちも分かるからです
犯罪者が逃げ込んでいれば、逮捕に来るのはむしろ当然じゃないですか?

自分の事情で追い返してるけど、気持ちも分かる
なので、追い返すだけですませてます

異伝8・リリカルなのは編5

「うーん」

フェイトが悩んでいるのを見て、高町なのはも首を傾げる。
もう一人の友人である八神はやは理解しているのか、苦笑を浮かべている。

この辺は双方の立場の違いだろう。

なのはは航空戦技教導官。

はやは現在は特別捜査官。

かつては同じ小学生であり、中学生だった三人だが、管理局が職場である以上はプライベート時は今でもこうして普通に笑い合い、話をする仲の良い友人同士でも、職務上知りえる内容にはどうしても差が出る。

最も、なのはの場合、その職務上顔が物凄く広いので、その気になれば幾らでも情報を入手可能だらうが、そこ等へんは真面目なのはの事。情報漏洩をお願いする訳にもいかないと、疑問に思いつつも、ここ数日放置していたらしいのだが……はやはに相談してきた所を見ると、やはり気になつて仕方ないらしい。

「フェイトちゃん、なのはちゃんと話してあげた方がええと思うよ」

苦笑して、悩む友人に言う。

「……いいのかな」

一応機密に属する内容だ。

彼ら友人でも、仕事となれば語つても良い事と悪い事がある。

しかし。

「大丈夫や。『庭園』の事やろ？それやつたら、航空教導隊所属なら大丈夫だろ？って事で許可うちがもろうてきたよ」

その言葉にほつとした顔になった。

はやてちゃん何時の間に……と、なのはが眩いていたが、なのはから相談を受けた時点で特別捜査官には全員に密かに出回っていた内容の事だろ？と察して、申請を出していたのだった。

幸い、航空戦技教導隊は本局のエリートだ。しかも、なのはは有名人。割とあつさりと許可が出た。

これが地上局に所属しているシグナムだつたら、幾ら自身の守護騎士であつても許可が出たかは怪しい。

「そつか……なら大丈夫だね」

少なくとも、悩んでいる時に誰か親しい人。
職場の同僚とはまた異なるプライベートで相談出来る相手がいる
といつのは矢張りありがたい。

「『庭園』？ひょつとしてそれつて新たに設けられたっていう管理不可世界の事？」

とはいえ、なのはも丸つきり知らなかつた訳ではなかつたようだ。
どうしても内部の事、情報統制も甘くなるというか、人の口に戸は立てられないというか……情報とはどこから洩れるものだ。

「そう、正式名称は第01管理不可世界『魔王の庭園』。……オーバーS級生体ロストロギア【魔王】の支配する世界、そして多数の犯罪者が逃亡している世界でもあるんだよ」

「犯罪者つて！」

なのはが思わず驚いた声を上げる。

そんな、なのはを宥めるようにはやても口を開く。

「仕方ないんや。聞いた話やど、【竜王】はあの場所で新たに罪を犯さない限りは手出し許せん、ちゅう事らしこんや」

「うん、管理局も何とかしたかつたらしいんだけど、結局、あの世界を牢獄扱いにする事になつたんだ」

「なにそれ！」

フェイトもはやても、なのはに管理局艦隊が一度に渡つて完敗したという情報は隠していた。

この友人は結構激情家なのだ。

まあ、幸いというべきか、なのはも管理局が正式に決めたとなれば、諦めざるをえない。渋々ながら納得したが、フェイトもはやても無理はない、と思っていた。何しろ、フェイトが悩んでいる理由も、果たしてこのままいいのか、という悩みだつたからだ。

最終的に正式な調印が行われる事になつた時、彼女らもそれに加わる事となる。

フェイトはこの地の調査から最初に戻つて来た執務官として。はやは特別捜査官として、逮捕はせずとも現状、この地にいる犯罪者のリスト作成の為に。

そして、なのはは募集された儀仗役の一人、管理局が傘下の精銳部隊から万が一の時の護衛として加わる者を求めた際に手を挙げた事で加わっていた。

「……なんでこいつなるの？」

そんな、なのはは困惑していた。

その腕の間には一人の少女がきょとんとした様子で見上げていた。式そのものはすぐに終結した。

【竜王】自身は大してこうした式典に興味はない。管理局が騙そうとしない限りは、手出しする気はなかつた。

そして、管理局としても下手に我を通そうとしても誰も幸せになれない事ぐらいは理解していた。

何しろ、既に判明しているだけで闇の書をあつさり消滅させてい。る。最低でもそれ以上のロストロギアを持ち出さねばお話にすらならない事ぐらいは誰でもわかるし、そんなもの持ち出せば下手したら【竜王】との激突で次元世界崩壊の危機だ。

(それぐらいならお互い見なかつた事にする。その方が全員幸せになれる)

そう、出てこなければ問題はない。

時折、交易船が出ているようだが、そちらの船は犯罪を犯していない移民の動かす船だ。護衛にちょっと見慣れた船がついてくる事があるけれど、きっと大丈夫だ。

実際、リストを作るのも「この人達は実質もう犯罪リストに載せておく意味のない人達」という意味での作成の為だつたりする。

さて、そんな中、それでもどうしても護衛の管理局員としては厳しい視線が向かざるをえない。

なのはもそんな一人だったが、ふと視線を感じて周囲を見て、それから下からその視線が来ているのに気がついた。

一人のオッドアイの少女がじっと自分を見上げて立っていたからだ。

「どうしたの？迷子？」

なのはとしても、子供を怖がらせる趣味はない。腰を下ろして視線を合わせて、優しく声をかける。

「お前は？お父さんの名前とか分かるかな？あ、私はなのは、高町なのは、って言つんだよ？」

「……ヴィヴィオ。ヴィヴィオだよ、なのはママ」

さすがにママと呼ばれた事に内心ショックを受けるが、顔には出さない。

まだ私二十歳にもなっていないのに……とか、ユーノ君との仲全然進展しないし……とか色々と想う事はあるのだが、その辺は心の奥底にしまつておく。

「おや、その子が懐くとは珍しいね」

そこへ一人の青年、といつていこぐらこの年齢の男性がやつて來た。

その男の顔を見ると、わざとヴィヴィオはなのはの服をより強く握り締める。

そして、その男の顔をなのははよく知っていた。

「……ジョイル・スカリエッティ」

頷いたスカリエッティはしばし、一人の様子を見ていたが、すぐ

に手をポンと打つて言つた。

「ちよづじい。その子の親になつてくれないかね？」

「はい？」

その後スカリエッティと睨み合つてゐるなはに氣付いて駆け寄つてきたフェイトがしばらくヴィヴィオを引き受ける形で、なはがしばらく話を聞いてみれば、元々はヴィヴィオは某所からの依頼で生み出した聖王のクローンなのだといふ。

某所とはどこのか、と思つたが、スカリエッティはいともあつさりと答えた。すなわち「最高評議会」であると……しかも、その目的が古代ベルカの戦艦である聖王のゆりかご起動の為と聞いては何も言えなかつた。

更にスカリエッティは「そもそも私自身が彼らに生み出されたからね」と笑いながら語つていた。

「覚えておきたまえ。君が知る以上に管理局の闇は深いのだよ。……なまじ、当人達は平和の為と信じてゐるから始末に終えんのだがね」

その言葉に、なのはとしては頃垂れるしかない。

さて、とやんななのはに構わず、スカリエッティは軽い口調で告げた。

そんな理由で生み出されたあの子だが、とりあえずこの地に来て、彼らからは自分も解放された。そして、自分のこれまでの成果は成功したものは全部破棄したように見せかけたと告げた。

「まあ、これが道具ならそのままゴミにすれば良いのだが、生きていふとなると【魔王】が煩くてね？ それであの子も目覚めさせた

はいいのだが、何しろここは閉じた地となる。ああ、我々は別に良いのだよ（抜け道など幾らもあるしね）。だが、その子はそういうのないだろ？」「

今回、【竜王】がやむをえない状況で引き取った子供達の内、管理局のスカウトに応じる事を決めた者や、外に興味のある子供で保護責任者としての引き受け手がいる者などが幾人か外に出る事になつていた。まあ、【竜王】によつて、良い面しか出していない事を指摘されたり、こき使おうといった裏面が即座にばれて仕置きされていた者もいたのは事実だが、原作のフェイトのような真っ当な者とて多数いたのだ。

むしろ、間違つた情報を提供する者より、管理局の正義に凝り固まりすぎているが故に、子供達を歪めてしまつと却下された者の方が多かつたぐらいだ。

「だからまあ、今回の子供達に紛れれば、まだ普通に出られると思つのだよ。子供達はまず一定年齢までは普通の学校に通う事を基本とされているらしいしね」

ただ、生まれが生まれだつたからか、周囲が知つた顔ばかりだ。既に目覚めた時には起動キーとしての使用は予定されていなかつた為に、普通に接していくのだが……如何せん、スカリエッティやウーノ、クアットロやトーレといつた面々の普通だ。

幸いと呼ぶべきか、最近帰つて来たドゥーエ、最近目覚めたチンク辺りはまだ子供にも人当たりが良かつたのだが……どちらにせよ、すっかり人見知りになつてしまつたらしい。

「なので、なついてくれる相手自体が殆どいなくてね？君が初めてなのだよ」

「まあ、そういう事であれば……」

なのはとしても、普通の日常を送らせてやつて欲しい、という事であれば否やはない。

フロイトも原作のエリオではなかつたが、一人の子供を引き受けていた。

結果的には、なのははある意味毒氣を抜かれた気分でミシードナルダへと帰還する事になるのである。

【別世界の『庭園』】

「……今日も目撃情報はなし、と」

『庭園』に潜り込んでいる監視員の一人は欠伸をしながら外へ出了た。

【竜王】の生存は基本は大竜王祭で行われるが、一応普段もこうして配備はされている。

実際には、ただ【竜王】を目撃したかどうかを送るだけでお金なりがもらえるので引き受けている、というだけの普段は別の仕事をしている男な訳だが。

【竜王】は毎日目撲するような相手ではない。何しろ衛星が使えないでの確認する方法が人の目による視認しかなく、竜種が多数生息する為に人が暮らすなど不可能な地域もある。そんな所で目撃情報がふつたり途絶えたなど日常茶飯事なのは各国も理解している。だから専門のエキスペートを派遣したりしない訳だが。

が、外に出た男はふつと気がついた。

「おお、【竜王】様が……」

悠然と舞つその姿を出た所で彼は目撃したのだった。

「何か今日はいい事がありそうだ」

笑顔になつた彼は、戻ると先程送つた情報に追加して、姿を目撲した事を送るのだった。

……あれ？俺今回、台詞なし？

異伝8・リリカルなのは編5（後書き）

次は予定ではマーヴラヴにしようとは思つたのですが……

うーむ、どの場面に介入するかが迷うんですね

1998年、朝鮮半島。

そこで一大作戦が展開していた。

光州作戦。

国連軍と大東亜連合軍による朝鮮半島撤退支援を目的とした作戦である。……そう、もう各国は朝鮮半島の陥落を確定したものと看做していた。

だが、そこにはまだ大勢の民間人が残っていた。

それを退避させる時間を稼ぐ、それが光州作戦の概要である。

その作戦は当初は順調に進んでいたが、混乱が発生していた。現地住民の中には脱出を拒む者もいた。

これはある意味仕方ない面もある。元々朝鮮の人間は故郷への良い言い方なら想い、悪い言い方なら執着が強い。ましてや、この後待っているのは難民キャンプでの生活だ。

BETAとの戦闘、その最初期ならば難民キャンプといえど、米国を初めとする各国のそれは高い質を誇っていた。当時はまだ人々は「しばらくは大変でも何年かすれば終わる」そう考えていたからだ。

だが、時が経つにつれ、BETAの脅威は増し、難民は増えた。

次第に各国にも余裕がなくなり、難民を養う為に税金が増え、治安も悪化した。次第に難民を厄介者として見る向きが強まり、難民キャンプの内容も悪化していった。

邪魔者、厄介者という視線を向けられ、食べる物にも困る生活を送らねばならないぐらいならこそ、というのは特に年配者に多かつた。もつとも、それらを見捨てる、というのは大東亜連合軍にはなかったのである。

ただでさえ、今回の一件で朝鮮は國土を喪失する。

國土という分かりやすい概念を失つた民の離散を食い止める為にも、「私達は貴方達を見捨てません」という姿勢を示す事は最も課題であり、だからこそ、彼らは予想以上に時間のかかる脱出の支援を日本帝国派遣軍司令官彩峰中将に頼んだ。

彩峰中将自身も悩んだ。

指揮権を持つ国連軍（米軍）からは日本帝国軍を別の戦線へと派遣する命令が来ていたからだ。

だが、同時に民間人を守る、という軍人として、人としてあるべき道というだけでなく、大東亜連合軍との関係維持という重要な問題もこの一件は含んでいた。

ただでさえ、米国の影響力は強大化していた。大陸にあつたソ連や中国といった国家が國土を喪失した上に歐州各国も衰退していたのだから、安全圏にある世界の工場として絶大な発言力を握つていた。まあ、米国は米国で、こんだけ莫大な支援をしているんだから、とんでもない額の金を使ってるんだからこっちの意見もしてくれ、といふのは当然だつただろうが……。

とにかく、日本帝国としては大東亜連合と連携する事で、発言力の確保が重要視されていた。また、それだけでなく、今後最前線となる国としては共に肩を並べて戦う事になる近隣諸国との関係悪化を避けたいという切実な思いもあつた。

最終的に、彩峰中将は大東亜連合からの要請を受けた。

国連軍総司令部は怒つたが、それでもまだ腹を立てるぐらいで済んでいたのだ。この時までは。

「BETAの侵攻が……」

最初の報告は新たなBETAの出現だった。

しかも、それがこれまで圧力の少なかつた総司令部に向つてゐるというものだつた。

急遽部隊が派遣されたものの、本来はこちらを担当するはずであった日本帝国軍がない為に撤退も時間たが足りない。

史実では更に地中侵攻も重なった結果、国連軍司令部が陥落。指揮系統の大混乱を誘発し国連軍は多くの損害を被る事になる、はづだつた。

その瞬間までは。

「！？前線より緊急報告！」

「何だ！」

大混乱の只中にある中、参謀の一人が苛立つたように通信兵を怒鳴りつけた。

だが、その報告は朗報であった。

BETAの侵攻が停止した、というのである。
……正体不明の【竜】の出現によって。

「……新種のBETAか？」

竜、などと言われて一瞬何を寝惚けた事をと思つた参謀だったが、すぐに新種のBETAかと考えた。BETAが出現するまでは異星起源の存在など笑い話だと思われていた。それを考えれば、竜みたいな何かがいてもおかしくはない。

だが、前線からの報告は更に混迷を深めるものだった。

『仮称【ドラゴン】とBETAが戦闘中』

それが前線からの報告であつた。

BETAの特性として、絶対に同士討ちをしない、というものがある。特にレーザー級はその認識が強く、彼らが攻撃を行う際は視

界が開くのがレーザー級の射界に入った事の合図となる程だ。

ところが、その【ドラゴン】は空を舞い、レーザー級の攻撃に晒されながら、それを物ともせず君臨し続けている、どころかそちらもそちらでレーザー+を撃ち放ち、BETAと激戦を繰り広げている、という。いや、激戦というのは御幣がある。何しろ、一方的に駆逐されているからだ。それが激戦に見えているのは、BETAが万単位に対して、ドラゴンが一匹だからに過ぎない。

それでも、熱した鉄板にバターを押し付けるが如き有様は圧倒的というのも愚かしい光景だった。

「……この際、相手が悪魔でも何でも良い」

参謀から連絡を受けた総司令は即座に決断した。

相手が何物だろうが、とにかくBETAと戦闘中で、BETAの侵攻は停止している。

先程、地中侵攻も確認された。すなわち、地中から吹き上がる形でドラゴンの真下から襲い掛かったのだが、そこへ待ち構えていたかのように黒い流れが叩きつけられ、瞬時に大損害を被つたという。それなら正体が何だろうが、それは後回しで結構。事が終わってから、それは考えればいい。

「ただちに前線の戦術機甲部隊を後退せろ！ 総司令部の撤収を急げ！」

最終的にこの正体不明の【ドラゴン】にBETAは他の戦線まで引き寄せられた。

このBETAの行動の結果として、総司令部も無事撤退に成功し、光州作戦は大成功に終わった。

が、これだけで終わらないのが世の常だ。

如何に成功に終わったとはいえ、日本帝国の派遣軍が総司令部の命令を無視した、という事実に変わりはなく、軍が命令違反を許容しては組織として成立しない。

独断専行は軍としてはむしろ近代的な軍隊では当然とはいえ、正式な命令が出ているのにそれを無視した、という場合は独断の域を超えて、立派な犯罪なのだ。

だが、幸いだつたのは被害が軽微であつた事だろう。

あくまで命令違反に対する処罰が求められたものであり、日本帝国においても彩峰中将自身が部下にも「これで処罰がなければ、軍が軍として成り立たぬ」と訴えがなければ、自ら出頭する事を決めていた事もあり、軍事法廷の開廷 자체はすんなりと進んだ。

米国からは裏で A-L-5 の為の生贊として過剰な要求を行おうとう動きもあつたのだが、米国にも真っ当な頭は大勢いる。損害が殆ど出ていない事もあり、過剰な要求は諸外国から信頼を失うだけで、しかも効果は薄いと看做し、A-L-5 陣形からもストップがかかつた。大東亜連合からの感謝と共に届けられた嘆願書もあり、最終的に彩峰中将に課せられたのは……。

【一階級の降格・中将 少将】

また、俸給の一年の返上、というものであった。

無論、それでも不満を述べる者がいたのは事実であつたが、彩峰愁閣の存命は大きかった。

部下らも閣下が受け入れているなら、と渋々ながら受け入れ、史実では悲劇と称され、後に多大な影響を与える事になつた事件はごく穏やかな、誰もが受け入れられる形で終わつたのである。

米国の国連軍総司令も腹は立つたものの、彩峰少将からの正式な謝罪、降格などの処罰、更に被害が殆どなかつた事などから文句は言つたものの、それを受け入れた。

さて、そうなると残つたのは一つ。

「コードネーム【ドラゴン】が何物か、だ。

戦術機のログに残されたデータから映し出されたその姿に誰もが絶句した。

全長50mを越す巨竜。

要塞級に匹敵する巨体と、その攻撃を物ともしない防御力、要塞級を伝つて群がつた戦車級や果ては重レーザー級の攻撃すら完全に無視し、その全身からレーザーと思われるものだけでなく、正体不明の攻撃すら放つのに加え、その飛行能力が全く不明だった。

翼はあるが、全く動かさずとも空に浮き、ゼロ速度からいきなり急発進。ある時はソニックウェーブを発生させてなぎ払い、ある時は全くそれを発生させず低空を通り過ぎる。

最低でも慣性制御・重力制御に加え、何らかの大気制御まで行っているのは確実であった。

この後、A-L計画の一環、A-L6として【ドラゴン】との接触、可能ならばその分析、せめて協力態勢の構築が新たに承認される事となる。

異伝9・マフラー編1（後書き）

とこう訳で、悩んだ末に光州作戦からといたしました
欧洲の場合、情報がまだまだ限られてるんですよねえ……
小説でドイツ編が出たんでもそっちも読まないと……時間が欲しい

世界の壁を突き破ったのはこれで何度目か忘れた。

ただ、今度の世界は別の世界で覚えがあった。

異質な存在が世界を侵食している世界……。

もう、マヴラヴの記憶なんて殆ど残つてない彼だったが、反面、そうした世界が悲鳴を上げている事はよりはつきりと感じる事が出来た。

だからこそ、力を振るつた。

とりあえずは、この寄生虫はきつちり掃除して帰らないと、後味が悪そうだ。

【SIDE:A-L4】

新たに出現したBETAと敵対する存在。

光州作戦終了後の人類の混乱は相当なものだつた。

何しろ、BETAが全く相手にもならない。

観測で確認されただけでも、最低でも重力制御・慣性制御・ベクトル制御。レーザーに見える何かを全身から何百何千と連射し、弾切れどころかインテーバルすら存在しない。

果ては、鉄源ハイブに飛来した【ドラゴン】は更なる一撃でもつて、そう、ただの一撃で鉄源ハイブを沈黙に追い込んだ。

BETAが一斉に撤退した事から、鉄源ハイブの反応炉は破壊されたものと見られている。

ただ、これだけなら、強いだけの存在だった。

だが、そこから問題が起きた。【ドラゴン】は鉄源ハイブの傍にしばらく滞在していたのだが、BETAのハイブの傍だ。そこは何も残つていなかつた。

……それが三日後にはハイブ周辺は再び豊かな自然が復活していった。

さすがに動物はまだこれからだろうが、草木が生い茂っていたのだ。

これには大混乱が起きた。

明らかに【ドラゴン】に植生を復活させる何かがあると判断せざるをえないからだ。

これで大騒ぎしたのは国内がBETAによって平坦にならされてしまつたソ連や中国など国々をBETAに奪われた国々だった。中には神の化身ではなどと言い出す者まで出でてくる始末だ。

香月夕呼は相手をそんな目で見る事はなかつたが、少々不機嫌ではあつた。

可愛がつてゐる霞が急遽出張する事になつたからだ。

AL3の生き残りである彼女は、夕呼にとつて頼りになる助手でもあつた。だが、今回国連でソ連が活発な活動を行い、それにBETAによつて国を失つたり荒らされた国々が同調して、AL3の生き残りを用いた接触を試みたからだ。

複座型の戦術機に乗せて、至近まで近寄らせる。

正直、夕呼としては霞を、あんな相手の傍に近寄らせたくなんてしたくなかったのだが、国連からの正式な命令ではさすがに彼女も分が悪かつた。平穏な接触という予定でもあつた事だし。

……もつとも、彼女はそんなお題目を信じていた訳ではなかつたが、無事、霞が帰つてきて内心、ほつとしている所だつた。

「……敵対するつもりはないそうです」

「ご苦労様、と他の人間には見せないね、うつ笑顔と共に昨今では手に入れにくくなつたセイロンティーを出してやつて話をする中、霞から告げられたのは、心を読んだ結果ではなく、伝えられた言葉。

「……話しかけてきた、つて事？読み取つたりはしなかつたの？」

「あの人的心は……例えるなら海です」

今回外に出た事で、初めて見た海。

その海の如く広大で、人が潜ろうともその僅かな表面を撫でるのみ。その深海の全てを知ろうとすれば飲み込まれる。

精神の巨大さに差がありすぎて、霞をして彼女に読み取れるのは波打ち際で寄せる波を見るだけ。

下手に入り込もうとすれば、逆に飲み込まれて帰つて来れなくなるだけ。

事実、今回何人が動員されたか分からぬが、次々と強引な接触を試みた気配が消えて行き、最後に残つたのは自分ともう一人だけ。夕呼はその合流した時に見たという霞の報告から、それがスカーレットツインと呼ばれる相手だと検討をつけた。

ソ連からすれば、本当は霞も押えたい所だつただろうが、生憎護衛には日本帝国がついていた。これはA-L-4を誘致した日本帝国が、国連の顔を立てる為にわざわざ夕呼から借り出す時に、交換条件として責任持つての護衛を約束したからだ。

また、一人とはいえ自分達の手駒が帰還したのも大きかったのだろう。

夕呼はその他にも話を聞きながら、そのスカーレットツインが生還したのは実戦を多々経験している、すなわち現実に使える力の程を理解しているからだろう、と推測していた。

言い方を変えれば、自分の身の程を知つているとも言つ。

逆に、精神の消えたA-L-3の残滓達は薬なりを使って、心の奥底を探ろうとして帰つて来れなかつたのだろう。

（まあ、敵対する腹がないなら、あたしとしては当面は構わない

か……）

もつとも、そんな思惑は霞の「またおいで、と誘われました」との言葉に真剣に悩み、頭を抱える事になるのだが。

【SIDE：その他】

国連においては、ソ連の作戦によつて相手が理性ある存在であると認識できた事や、自然の再生能力を兼ね備えている事から、BEAに對して共同戦線を張る事は可能ではないか、という意見が出てた。

現状先の見えないAL4はともかく、G弾に關しては反発していいた国々に加えて、オーストラリアやアフリカなどのこれまでAL5に賛成していた国々も損はない、と賛成に回つた。

その結果として決まったのが、AL6をAL5に優先させるというものだった。

それはAL5の推進者達にとって看過出来ない決定だった。

何故なら、G弾は力だ。

その力をアメリカが抑える事によつて、他国に優位に立てる。

だが、【ドラゴン】はアメリカのものではない。アメリカがその力を押える事が出来れば話は別だが、それも不可能と現時点では判断せざるをえない。

となれば、AL5の優先順位が低下するのは、アメリカのBET A戦終結後の優位性を崩す事に他ならない……そう考えたG弾推進派ならぬ信奉者達は暴挙に出た。

「正体不明の相手だ。今の段階で殲滅しておるべきだ」

その言葉の下に、彼らは再突入型駆逐艦にG弾を密かに運び込み、実際に五発のG弾を立て続けに【ドラゴン】に向けて投下した。

結果から言おう。確かに、A-L計画の一つは大きくその立場を落としたどころか崩壊寸前に陥つた。

ただし、6ではなく5が。

何しろ、落としたG弾はその全てが黒い半球が展開した直後に全て【ドラゴン】の口に飲み込まれた。

直後、いきなり瞬間転移でアメリカに出現した【ドラゴン】は徹底的にG弾の施設を職員は無傷のまま、施設とG弾のみを粉微塵にしただけではなく、G弾を推進していた政府要人に議員に財界人、開発者から官僚に至るまで全員がアメリカ中はおろかカナダや果ては南アメリカやオーストラリアからまで或いは空を舞つて、或いは強制転移させられて、全員が【ドラゴン】の前へと引きずり出された。

その上で、震え上がる彼らの顔を一通り見回した【ドラゴン】は今回の投下に関わった人間だけを綺麗にこの世から退場させると再び飛び去つたのである。

かくして、大部分の人間は命を永らえた。

ただし、そんな思いをした人間が果たしてA-L5を支援し続けられるかと言うと……そんな訳がなかつた。

即効でA-L6へと鞍替えしただけならまだしも、A-L5の暴走に逆に敵意を抱いて積極的に敵対する側に回つた者、【ドラゴン】に神を見て出家した者、などとにかくそれまでのA-L5陣営はこの一件で崩壊したと言つていい。

何しろ、大統領らも見放して、今回ので【ドラゴン】が人類に敵対したらどうすると絶叫する各国へのスケープゴートとして全責任を押し付けようとした訳だから沈む泥舟から人が逃げるのは当然な上に、研究成果も全てが原子レベルで残っているかも怪しい状態と來ている。

最終的に、A-L5は緊急時の地球脱出船のみが何とか残るだけとなるのである。

暴走しました
けど、ご馳走様でした
とりあえず、現在、鉄源ハイブから次はどこに行こうかなーと検討中
な竜王です

異伝11・マカラブ編3（前書き）

独自解釈が混じっています
ご了承下さい

人類は大混乱に陥っていた。

AL-5陣営の暴走によつて、この世界では横浜ハイブではなく鉄源ハイブ跡地にいる【竜王】に対してG弾が投下された。

それだけでも大問題だというのに、それがあつさり無効化されただけではなく、G弾はその全てが壊滅。

暴走した面々はこの世から消滅したが、逆に言えば、本来、責任を取るべき連中が軒並み消えたという事と同義である。

そこで当然生贊となるべき人間が求められた訳だが……。

元々、大統領は穩健派だった。

AL-4が確実ではない以上、失敗した時の予備を考慮するのは当然だ。

だが、このような暴走は望んではいなかつた。

もつとも、更に酷い結果を生む事になるとはさすがに予想していなかつたのだが……。

とにかく、米国国内では頭を抱える人間が続出した。

多額の金をつぎ込んだG弾は『役立たず』の烙印を押された。

無効化したのはBETAではなく、【竜王】なのだが、生憎初投下でいきなり無効化された、では良い評価など得られるはずもない。おまけに穩健派は自分達まで巻き込まれては敵わぬと強硬派の責任を追求してくるし、強硬派は先だっての恐怖から瓦解が加速度的に進んでいく。

「……では彼も？」

米国國務長官が呻き声を洩らし、頭痛をこりえるように額を抑えた。

大統領も無言のまま、こめかみを探み解している。

先だつての暴走で、米国は一気に窮地に陥った。

幸い、米国の力故に国家の存続どうこうのレベルには至つていな
いが、それでも誰かが責任を取らねばならない、のだが……今回の
件を企んだ CIA長官は綺麗さっぱりこの世から原子レベルで退場
した。

他の者も今回の一件に直接手を貸した連中は軒並み消滅。
おまけに、それなりの影響力を持つ人間に責任を押し付けようと思つたら、ある議員は恐怖の余り白髪になつてぶつぶつと壁に向つて呟いていた。この為、息子が父の引退を宣言した。

ある財界人は全ての職を後継者に譲ると、その足で教会の扉を叩いた。今では一介の修道士としてひたすら神に祈りを捧げる日々だといつ。

「とにかくだ！だからといって関係ない者を犠牲にする訳にもいかん」

ただでさえ、今回の暴走の結果喰らつた反撃のせいで、米国は少
なからぬダメージを受けているのだ。

米国としてはこれ以上の国内分裂の種は避けたい。幸い、【竜王】
の反撃のお陰で A-15 派が一気に沈静化した事もあるし。

この場で同盟各國への働きかけ、裏での A-15 強硬派のリアルな
現状を渡す事などが決められた。

史実と異なり、この世界では日本帝国との関係も悪化していない。
彩峰中将は降格こそ受けたものの存命だし、米国も大きな損害は
出でていない。ましてや命令無視というなら先だつて国連の決定に
反して米国内部の……軍が暴走したという情報が流れている。そん
な中で他国の大して被害もなかつた事に文句を言える者はいまい。

また、BETAによる日本本土侵攻がなかつた為に、日米安保は
現在も健在だ。

これにオーストラリア辺りも引き込めれば、現在の世界第一位から第三位までの経済・技術力を持つ国々が裏での合意に至る訳で、そうなれば米国の支援を求めていソ連、国土を未だ失ったままの中華は口では文句を言つても裏では合意を探るだろう。

(この世界では佐渡島以降のハイヴ、特にH23オリョミンスクからH26エヴェンスクまでのシベリア方面のハイヴが成立していない為にまだソ連は大陸から叩き出されていません)

「むしろ、問題は今後だ」

現在、既に複数のハイブが攻略されており、H12リヨンハイヴ、H09アンバールハイヴ、H17マンダレーハイヴなど人類との戦闘の接点となる部分が真っ先に落とされている。

そして、遂に先日にはH01オリジナルハイヴへと【竜王】は向つた。現在、軌道衛星上からこの状況を知る者は固唾を呑んで見詰めている状態だ。

「……オリジナルハイヴでの結果次第だが、それ次第では今後はハイヴは減っていく一方、という可能性もある。そうなれば当然だが……」

今後、ソ連や統一中華などは国力の回復を目指して蠢動するだろう。

鉱物資源は相当削られているだろうが、反面地表部分を削られた事で採掘しやすくなつた所もあるはずだ。

加えて、【竜王】が自然を回復してくれるとなれば、どうなるか……。

「これからは複数の要因が関わってくる。月からの侵攻を食い止めるのは今後も続行せねばならんが、同時に日本帝国、統一中華、

ソ連に対する工作も行わねばならん」

日本に関しては反米に陥らないよう、親米派を支援していく必要があるだろう。

国粹派と呼ばれる人間達の為に、米国が敵視されて下手な混乱を招かれでは面倒だ。

統一中華はこちらは早くも分裂の兆しを見せている。

元々、大陸から叩き出された国民党と、大陸を支配していた共産党という不俱戴天の敵同士がBETAという共通の恐怖がいた為に吳越同舟で同盟を組んでいたのだ。共通の敵が崩れだと共に、関係もまた崩壊を始めたのは当然だろう。

こちらは共産中国には既にソ連との関係が深まっているようだから、台湾に支援を行つてゆく。

最善は中華の國土の分裂と、双方のにらみ合いによる消耗だ。ソ連も同じく、これから国内の民族紛争を煽つてやれば十分だろう。

幸いといふべきか。

G元素が陥落したハイヴからは綺麗に消えうせている。

環境再生に用いられたのではないか、とか色々言われてはいるが、G元素が消えたとなればハイヴ攻略によつて統一中華らがG元素を大量に押えるといった事は心配しなくても良い。

だが、それは同時に新たなG弾の作成が不可能という事でもあつた。

「とはいへ、さすがに【ドラゴン】も月や火星まではどうにもなるまい……我が国が主導権を握る為にもここを乗り切る事が必要だ」

その為にはAL5という残骸を利用し尽す。
それしかないだろう。

【SHIDE：竜王】

「これはオリジナルハイヴ最下層。
眼前には触手つきのち」。

……なんぞ、これ。

どうにも、こいつが現在のBETAって種の中でも、この星の侵略責任者って立場、かと思っていたが、どうも違うようだな……。正確には採掘・加工責任者？

人にとって、BETAとは異星起源の侵略者だ。

だが、BETAには人類をこの星発祥の生命体という概念自体がない。

うん、俺の足の下でじたばた暴れてるが、動けるもんなら動いてみやがれ。

体格ではこいつの方が上かもしけないが、正直、こいつは確かに戦闘を目的としたユニットじゃない。

さて、珪素生物がどうもこいつらの親玉らしいのだが……炭素生命体を認識出来てない、というのが一番なんだろなあ……。

珪素生命に関してだが、一般によく言われているのが「原子量がかなり大きくなるから反応速度が格段に遅くなるのではないか」「だから、人間が見ても生命活動をしている事に気がつかないのではないか」そんな推測がなされてきた。けれど、それは珪素生命についてもまた然りな訳で……。

（タイムスパンが違すぎるせいで、珪素生命にとっては逆に、炭素生命の活動が早すぎて認識出来てないかもしねないな……）

うーむ、しかし、そうなるといつらの説得は難しいな。

一応説得はしたんだ。

何故か意志通じたけどさ。そうしたら、「人類が自然発生した生

命体である根拠を求む」というので、星の歴史そのものを叩き込んでやつたんだが……。

今度は「生命誕生の源となつたアミノ酸類の地球外からの飛来が、人為的なものではない証明をせよ」ときたもんだ……確かに人類というか地球の生物の源となつた成分は隕石によつて地球外から飛來したとは言われる訳だが……。

ああ、今もこの大広間にはBETAが流入してきているし、あ号標的は触手を振るつて来てる。

まあ、全部【反射】してるけどな。……便利だねえ【反射】。あの世界で学習して正解だったわ。もうちょっとやってみるか。

「その前に」ひらは一つ質問に答えた。こちらからの質問にも答える

『……何か』

「お前達BETAの創造主たる珪素生物が自然発生した生命である証明をせよ」

『私はそれを知つてゐる。それでは不足か』

「不足。それならば俺が炭素生物が自然発生した生物であると知つてゐる時点で、お前の問い合わせの解答は成立する」

『……』

その後、こいつは沈黙した。

何かの証明、というのは難しい。

そう、『炭素生物が自然発生した生命である事の証明』と『珪素

生物が自然発生した生命である事の証明』とは鏡の表と裏。どちらかを証明すれば、その反対もまた然り。

どちらかを理解出来ないという事はその反対もまた理解出来ない。こいつにとつては矛盾に苛まれているんだろう。

炭素生物は自然発生したものではない、という概念と、では珪素生物が自然発生した生物であるとの証明はどのように行えば良いのか……おお、月や火星へと問い合わせしている。

けど、そつちも沈黙しているな……。

……おや？

「……自閉しちまつたか」

「コンピュータが終わりのない無限ループに入り込んだようなもの、かな？」

証明不可能な状況に陥った結果、こいつは自ら閉じた輪に入り込んでしまった。

……うーむ、なまじ真面目といふか真剣に考えないといけない状況に陥つたお陰で、こつなるとは……しかし、何で他の奴らは出来なかつたんだ？

【竜王】は知る由もないが、原作でそれが出来なかつたのは、そもそも、あ号標的が武を自然発生の生命として認めていなかつたらだ。

純夏を珪素による擬似生命と認めたが故に交渉に応じはしたもの、基本相手は災害の一種と看做していた。

だが、【竜王】は違う。

あ号標的からすれば、眼前の【竜王】は解析不能な存在だった。

炭素生命ではない。だが、珪素生命でもない。

だからこそ、あ号標的は【竜王】を第三種の何かと判断し、当初は排除を試みたが、それに失敗。交渉にも応じたのだが、その結果

投げかけられたのは自らの根本に由来するものだった。

「……まあ、トップが自壊するならいいけども」

とりあえず、珪素生命つて奴と話しないと駄目だろうなあ。

【竜王】はまともな思考能力がない故に今も流れ込んでくる他のBETAを完全無視すると、反応炉に向け、手加減をえた一撃を与える。

それで反応炉は消し飛んだ。

一斉に方向を変え、撤退してゆくBETAの後を追うように、【竜王】もまたオリジナルハイヴから出てゆくのだった。

異伝11・マガラヴ編3（後書き）

ある種のウイルスとthoughtてもらひのが良いでしょ
連絡を取つて相談した相手が同じく無限ループに陥れば、それはウ
イルスに侵されたコンピュータと同じで、しかも放つておけば自然
と拡散してゆく、と

とりあえず、応募してた小説は落つこちました……
矢張り世の中、いきなり入賞つて程甘くありませんね
次の応募目指して、執筆中です

「ふう……」

その日、地球の各国では政治家が、軍人が、財界人が……とにかく情報を手に入れる事の出来た全員が遠い目をして見詰めていた。

「……平和だな」

人それを現実逃避という。

何故、そんな事になつたのか。

それは、オリジナルハイヴ陥落後の事だ。

【竜王】は次々とハイヴを襲撃、そのB E T A 諸共壊滅させていた。

そこまでは彼らの常識の範囲内だった。

問題はそこからだ。

てつ生き撃滅後は自然回復かと思いきや、そのまま【竜王】は飛び立つた。

どこへ?と問われたら……宇宙へ。そのまま月面のオリジナルへと降り立つた事を最初に告げられた時、米国大統領は苦い顔でこう言った。

「君、エイプリルフールはとうに過ぎたぞ」

そして、真実と判明した時点で、相手が生物だと何だとか言う思考を放棄した。

他の国も似たり寄つたりだった。

そんな中、少々毛色の違う会話が行われている所があった。

横浜である。

国連軍横浜基地、本来 A L 4 の拠点であつたこの基地はその役割を大幅に変えっていた。

A L 4 に求められるものが B E T A の撃滅から、【竜王】とのコンタクト、その維持に変わつたのだ。

この過程でソ連からスカーレットツイン他生き残つていた A L 3 の残滓となる者達が引き抜かれた。

もちろん、ソ連は抵抗しようとしたが、それを画策したソ連の政治家らは即効でそれを撤回した。

理由は単純、霞と交信した【竜王】がソ連があれこれと理由をつけて断つてゐるという話を聞くなり、アラスカに飛来。スカーレットツインの二人の駐留する基地へと飛來した後、あれこれ理由をつけていた連中、その中には政治家も高級軍人もいたし、その手先となつていた政治将校まで全員が吹雪吹き荒れるアラスカの基地の真っ只中に引きずり出されたのである。

【竜王】のまん前に。

その上で、イーニアが【竜王】の方を向いていた後、こう伝えたのである。

「A L 4 に連れて行つていいか、って言つてますけど……」

全員が即効で頷いた、訳ではない。

「馬鹿なー貴様らは我がソ連の道具なのだぞーー！」

一人の軍人が叫んだ。

だが、その彼にクリスカが思わず激昂する前に……急に両腕を抱え込み、震え出した。

慌てて、【竜王】を見上げて何か言つ前に、彼は白く凍りつき、そのまま倒れて碎け散つた。

周囲がシンと静まり返った。

「えと……今、何か言つたか?つて……」

「「「「いいえ、何も言つておつませんー」「」「」「」「」

彼らは全員命あつての物种だという事はよく理解していた。

そして、田の前の相手がB E T Aのレーザーを弾き返し、アメリカの秘密兵器であるG弾さえ無効化してしまった相手だと改めて理解した。そして、そんな相手に攻撃を命じたとして、自分が死ぬだけな事もはつきりと理解していた。

まあ、【魔王】がちよつとイラついたのは、道具扱いしたから、なのだが……。

結局その後、A L 3の生き残りも全て引き渡す事を約束させられて、彼らは解放されたのだが……。

当り前だが、既に逆らつた場合どうなるかを存分に田の前で理解させられた彼らは、即効で厄介払いとばかりに全員を横浜に送りつけた。

さて、香月夕呼は必要なら幾らでも無情に、犠牲を容認する。だが、必要がないならば甘くもなれる女性である。

そして、今回は非情になる必要が全くなかつた。

といつも、ある意味やせぐれていた。

「まあ、来てもらつてなんだけど実は特にしてもうわないとけない事つてないのよ」

はあ、と香月夕呼はA L 3の中でも特に高い能力を持つとされた霞、そしてイーーー（+心配してついてきたクリスカ）を前に言った。

その言葉にクリスカは拍子抜けしたような顔になる。

「ああ、いいのか？って思うんでしょ？いいのよ、貴方、あの【竜王】だけ？あいつとお話出来るんでしょ？」

「ううう」とイーニアが頷く。

それを確認して、香月夕呼は溜息をついた。

「だから、何もいらないの。これで【竜王】が何かしら人類に要求をつきつけてくる、ってのなら、こっちも仕事があるんだけど……」

ふるふると頭を横に振る霞に分かっている、と苦笑気味の笑顔を向けた。

そう、既に分かっていた。

あの【竜王】が人の欲なぞとはかけ離れた、いや、そもそも靈的な階梯を昇った存在であると夕呼は仮定していた。従つて、現在の彼女は霞の協力を得て、新たな研究、そう高次靈的存在についての研究に熱意を上げていたのである。

霞は助手役を十分に務めている。

一方、イーニアらは戦術機乗りとしては優秀だが、研究員としては素人もいい所だ。

従つて、夕呼としては彼女らに求める事は一つだけ、それは【竜王】との通訳だけだった。

「で、貴方がそれをやつてくれる限り、こっちは貴方達には自由にしてもらつていいわ。……ああ、そういう、ついでにお願いしたいんだけど……」

前者に関してはイーニアとしても異論はない。

夕呼の追加に関しても、霞は、時折夕呼が強制的に休みを取りらせ

ないと、ついつい夢中になつてお休みをギリギリまで取らない部分がある。それに、これまでその立場上、そして基地という場所柄、同年代の友人と呼べる関係のある者がいなかつた。

だから、霞の友達となつてやつて欲しい、根を詰めすぎないよう少し注意を向けてやつてもらえないか、といつものであり、そういう事なら、と二人もまた頷いた。

ある意味クリスカがいたのは、この組み合わせでは幸運だつたと言えよう。

何しろ、霞とイーニア、この二人じつと見つめあつたまま、動かなくなつてしまふ事がしばしばだつたからだ。お互に無口な面がある上、リーディング能力で伝えたい事が伝えられる為にこうなつてしまふ訳だ。

そんな事が起きている頃、月ではハイヴが壊滅していた。

そのまま火星へ向けて飛び立つた、しかも所謂ワープ航法まで用いていると知らされた時、人類がこれまで考えてきた神の概念に近い存在と解釈していた夕呼はともかく、他の連中は一斉に今後必ず相手しなければならない理解不能な超越存在相手にする事を考え、引退を真剣に考えたそうである。

うーん、もう少し捻るべきか……

大体、これでマガラヴ編は終了ですね
何しろ、後は叩き潰しまくるだけなので……

夕呼先生は新たな研究テーマに燃えてあります

政治家や軍人、財界人は自分達の力じゃどうにもならない存在相手に、しかもこれまでやてきた強圧的な手段が封じられたと思ってる為に、虚脱感に苛まれています

まあ、これまで表に出る事なく、裏から操つれてたのに、どんなに巧妙に隠れても空間越えて引きずり出され、相手は自分達の最強の兵力叩きつけても平然としてる相手、じゃあ嫌になるとは思いますけれど……

異伝1-3・ゼロの使い魔編1

【SIDE・才人】

「……あれ？」

平賀才人は首を捻った。

立ち止まつた彼を後続の人間が邪魔そうによけていくのに気付いて、才人も頭を下げて再び歩き出す。

何だったのだろうか？

先程、銀の鏡に吸い込まれたように感じたのだが……気のせいかな？

(……俺疲れてるのかなあ?)

そんな事を思いつつ、頭を一つ振った才人は修理なつたノートパソコンを片手に家路へと急いだ。

【SIDE・竜王】

目の前でうかがっているピンク色の髪の少女がいる。

周囲には驚愕の顔でこっちを見ているコッパゲと少女の同級生と思われる学生がいる。

なんだろう、ここは？

最近では次元世界を複数渡つていてる。

お陰で時間がなくなってきたので、分身を置いて監視役をしてもらっている。

……この分身ってのどこで覚えたんだっけ？

ああ、そうだ。

確か、銀色の巨人がいた世界で、セミみたいな奴助けた時にお礼に教わったような……。あの時は苦労したんだよなあ。セミみたいなのは自分の星が碎けたから移民先が欲しい。やっと受け入れてくれる先が見つかって思つたら、人数聞いて拒否されて……。で、暴走しちゃつたと。

まあ、無理もないんだがな。数が数だし……。

結局、そこへ割り込んだ宇宙の警察官みたいな銀の巨人との戦闘になつて、そこへ俺が更に割り込んで……いきなり両者から光線と光弾浴びせられたもんだからびっくりしたよな。まあ、眩しかつたけど実害なかつたからいいんだが。

最終的に、「銀の巨人とも話し合つて、セミ型宇宙人の宇宙船」と次元世界の一つに引きずり込んで、まだ誰も住んでない新しい星を提供する事で片がついたんだつたつけなあ？

で、その際にお礼がしたいって熱心に言われたんで、結局分身とか幾つか術を教わつたんだ。

まあ、それはいい。

それで次元を渡つていると、ふと次元の壁を突き破る力とする力の気配を感じたんだ。

それで、好奇心で赴いた所……引きずりこまれている最中の子供がいたから、ちょっと送り返してやつたんだよな。

その際に、一体誰がやらかしたのかと思つて、その先へ向つたんだが……。

(「この様子だと理解しないか?」)

自分が何をやらかそうとしたか、認識出来ていかない可能性が高い。周囲を見てみても、どうやらこの世界の動物ばかりのようだし……おや。

下で何やら騒いでいるピンクの髪の子供、今回の事態の元凶と思

われる子供を、とりあえずそつちは無視して近づいた。

青い鱗の竜の姿があつたからだ。

『言葉は通じるか?』

『わゆ、わゆい? つ、通じるのね!』

隣で無表情な眼鏡をかけ、大きめの杖を持った小柄な少女がじつとこちらを見上げている。

あと、この竜の名前はイルククウといひつい。

『わゆい、おじとまは何で言つのね?』

……おじさんか。

いやまあ、確かにむづ何百年経つてるか分かつたもんじゃないからなあ。

お兄さんつていう年じゃないのは確かだよな。

『うーむ、分からんな。最近は【竜王】と呼ばれてはいたが、個別の名前なんてなかつたと思うのだが』

さすがに、人だった頃の名前なんてもう記憶にない。

というより、昔の原作知識なんてもんも忘れるのが多い。

うーむ、あの銀の巨人とか、この光景とかもどつかで記憶を刺激するんだがなあ……。

その内、思い出すだろ?。

などと考えていたら、尻尾の方で火花が散つたような気がした。

何だう?・

話を目の前の幼竜に聞いてみれば、これは使い魔召喚の儀式と言つて、期末テストとかそういう類らしきな……そうすると、あの少

年がこの子の本来の使い魔になっていたのか……悪い事を……いや、違うな。強引に引き寄せている感じだったからな。当人の合意なんぞありはすまい。

うーむ、とりあえず確か以前に組んでもらった念話の術式があつたはず……ここでも通じるだらつか？

【SIDE・ルイズ】

やつたわ！私はやつたのよ！

それが最初に召喚のゲートから出てきた相手を見た時の感想だった。赤みがかかった宝石のような鱗を持つ巨龍。それが私が呼び出した相手だった。

二年生になる為の使い魔の召喚。

爆発だらけだつたけれど、タバサの呼び出した風竜もこの竜に比べたら、子供と大人よ！

周囲の同級生達も愕然として声も出せないでいる。これなら、もう私を馬鹿にする者なんていない……。

……と思つていたのに。

私が何を言つても無視して、頭も下げてくれず、そのままタバサの竜と何やら話してる感じ……。

かつとなつた私は爆発魔法を唱えた。

それは見事に炸裂、したのだけど……。竜は全然平氣そうだった。

そして、次第に落ち着いてきたのだろう。

周囲の同級生達がはやしてだした。

「やつぱりゼロばぜロだぜー！」

「呼び出した使い魔に無視されてやんのー。」

嘲笑う声、やつと、やつとゼロでなくなつたと思えたのに……。
悔しさで顔が下を向く……いえ、向きかけた時、声が響いた。

『黙れ』

【SHIDE：コルベール】

正直、私は血の氣が引いた。

あれだけの巨竜だ。

どれだけの力を持つているかなど考えたくもない。ましてや、感じじる力は桁外れ。というか、巨大すぎてどんだけかいのか図れない。

そんな相手にいきなり攻撃を仕掛けるとは……幸いというか、相手が何も感じてないみたいなので、とりあえずミス・ルイズの杖を抑えた。抑えようとした。

周囲の学生達はミス・ルイズを馬鹿にしているようだが……とりあえず今は。

優先順位はこっち、そう思つた時だった。

『黙れ』

声が響いた。

ただ、それだけでプライドの高い、言い換えると非常に扱いにくいう子供達であるはずの学生達がピタリと口をつぐんだ。

……当然だろ？

自分でも口を開けない。

そこに籠められた絶大な重みが我々の口を開かせない……！

『侮蔑するのは楽だ。だが、侮蔑する者は自身の醜さを示して
いると知れ』

明らかな嘲笑の意を籠めた声。

それを向けられて、けれど学生達は誰も口を開けない、どころか

血の気が引くばかり。

圧倒的な氣を呑きつけられて、遂に氣絶する者、洟らしてしまう者、腰を抜かす者……ごく僅かな、そうミス・タバサなどが僅かにそれでも立つて、巨竜を睨んでいるが、彼女らも足は震え、立つているのがやつとだ。いや、それより、この声が巨竜のものだとすると……。

「韻竜……」

これだけの巨大な韻竜などいたのか。
そう思える。

そうして、竜はこちらに顔を向け、脳裏に響く声で告げた。

『さて、もう少し詳しい話とやらをしようか』

異伝1-3・ゼロの使い魔編1（後書き）

ゼロの使い魔編です

ちょっとアレな存在なんかの話も混じっていますがw

……オリジナルがなかなか進まない……

【SIDE：竜王】

うーん、言い方つて難しいもんだよな。
いじめつて見てて気持ちのいいものじゃないから、叱りつとした
んだが、これが難しい！

「おい、そんないじめつ子みたいな事やめろよ」

なんて軽い口調で言つのも何だし……。
ちょっと格好つけた感じで言つてはみたけど……つわ、黒歴史じ

やね？
何て言つか、見た目がこうも「つ」と面倒なんだよなあ。

普段は、会話が通じないから吼えてればそれなりに誤魔化せん
だが。

魔法があると念話が使えるのは便利なんだが……話し方が面倒だ
よな、本当に。

さて、少し詳しい話を聞いてみますかね……。

【SIDE：ルイズ】

不満だった。

巨竜は顔をコルベール先生の方に近づけて、何やら会話をしてい
る。

最初は全員の頭に響いた念話は、今は範囲を絞り、コルベール先
生にしか聞こえていない。とはいえ、そのコルベール先生の話して
いる内容からすれば、使い魔召喚の儀式と、その重要性について語
つて説得しているようである。

ちらり、と竜がこちらに視線を向けたが、すぐにコルベール先生に視線を戻した。

それでも私がじつとしているのは、さつきの恐怖があればこそだ。あれはただ、声を発しただけなのに、お母様より威圧感があつた。お陰で、さつきまではやしてた連中は未だ硬直したままだ。

……シェルプストーが平然としているのは腹が立つけれど。

無論、実際にはキュルケもヴァリエールの前で腰を抜かせない！と完全に意地で立つていただけで、顔色も相当に蒼いものになつていたのだが、彼女の浅黒い肌の色のお陰で目立たなかつただけなのだが、それを見抜くにはルイズもまだまだ子供だった。

いや、それ以上に今は自身の使い魔（候補）の事が気になつていたというか……。

「ミス・ヴァリエール！ ちょっと来て下さい」

考えている内に会話が終わっていたらしい。

コルベール先生に呼ばれて行つてみると、どこか困惑した表情で使い魔との契約のキスをしてみてください、というではないか！ やつた！これまでコッパゲとか思つてたのは取り消します！

そう思い、ルイズは呪文を唱え、キスをする。

これで、ルーンが刻まれ使い魔の儀式は完成……刻まれて……。

『成る程、これが使い魔のルーンとやらか』

「つて何で、取り外して見てるのよー？」

ルイズは思わず叫んでいた。

目の前の巨竜ときたら、刻まれるはずのルーンを取り外して、空中に浮かせてしげしげと見ているのだ。

正直、ここまで規格外の存在とは思つていなかつたコルベールも頭を抱えていた。

使い魔の儀式に失敗する、というのは彼も想定内だつた。

こんな相手だ、レジストされる可能性もあつたし、こう言つては何だが、あれだけミスを繰り返したミス・ヴァリエールの事だ。一発で成功するかどうかは分からない。

……まさか、一発で成功した挙句、そのルーンの制御を完全に奪つてしまふとはコルベールの想像外だった。

【SIDE：竜王】

ふーむ、俺を使い魔に、ねえ？

何て言えばいいんだろう？まあ、最悪分身置いて帰ればいいが、と思つたし、落第も可哀想だ。

とにかく、ちゃんと契約の儀式が成功した、つて事を見せればいいんだろう？つて事を確認して、キスを受け入れた。

……いや、好き好んで痛い思いしたい訳じやなし。

刻まれようとして、力がうろうろしてゐるのも分かつたんで、このままじや失敗するな、つてのも分かつた。

まあ、そうちどうな。

こう言つてはなんだが、力が弱すぎる。

いや、この女の子の中にある力の総量そのものは十分大きいんだが、ぶつちやけ「海にコップ一杯の赤い染料を投入して、海を真つ赤に染めよう」としてゐるようなもんだ。多分。

なんで、仕方ないからルーンの力つて奴を固めてこいつらに見える形で示して見えるようにしてやつた。

『とりあえず、魔法の行使には成功した。これで、進級は成立したのだろ？』

重々しい感じの口調を考えつつ、念話を発する。

何だか悩んでいたようだが、改めて念押しすると、一応学園長に確認する必要はあるが、多分大丈夫だと思つ、と言つので、それなら文句を言つ奴がいたら出してくれ。こちから説得してやるつ、と言つたら顔が引きつっていたような気がする。

ま、これで付き合いは終わりだが、少しごらばいの世界を回りてみるか。

何やら、自然に歪みがあるように感じられるしな……。

そう思つてゐる内、終わったので全員学校に帰る事になつたようだ。

そう告げられると、他の生徒達は何も言わずにさすと空を飛んで逃げるよつにこの場を飛び去つていつた。

……おい、先生の癖に、生徒一人置き去りか？

そう、悔しそうな表情の女の子、俺が戻した男の子を召喚するはずだったピンク色の髪の女の子だ。

放つておくのも何なので、声をかけた。

『戻らんのか？』

そう告げると、かんしゃくを爆発させたよつに自分は飛べないと悔しそうに言つ。

成る程、何やら色々と自分に思う所があるらしい。

……歩いて帰るのも大変だつし、しうがないから背に乗せて飛んでやつたんだが、しばらくすると年相応の笑顔を浮かべていた。うーむ、どうあるべ。

余談だが、ちょっと速度出して追いついて、生徒達の頭上を覆うようにゆっくり飛んでたら、悲鳴は上がるわ、パニック起こしたよ

うに懸命に飛行速度を上げようとする者が出でるわざい賑やかだ
つた。何故だ。

異伝14・ゼロの使い魔編2（後書き）

感想で、説教くさいとこつ事だったのとその辺の事情をば
見た目が見た目なので、軽い口調もなんだし、と苦労してゐるんです、
当人なりに

次回は原作での冒頭の見所とも言えるギースコヒーフークをまとめて
お送りする予定です

「『いめんなさい』…」

ギーシュは土下座した。

何故、そんな事になつたのだろうか？
それには少し時間を遡る必要がある。

その日、誰と付き合つて居るといった事で盛り上がり上がつていった彼ら
だつたが、ふとメイドの一人が香水の小瓶をギーシュが落としたの
に気付いて拾つた事から始まつた。

その結果巡り巡つて、ギーシュの一股がばれ、小瓶を拾つたメイ
ドを責めたのだが……。

『ぐだらん。悪いのはお前だらうが』

「なに！？誰だ！」

いきなり聞こえた呆れた様子の声に、ギーシュは思わず怒鳴つた。

『誰でもいいだろう。そのメイドが悪いのではない。悪いのは二
股をかけたお前であり、それがばれてふられたからとて、ハツ当た
りとは……これが貴族とは貴族というのは余程の恥知らずのようだ
な』

この言葉には周囲にもカチンと来た者もいたようで、顔をしかめ
ている者がいる。

「誰だー、どーじたるーーー！」

『食堂の外だ』

怒鳴つたギーシュがいきりたつて外に飛び出すが、周囲には誰もいない。

「逃げたか！隠れていないで出て来い！！僕は貴様に決闘を申し込む！！」

『決闘か、よからう。それと別に逃げてはおらん。上を見ろ』

なにい！とばかりに上を見たギーシュは……そこで硬直した。そこにいたのは巨竜。

全長50mを超える巨大な竜がギーシュに視線を落としていた。ギーシュに続いて貴族を馬鹿にされたと飛び出してきた面々も固まっている。

『それで、どうするのだ。どうで決闘するのかね？』

硬直していたギーシュはギギギ、と音でもしそうな様子で周囲を見た。気付けば、自分の友達、だつたはずの人間は綺麗に姿を消していった。

既に彼らも知っていた。眼前にいる存在がどんな存在か……。

実はこれ以前にも一騒動があった。教師の一人、風の魔法こそ最強と嘯ぐギターによるものだ。

彼の授業中の風こそ最強宣言の際に、『アホらしい』と声が聞こえたせいで、ギターは竜へと喧嘩を売った。結果は……悲惨だった。スクウェアメイジであるギターはライトニングクラウド含め自身のありつたけの魔法を叩き付けたが、平然と寝たまま無視していた。

そして、攻撃が通じず息を切らせているギターに他の火水地による攻撃でボコボコにしたのだった。

とはいえる別に怪我などは一切していない。

いきなり水の玉にすっぽり包まれて地上でたっぷりと潜水を味わい、周囲を取り囲む炎で乾燥+そのままサウナ状態で汗を流し、最後は紐なしバンジーを存分に楽しんだ、それだけの事だ。

ただし、それ以後ギターが竜を見るなり全力で逃走するようになつたのは確からしいが……。

とにかく、スクウェアメイジでさえ赤子扱いされた相手にドットでしかないギースキュが決闘なぞしたらどうなるだろうか？

……考へるまでもない。

おまけに、その時【竜王】は宣言したのだ。

『力試しと言つていたからな、これで終わりとしよう。決闘だったら消す所だが』

さて、自分は先程何と言つた？確かに「決闘」と言つた。……杖を落としたら、という決闘方法をこの相手が聞いてくれるんだろうか？相手は竜なのに？

だらだらと汗を流すギースキュに【竜王】は告げた。

『先程のメイドとお前が傷つけた女性一人の合計三名に土下座して謝るというのならば、こちらとしては聞かなかつた事にしてもいいが』

最後まで聞くまでもなく、ギースキュは即効で黒髪のメイドの下に駆け寄つて土下座した。

その翌日、片側の頬に真っ赤なもみじをつけたギースキュと、その傍に寄り添い世話をするケティの姿があつたそつだ。

……なお、ちらちらと視線を向けるモンモランシーの姿もあったのだが……、ギーシュから見えない位置で、彼女に向けてケティが勝者の笑みを向けて、モンモランシーがびきりとひきつる光景もあつたそうである。

さて、そんな学生の事とは別に困っていたのがミス・ロングビルこと土くれのフーケであった。

彼女は学園の宝物庫を狙つていたのだが……。

「……あれ、どうしよう？」

最近、お気に入りの寝場所と決めたのか、宝物庫の壁の下付近に【竜王】がどっしりと居座つていたのだ。

コルベールを煽てて、あの壁が物理的な衝撃で何とか出来る事は分かつた。

だが、あの竜の前で、ゴーレムを作つて、壁をぶち抜いて、そつから中に入つてお目当ての品を盗み出す、といつ事は……試す気にもなれない。

彼女は普通のメイジとは異なり、様々なメイジを見てきた。相手の力の程をある程度見切れなければ、死が待つている。その盗賊としての勘が轟音を鳴らしているのだ。

『あれヤバイ。敵どころか遊び相手になつた瞬間絶対死ぬ』

ふう、とフーケは溜息をついた。

うん、命あつての物種だわね。……学園長に給料上がらないか頼んでみるかねえ……。

まだ、故郷で孤児院をやつてるとある程度ぼかして本当の事話

した方があいつを相手にするよつ勝ち田があるんぢゃないか、そう思つたフーケであつた。

「……あれ？俺、出番すらねえ？」

その頃、トリスター・アの武器屋で、剣なんてものがお呼びでない為に放置プレイな喋る剣があつたりした。

異伝15・ゼロの使い魔編3（後書き）

フーケですが、【竜王】の田の前で盗みをするのを諦めました
完全武装臨戦態勢の機甲部隊を前に、見晴らしのいい草原でピスト
ル片手に突っ込むようなもの？

次回はアルビオンへ

ふう、とワルドは深い溜息をついた。
いや、本当に……まだ裏切り表明してなくてよかつたなあ、と心底思うのだ。

はじまりはアンリエッタ王女の手紙だった。
実の所、あんなものが問題になるとは思っていなかつた。
何故か？

ゲルマニアのアルブレヒト三世は別にアンリエッタに惚れているから婚姻に賛成した訳ではない。彼は何かとなりあがりと蔑まるゲルマニアに始祖の血を引き入れる事で名実共に列強としての名を得る為にアンリエッタを欲したのだ。

そんな所に、滅び行くアルビオンの皇太子との恋文が出てきたとしよう。

そんなものの両国が口を揃えて、両国の関係を悪化させようとするレコンキスタの策謀だと断言してしまえばそれで良い。アルブレヒト三世はアンリエッタという小娘が誰を本当は愛していようが、平然とそれを無視して抱ける男だ。

だから、正直腹の中で嘲笑いつつ、虚無の可能性が高いと確たる筋から聞いていたルイズを取り込むつもりだったのだが……予定は朝からいきなり崩壊した。

グリフォンに乗つて颯爽と、と思ったのだが、グリフォンの拳動が明らかにおかしく、着陸もおかしなものになつてしまつた。訓練されたグリフォンが何をと思ったのだが、ルイズの傍にいる巨大な竜の姿を見て、顔には何とか出さなかつたものの、驚愕した。

一応、ルイズが呼び出したらしいのだが、使い魔のルーンを吸収して、力だけ吸い取つた……要はルーンの内、術者に従うとかそう

いう部分は取り除いていい所だけ使っているらしい。それを使い魔と呼んでいいものかは甚だ疑問だが、ルイズがお願ひすると鷹揚に了承してくれた、ようだ。

なお、さすがにこんな相手にキュルケは情熱を感じる訳がなく、ギーシュは現在ケティと甘い一時を過ごしているというか、【竜王】に頼んで乗せていつてもうと知った時点で逃走した。現在は【竜王】と共に過ごしているのはタバサぐらいのものだ。……何でも、お願い事をしてあつさり叶えてくれた事から自分も彼に礼を返すだと誓つてゐるといふ。

するい、と思つたが、【竜王】から「何を礼として差し出すつもりか？」と面白そうに聞かれての答えが、「私自身」と迷いなく応えた、それだけの覚悟の上だから応じたのだと言われては黙らざるをえない。というか、ルイズも既に自身の魔法についてアドバイスを貰つてゐる以上、何も言えなかつたのだが。

何でも、自身の力を解放したいのなら、火土水風の四つのルビーのいずれかを指にはめ、始祖の秘法と呼ばれる始祖の祈祷書、始祖のオルゴール、始祖の香炉、始祖の彫像のいずれかに触れる必要があるのだという。そうすれば、この世界の虚無とかいう魔法が使えるようになるだろうよ、とあつさり言われたのだが、ルイズとてこの竜が相手でなければ信じられなかつただろう。

幸いというか、アンリエッタから水のルビーを預けられた。

これで、アルビオンにあるという始祖のオルゴールを触れさせてもらえれば……そう思つたから、ルイズがアンリエッタのお願いを聞いた時は二つ返事で引き受けたのだ。……むしろ、【竜王】に乗せてもらひようお願いする方が怖かつたが。

さて、ワルドだが、当人はあれこれ策を練つてゐた。

偏在を事前にラ・ロショールに送り込み、手はずも整えてはみたのだが、そんなものは出発して一秒後には崩壊していた。

何しろ、羽ばたきもせず浮き上がつた直後、彼らはレコンキスタ

とアルビオン王家の篭るニュー・カッスル城、その間に出現していたからだ。

それこそ瞬間転移の如く、いや実際にしたのかもしないが、瞬時に移動してしまつていた。

当然、しばらくの沈黙の後、レコンキスタ側の戦艦からは泡を食つたように砲撃をかけてきたのだが……まるで効果がなかつた。背にいる自分達でさえ。

おまけにそれで終わらなかつた。

次の瞬間、レコンキスタの総帥であるクロムウェルが空を飛んで、【竜王】の前に引きずり出されたからだ。

……ニュー・カッスル城からもレコンキスタからもよーく見える空の上で。

『成る程、お前が泥棒か』

その言葉に、最初は誰もがこつ思つた。

アルビオン王国を盗もうとしているという比喩かと。だが、そんなものではある意味済まなかつた。

『ラグドリアン湖とやらの水の精靈に聞いたぞ。死者を蘇生させ、人を洗脳する魔法の道具を盗み出したそうだな』

死者の蘇生。

それはクロムウェルが虚無と称していた力。

王家を攻める表向きの理由となつていて、そしてレコンキスタの求心力の一つが、何万人のど真ん中で思い切り公表され、失われた。

『返してもうつぐ』

クロムウェルの指から抵抗する間もなく、指輪がするりと抜ける

と、くい、と振った首に従い、指輪は一直線に水の精霊田指して飛んでいった。

クロムウェル自身はそのまま下へ降ろされた、のだが……。
さて、ここからが大騒動だった。

指輪が失われた瞬間、蘇つていた貴族や兵士はまた死体へと戻り、更に洗脳されていた貴族達が一斉に正気に戻ったからだ。

当り前だ。

王家に忠誠を誓つた者達だつて大勢いた。

そんな人間達さえ裏切つたからこそ、王家はここまで短期間にここまで追い詰められていたのだが……その裏切つた理由が明らかにされた上に、それが解けてしまつたのだ。

そして、尚悪い事に、クロムウェルが降ろされた先なんて【竜王】は気にしていなかつたが、そうした洗脳された貴族達が操られるままに陣を張る前衛のど真ん中だつた。

そう、魔法の使えないクロムウェルが正氣に戻つて、怒りと憎悪に満ち満ちた視線で彼を睨む貴族達のど真ん中に放り出されたのだ。……後はどうなつたかなど考えるまでもあるまい。あつという間にクロムウェルは討ち取られ、更にこれを機に最後のチャンスとばかりにニュー・カツトル城から出撃してきた王党派、洗脳されていたとはいえ刃を向けた事を謝罪すると共にその分のお詫びはこの戦場でお支払いすると一丸となつて突つ込んでいった本来は王党派だった者達。

そして、旗頭を失い、領主達でさえ死体に戻つたりした為に大混乱に陥るレコンキスタ軍。

……せめて、戦艦がレコンキスタに付いたままだつたら何とかなつたのだろうが、ここで迷いつつ王家に刃を向けていた軍人達が一斉に立ち上がつた。

特に戦艦ロイヤル・ソヴリンが王家に味方すると逸早く宣言したのが大きく、ルイズとワルドが呆気に取られて上から見ている間に、あれよあれよという間にレコンキスタは壊滅して、僅かな貴族がか

ろうじて脱出する、といつ悲惨な結果に陥つたのである。

それで冒頭に戻るが、ワルドはしみじみと自分の運の良さを実感するのだった。

さて、その後はまた大騒ぎだった。

そんな中で、ウェールズに会えたのは幸運としか言いよつがないだろう。

いや、クロムウェルの嘘を暴いてくれた【童王】に王党派がこぞつて感謝を露にしたのと、背に乗っていたのがトリスティンはアンリエッタ王女から手紙を託されたヴァリエール公爵家の三女であるルイズだった事。

同乗者がトリスティン王国の近衛であるグリフォン隊の隊長を務めるワルド子爵だった事。

これらが合わさっての事だ。

もつとも、手紙を託される前と現在とではまた大きく状況が異なる。

何しろ、ワルドも事こづなればと全ての事情をぶちまけた為に、アルビオンがレコンキスタを打ち破つた事を考へると同盟もそこまで必須のものでもなくなつた。

「ですので、もう一度改めて話し合いを行う必要があるでしょう

その言葉に、ある意味一番ほつとしたのはウェールズだっただらう。

愛する女性が中年のおっさんとの政略結婚をしなくて済む可能性が出てきたというのだから、それも当然か。

ルイズはこつそりと一部ぼかして事情を話し、始祖のオルゴールに触れさせてもらひ機会をもらえたし、一晩泊めてもらつた後は、別の意味で忙しくなりそつだつた。

その晩、ワルドは一人、城壁でふう、と溜息をついていた。

自分の予定は全て粉微塵に砕け散った。

視線の先には【竜王】の顔。

「……全く、君は何でもあっさり解決してしまったな……どうせなら、私の悩みも解決してくれないものかな」

『出来る事なら手を貸してやつても良いぞ』

聞こえていないと思つていただけに、驚いた。

とはいへ、折角の事だと思い、事情を話したのだが……しばし考えた様子を見せた【竜王】が告げた言葉は……。

異伝16・ゼロの使い魔編4（後書き）

実は既に世界中を暇潰しに飛んでた竜王だったり
もう、精靈達とも普通に話して、エルフの所なんかも上空からです
がシャイターンの門なんかも見つけてます

「……と、とつあえず話を聞いてもらいたいんだが

『よからう』

かくかくしかじか。

「……という訳でね。母が何故自殺したのか、聖地に何があるのか、と思ってね……」

『ふむ……陰謀絡みなんぞは分からんからな……。

うーむ、水の精霊の世界を水に沈めるというのはアンドバリの指輪を返却したからなくなつただろうし、聖地とかにある異世界への穴はあのままだと歪みを生じてただろうが、もう閉じてきたから大丈夫だろう。風の精霊力の暴走によるハルケギニアの国がアルビオンとやらと同様空に浮かぶとかその辺かなあ?』

「ふむふむ……つてちょっと待つたあ!?

何の氣なしに聞いていたが、とんでもない台詞がポンポン飛び出してくる。

「何なんだ、それは!?.大事ばかりじゃないか!!

『そつか?簡単に片付く事ばかりじゃないか

その瞬間、ワルドは咄嗟に悟った。

最も、【魔王】に悪意も隔意も何もない。

ここに辺は感覚の違いだ。

例えば今回の事にしてもそうだ。【魔王】にしてみれば、そのすべては「ちょっと手を出せば、すぐ解決する」物事に過ぎないが、人からすれば「国を挙げて対処する必要がある」とか「国が総力を挙げても何とか出来るか分からない」といった事態になる。つまり……。

（……ここにひとつでは大した事じゃなくても、我々にひとつではえらい事になるって可能性は多々ある。ここにはきちんと話を聞かないといと……）

その後、「これが一番手っ取り早いな」と感覚だけ時間を遡つて飛ばされ、母の死の真相を知る事の出来たワルドは……分かりはしたが、酷く疲れを感じており、【魔王】の所へとやつて来たルイズに心配される事になる。

【その頃ロマリア】

「教皇様……」

「何かありましたか？」

聖エイジス十三世はその内に野望を秘めている。

と言つても彼の野望は人を苦しめる為のものではない。一人よがりな部分は間違いなくあるし、その為の混乱や犠牲も決して笑つていられるようなものではない。

だが、それでも成し遂げねばならない事がある。

そう思つからこそ、彼は策を巡らし、自らの願いを叶えるべく蠢動しているのだ。

「はい、聖地を探つていた者からの緊急の連絡です」

「……聞きましょう」

真剣な表情になつてヴィットーリオは自らの使い魔でもあるヴィンダールブことジュリオに向き直つた。

ヴィットーリオは若くして教皇の座に就き、改革を推し進めたが故に対立する派閥も多い。そうした中で、使い魔でもあるジュリオは数少ない心から信用出来る者の一人だ。

ロマリオは既に腐り、神の国など名ばかりのものとなつている。それでも始祖の名の下に為すべき事を為さねばならない、その為には例えエルフと戦つても……。

「聖地からエルフ共の姿がなくなつた、との連絡です。どうやら全員引っ越したそうで……」

「はい？」

予想外の内容に思わず硬直したヴィットーリオだった。

「いきなり何だ、ビダーシャル」

ガリア王ジョゼフ。

その彼の前に突然現れたエルフのビダーシャルの発言に、ジョゼ

【その頃ガリア】

「ああ、我々は今度引っ越す事にした」

「いきなり何だ、ビダーシャル」

フはさすがに「訳が分からんぞ」という顔で問い返した。

確かに、いきなりやつて来てそれでは何がどうなっているのかさっぱり分からない。

「そうだな、そこ等辺は説明しておこう。……そもそも我々は好き好んで砂漠で暮らしていた訳ではない」

「だらうつな」

昼はクソ暑く、夜は凍るように寒い。おまけに水も不便。彼らエルフは精靈魔法で何とかしていると言つても、逆に言えば精靈魔法がなければまともに暮らす事も困難な場所に、聖地奪還を上げるハルケギニアの軍勢と戦つてでも陣取つてゐる。そこには当然訳があつた。

「これまで我々が砂漠にいたのは、お前達が聖地と呼ぶ場所にあつた門、シャイターンの門を封じる為だつたが、それを完全に閉じてくれた方がいてな」

「ほりつ？」

興味を持ったジョゼフはその門がどのような門かを聞いてみたが、「どちらでもいいだろう、どのみちもつない」との言葉に、彼が話すつもりもない、という事を悟り、話の続きを促した。

「砂漠なんぞ、仕事でなければ暮らしたいもんじゃない。それでやつと解放されたんで若い者を中心にもつと暮らしやすい所に引っ越そうという意見が出てな」

老人連中は今更引っ越しなど……という愛着もあったようだが、

若い者にしてみれば「何でお役田も終わったのにこんな所で」と思うのは当然だろ？。

それに、老人達も全員が全員そんな意見な訳ではない。

年を食つたし、もっと楽な所でゆっくり生活したい、と願う老人もいる。

かくして、エルフ達は引っ越し事にしたのだといつ。

「という訳だ。後の聖地とやらは好きにしてくれ。何もないがな」
宗教上の聖地というものはそんなものでも構わない。祈る対象なのだから、問題はないだろう。

そう思いつつ、一つ予定が狂つたな、と計画の修正をあれこれ練りながら、ジヨゼフは問いかけた。

「その閉じてくれた相手とやらが何者なのか聞いても良いかな？」

「構わんぞ。相手からも聞かれたら答えてくれて構わんと言われている。この間、アルビオンとやらに出現した【竜王】だ」

異伝17・ゼロの使い魔編5（後書き）

やつと新しいバイトが決まりた……
会社がなあ、まさか地震の影響で整理解雇進めるとほ
本当に、地震の余波があつちこつちで感じます
つか、政府は何をやつとるんだか

とりあえず、聖地の問題が解決しければ、エルフってあれこれで暮
らす意味なくなりますよね

その後は大層大きな変動があった。

半信半疑ながら聖地へと向つたロマリア軍偵察部隊は無血で聖地周辺を奪還（？）した。

それはこれまでの聖地奪還の軍を上げてきたのが何だつたんだ、と言いたくなるような呆気なさだったという。

首を傾げつつも、ヴィットーリオは自身の目的となるものを探したものだが……何もなかつた。

これには大いに焦つた。

（もしや、エルフが持ち去つた物の中に…）

とも思つたが、エルフに喧嘩を売る理由がつけられない。

これまで聖地奪還！という大義名分があつた。だが、それでは何を持つてどこぞに去つたエルフを探し出して喧嘩を売らねばならないのか？

そもそも、エルフ達がどこに立ち去つたのかすら分からぬ。

『彼らがまた来襲した時に備え、彼らの居場所を掴んでおかねばならない』

そう説得し、ヴィットーリオはエルフがどこに消えたのかを探つていたが、その姿は全く発見する事は出来なかつた。

……当然だろう。

まさか、【竜王】の力まで借りて、彼らが海を渡り、我々の世界でいう所のアフリカから北米へと移動したなどと想像出来るはずもない。

結果として、ロマリアの探索部隊は亞人だけの聖地南部を多大

な犠牲を払いながら進んでいく事になるのである。それが全くの徒労とも知る事なく……。

せめて、南部に今後入植予定があるのでならば、まだ多少は意味があつただろう。

だが、そもそも現在のハルケギニアはまだまだ土地が余つており、ゲルマニアから東方に向えば、もっと樂に開拓出来る土地が幾らである。

わざわざ海獸の生息する危険な海を越え、巨大な砂漠を越え、更に南部へと移住する人間がいるはずもない。

後にこの探索で多大な犠牲を聖堂騎士団に出した事から、聖エイジス十三世の責任問題へと発展し、ヴィットーリオはその権力を大きく失う事になるのである。

また、聖地も維持が大変だつた。

何しろ、それまでエルフの精靈魔法によつて維持されていた土地だ。

だが、エルフ達がいなくなり、当然精靈達も自然と本来あるべき姿へと戻つていつた。……さて、砂漠で本来あるべき姿とはどのようなものだろうか？

そう、砂漠そのものだ。

人が生きるには過酷すぎる土地であり、聖地に当初は奪還を祝うムードから記念となる大聖堂を！という掛け声がハルケギニア全土にかかるものの、それを成し遂げ、維持するにかかる経費を計算した時、ロマリアの、というよりブリミル教の財務担当者は卒倒したといつ。

……おまけに、なまじこれまで何千年に渡つて奪還を叫び続け、多大な犠牲を払つてきた上、ブリミル教の名を冠している以上、「お金がかかるから、維持とか諦めて放置します」という事は許されなかつた。それだけはさしもの権力争いと金稼ぎにつつづを抜かす枢機卿や大司教らも理解出来た。

ハルケギニア各地からの熱心な信徒からの寄付、これまで教会が溜め込んできた莫大な資産。それらを駆使して何とか大聖堂の建設にはそれからうん十年をかけて建設したものの、それだけでは終わらない。

その土地に滞在する高位の神官を誰を配置するかでまた一騒動。おまけに危険な亜人や魔物もいる為に、そこを護る為の軍隊の駐留とその維持経費に、周辺が砂漠だけに不足する食料と水……。

そして、彼らをして厄介者と言わしめたのが熱心な巡礼者だつた。何しろ、巡礼者が来るという事は、「大丈夫、駐留しますよ」と口先だけで述べておいて、大聖堂を建設しないとか、常駐する人間を置かないといった真似が出来ない上、彼らが来れば当然、極めて貴重な食料だの水だのを粗末なものではあつても提供せざるをえない。

貴重だからと高値で売りつけていたら、それこそ教会の面子に関わる。

たかが面子、されど面子。

結果として、その莫大な負荷故に、ブリミル教は大きく各国への、その影響力を落としてゆく事になる。

聖地奪還に成功した事が、皮肉にもブリミル教凋落の原因となつたのである。

……そして、ヴィットーリオは次第に精神的に追い詰められていった。

多大な出費、多大な犠牲、ブリミル教内部から噴き上がつてくる不満と反抗、見つかぬエルフ、次第に迫つている（と当人は思つて）ハルケギニア全土の大隆起。

特に最後はなまじ聖地を押さえただけに誰にも言えなかつた。

これまで「聖地を奪還すれば！」という分かりやすい掛け声があつた。

今は、「エルフを探し出し、交渉せねばならないのです！」とな

る。

それでは民衆は受け入れてくれるはずがない。

だからこそ、ヴィットーリオはその全てを自身の内に抱え込み、「ぐ僅かな側近と憔悴しながら語るしかなかつた……。

この時、【竜王】が既にその事は解決済みな事を彼に語らなかつたのは別に意地悪ではない。

【竜王】は知らなかつた。

もし、ヴィットーリオが【竜王】に協力を頼めば、砂漠の緑化はともかく大隆起に関しては教えていただろう。そうなれば、犠牲者を減らす事も、そちらにかける金を他へと回す事も出来たし、精神的にも随分と楽になつていだらう。

……だが、結果から言えば、ヴィットーリオは聞けなかつた。
彼の立場というものもある。

如何に使い魔（表向きだけは）とはいえ、教皇という地位にある彼がわざわざ足を運ぶ事は出来ない。そもそも【竜王】に何とか出来る事とも思つていなかつた。

彼の腹心たるヴィンダールブ、ジュリオが自らの力で【竜王】を手に入れようと密かに赴いた事もあつたのだが、結果から言えば完璧に無視されて、肩を落として帰つてきたのも大きかつた。

そうして、ヴィットーリオは最後は発狂、自殺する事になる。

表向きは「急病」により、本来ならば歴史に名を残したであらう教皇聖エイジス十三世はこうして、逆に歴史に汚点としての名を残し、世を去つたのであつた。

そうした、面子や何やらで会いに行けなかつた者がいる一方で、大国の王でありながら自らの足を運んだ者もいた。

「おお、お主が【竜王】か！お初にお目にかかる、私はガリア王

「ついでジョゼフといふ」

アルビオンでの一大騒動が終わり、トリスティンへと、学院へと戻ったルイズ達。

彼らの前に、ジョゼフが姿を現したのは、ようやく周囲が落ち着きを見せ始めた、そんな折だった。

異伝18・ゼロの使い魔編6（後書き）

上手く幸せになれた人もいる
反面、不幸せになる人もいる

世の中何が幸いするか分かったものじゃない

という訳で、今回はロマリアのその後を主にお伝えしました
聖地を手に入れてしまつたが故に、苦労するブリミル教です
ジヨゼフに関しては、もちろん密入国なんかしていません
ちゃんとトリステインに交換条件なども突き付け、きちんと承諾を
得て入国しています

トリステインからすれば、むしろ美味しい話？

ちなみに今回は書いておりませんが、タバサやシェフィールドもい
ます

……イザベラ？王族が全員ガリアを留守にする訳にもいかないので
お留守番です

さすがに硬直しているのはルイズだ。

確かに如何に始祖直系の三王国、その一角を占めるトリステイン最大の名門公爵家人間といえど、ルイズは別に当主でも次期当主でもなく、三女であり学生。

それでも周囲の者よりはまだマシだろう。

そこ等辺はアンリエッタというトリステインの王女が幼い頃の共にいたのもあつたかも知れない。

一方、他の人々はといえば、さすがにキュルケも引きつった顔で一步下つてゐるし、ギーシュなどは言つに及ばずといった様子だ。ちなみにガリア国王を迎えるのにそれなりの形をとらねばならない事から、学園の生徒全員がこの場には揃つてゐる。

タバサはさすがに相手が相手なので物怖じしている様子はないが。本音を言えば、ルイズとてこの場からさつさと逃げたい。それは他の生徒達も同じだろう。

だが、そうはいかない。

ルイズは目の前のガリア王ジョゼフが魔法学院までわざわざやつて来た理由が目前の【竜王】にあるのだと理解していの以上、そして彼女が学院でだけ通用する名田上とはい表向きは【竜王】を使い魔としている以上、この場にいなければならない。

おまけに、ジョゼフが魔法学院にやつて来た表向きの理由が伝統あるトリステインの魔法学院の視察及び生徒との交流となつている為、他の者も逃げるに逃げれない。

『ほほう、どう変わっているのかね？』

「ほほう、どう変わっているのかね？」

『必然であつた事を悔いて、その結果、心を凍らせているな』

その瞬間、ルイズ達周囲の人間は空気が変わったように感じられた。

何が変わった、という訳ではない。

だが、確かに【魔王】とジョゼフの間に漂つ空気は変わった。

「何を必然とする？」

『君が弟を殺した事だ。どのみち、弟御が王につければ君を暗殺せざるをえなかつただろう。どちらかがどちらかを殺さねばならなかつたのだ。悔いる必要もあるまい』

ぎしり、と空気が凍つたような音がした、ような気がした。タバサは目を見開いている。

ジョゼフが父を殺した、というのは想定内だつただろうが、父が王となつていれば父が目の前のジョゼフを殺していなければならなかつたとはどういう事なのか、そんな所か。

「ほう、どうしてそういう思うのだ？」

『君が王につけば、表向きは次期王の座を争える程に人望を集め弟御を放置は出来ぬ。国の不安定要因である以上は、君達が王家の住人である以上は君は弟を殺さねばならぬ』

そう、それは事実。

シャルルが生きている限り、例え臣下となろうとも彼を支持する貴族達の存在が、そして彼らの立てる旗となる存在である以上、不安定要因として残り続ける。

『逆に弟御がついていようが、その時は長兄である事を理由に君を支持した貴族が不満を持つだろう。やはり不安定要因となる。その結果は同じ事だ』

そして、それもまた事実。

一人の王子を支持する貴族で国が割れていた以上、どちらが王となろうが、例えジョゼフがシャルルに王位を譲ろうが、何時かは行わねばならない。

どちらかが王位継承権を放棄しても、その子が火種となる。

結局、彼らが王家である以上は、殺し合いは必然であった。

貴族とはいえ、ここにいる子供達はまだそこまで陰湿な争いに関わっている者は、少なくとも表向きはいない。

だからこそ、『どちらかが死なないといけない』という言葉に顔を強張らせていた。

『まあ、殺すに至った理由に関しては考えの余裕が足らなかつたといつべきか』

「ほう？ それは？」

『簡単な事だ。お前の弟が次の王に指名されていたらとしたら、お前はどうした？ 悔しがって喚き散らしたか？』

その言葉にしばらく考えるよつた素振りを見せたジョゼフは、間もなく俯いた。

周囲の人間がどうしたのか、とうろたえる中、いや、一人シェフィールドだけが我が主に何をしたのかと【竜王】に怒りの視線を向ける中、それを打ち破ったのはジョゼフの笑い声だった。

「は、ははははははッ、そつかーそういう事か！確かに間抜けにも程があるな、私は！」

今こそジョゼフにも理解出来た。

もし、シャルルが次の王に指名をされていたとしたらどうだつたらう？

自分は【竜王】の言ひつけに喰き散らしてただろうか？

そんな訳がない。

きつと自分は内心で腸が煮えくり返りながら、けれど表では弟を祝福し、祝いの言葉を述べただろう。

意地でも弟に悔しがる姿など見せたくなかつたに違いない。

……そして、それは弟も同じだつただろう。

それがジョゼフにはよく理解出来た。何の事はない。自分が指名された時のシャルルのあの態度は單なる鏡写しの自分の姿ではないか。それに怒りを覚えるなど何と馬鹿馬鹿しい！

『じのみち王に、いや國の運営に魔法なぞ大して必要ないのだ。お前が卑下する必要もあるまい』

この言葉には、だが周囲から鋭い視線が突き刺さつた。

が、ぐるりと視線を【竜王】が巡らせば、その視線に抗して睨み続ける事が出来る者など皆無だった。

『王の務めに、いや政治に魔法を使う場面などないにあるのだ？』

そう問われて、しばし考えていたジョゼフはだが、あつさつと言つた。

「ないな。そんなものは」

ぎょっとしたのは周囲の貴族であるルイズを初めとした面々だ。否定したのはガリア国王ジョゼフ。

このハルケギニアにおいて、最大の国家のトップに立つ男だ。その男が統治に魔法を使わないと断言した。【竜王】を睨んでいた貴族の子供もいたが、全員が今はジョゼフに注視している。

「そうだな。確かにその通りだ。王が魔法を使わねばならぬ状況など、いや、上に立てば立つほど国を動かすに魔法は不要か」

軍ではどうだろう？

王が、將軍が魔法を使わねばならぬ状況などごく僅かな例外を除けば負け戦だろう。

そうならないよう采配を揮うのが彼らの仕事だ。

政治はどうだろう？

土木工事にせよ、治水工事にせよ、或いはその他の魔法が必要な状況があれば、それを命じれば良い。上に立つ者が実際に魔法を使ってみせるなど所詮パフォーマンスの類でしかない。

結局、ジョゼフはその後、【竜王】から少し語られた後一時姿を消したが、現れた後、実にはればれとした顔で帰つていった。

無論、消えた時、護衛の人間やら何やらは大騒動になつたのだが結局、問い合わせた人間も全員がちよつかいを出した攻撃すら【竜王】に完全無視され、疲労した所へジョゼフが帰つてきたのだった。帰り道、ミヨズニートールンはジョゼフに尋ねた。

「どちらへ行かれていたのですか？」

「なに、ちょっとブリミルに会つて来ただけの事だ」

そして、その夜。

【竜王】は空を見上げていた。

(干渉しそぎたな)

これ以上はこの世界に干渉するのはよろしくない。
そう判断した【竜王】は翌日ルイズに告げた。

「帰るー?」

『つむ』

まさかそんな事を言われるとは思わず、仰天した声をルイズは上げた。

どうやって帰る気かと問い合わせたが、いともあつたつちよつと次元の壁を越えるだけだと言われて眩暈がした。

どうも、目の前の相手には世界の壁なぞ薄紙も同然らしい。

じゃあ、自分の使い魔はどうするのかと思いきや、一体の竜を呼び出した。

『あ、大将。おひさしぶりやなあ』

そう語った竜は事情を聞くと、それを受け入れた。

当人曰く、暇だし、狩りの獲物も多そうだし。という事だった。
自然が多いのも気に入つたらしい。

ルーンのみを受け渡して【竜王】の帰還を見送つた後、両者は挨拶を交わした。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

よ

『長い名前やなあ。ルイズでええか。わいは祖竜ミラ・ルーツと
呼ばれとつた』

そう純白の竜は空気のより美味しいこの世界で傍からは獰猛に、当
人としては愛嬌たっぷりに笑つた。

そして、彼らはまた新たな物語を紡いでゆく。

【SHIDE：竜王】

うーん、簡単に片付くからって手出しそぎちやダメだよなあ。
いかんいかん。反省しよう。

あれぐらいの事なら、あの世界の人達でも簡単に出来るよね。う
ん。

異伝19・ゼロの使い魔編7（後書き）

ヤマグチノボル先生、末期ガンとの事でしたが手術は成功したそうですね

まあ、末期ガンとて助かる可能性はあるからな。あくまで初期とかに比べると成功率が低いからで……

竜王帰還です

いや、確かに干渉しそぎたからね

……しかし、次はどの世界へw

ネギまは最近、原作がね……何だか迷走？

ISは読んでないというか、あの世界、絶対に女尊男卑になつてるよね

外伝3（前書き）

希望がいるみたいなので、理想郷のみに投稿していた外伝もこちらにも投稿します

……あつち大分下に消えちゃったしね

面倒な。

そう思いつつ、飛ぶ。

領域が広がると、どうしてもその中で暮らす奴も増える。
昨今では食い物の量が減つてるのが自分でも分かる。……こう何
と言うか、自然が語りかけてくる、と言えばいいのかな？自然の中
にいれば自然と満たされ、食う量がかつてのそれより大きく減つて、
嗜好品のレベルに落ちつつある。

それだけではない。自然が語りてくれるお陰で、悪い奴とい
うか……自然環境を破壊するというか、荒らす奴とか悪い気配を放
つ奴が分かるようになつていてる。

悪い話じゃない。

先だつては入り込んだイビルジョーを仕留めた。
イビルジョーも共存出来るなら良かつたんだが……奴はとにかく
腹が減つたら手当たり次第に食つ。
生態系の事とか、何もお構いなしだ。
会話を試みてみたが……。

『オレサマ、オマエマルカジリ』

……腹が減つていたんだろう。まるで理性が感じれなかつた、と
いうか感じる様子もなく齧りに来た。

もちろん、逆に粉碎した。

ただ、もし、自分が未だにこの団体に相応しいメシの量を必要と
していたら、きっとイビルジョーすら上回る量が必要になつていて
かもしれない……。だから、可哀想じやあつた。

今度の奴は話が通じるといいよなあ。

だから、そんな風に思つるのは当然だろう。

自然がざわめく地に向つて飛ぶ、しかし。

(なんで、火山の火口近辺に好き好んで暮らすんだか)

メシもない。

周囲は暑いを通り越して、熱い。確かに一部のそういう場所に特化した生物がいるのは確かなのだが。さて、つらつらと考えつつも大氣を切り裂き、飛来した【竜王】の眼前には。

「……また面倒な状況に」

一体が大喧嘩の真っ最中だった。

これがそちらの竜種ならば一体だろうが、たいした問題ではない。だが目の前にいるのは……。

古龍種の一体、煌黒龍アルバトリオン。

古龍に近いとも言われる古き竜。霸竜アカムトルム。双方が縄張り争いをしていた。

『われ、ここはわしの縄張りじゃあーー!』

『なんじやと、わっしがここにやあ先に住んじつたんじやあ!』

人間が聞けば、双方が顔を突き合させて吼えあつてている、という光景なのだろうが。

会話が理解出来るせいで、話が理解出来てしまつ……。

「おい、お前ら何してる!-!」

「うちが舞い降りると、向こうは慌てて頭を下してきた。

『あ、いつやあ【竜王】の親分』

『あ、【竜王】の田那、お久しぶりです』

「この『庭園』に住む竜達はいずれも【竜王】の存在を知っている。頭の悪い竜種ならば、そもそも怯えて逃げるし、ここにいる連中のよう年に年経て十分な力を得た連中ならばこつして話をする事も出来る。

かつてと異なり、敵対しようとした氣をなくせせるだけの力を得たからこそのことだとも言える。

とはいって、この口調はどうとかならんものかとも思つが……。

「それで？ 一体なんでまた喧嘩なんかしてるんだ？」

『『ええ、それがここが勝手に俺たちの住処に入り込んできました』』

口々に言つて、直後に睨み合つ。

それを宥めつつ、話を聞いてみると……どうもこれまで相互不干渉状態だつたらしい。

無視して互いに暮らしていたんだな。

それがここ最近、獲物が減ってきた為に激突しだして、遂に、と
いう事らしい。

正直呆れたが、この場所が獲物が限られているのは事実だ。これを機に引越ししたらどうかというと、そこは譲れないらしい。……意地らしいね、両者の。

とか、考へてる内に……。

『この爺が……』

あつ、アルバトリオンの奴がぶちきれやがつた。

バツクジャンプブレス、つて奴だな。後方に飛び退りながら、火炎弾を叩き付けた。

……とはいえる、俺もアカムトルムもこの程度じゃびくともしない。アカムトルムも普段は溶岩の中に潜り込むような奴だ、炎には強い、とはいえるが、それはアルバトリオンも分かっているし、それにあいつの強みは……。

案の定、そのまま空へと上がって氷塊を放ってきた。

……けど、アカムの奴、氷にも強いんだよなあ。

「おい、お前ら……『やりおつたのづ、若僧が！』！」

と思つたら、アカムトルムの奴がソニックブラストぶつ放しやがつた。

……おお、必死で避けてる。そりだよなあ、このソニックブラストつって龍属性なんだよな。

空飛んでる時は、アルバトリオンは龍属性は弱点の一つだし……。とはいえる、地上戦を挑むのが無謀なのは理解しているだろう。アカムトルムはデカイ。いや、アルバトリオンも十分他の連中と比べればでかいし、サイズ的にはこいつらほぼ同等だ。

だが、位置が低いというのは防御がガツチリしているのならば、弱みにはならない。

むしろ、アカムトルムは下からの突き上げが得意だから低い方がいい。

何が言いたいかというと、下手にアルバトリオンが地上に降りて挑むと、腹に直撃を喰らう反面、自分は棘で一杯のアカムトルムの背中に攻撃する事になる。あの頑丈な背甲にだ……。

そもそも、首の長さ含めてほぼ同等の大きさなんだから、純粹な肉体面ではアカムトルムの方が上……。

とか、言つてゐる内にアルバトリオンは空を飛ぶ故の機動性を活かして、アカムトルムの背後へ背後へ回り込む。無論、アカムトルムはさうはさせじと超信地旋回を繰り返す。

……が、超信地旋回なんてものは言つてみれば、その場でぐるぐると回る事だから、そんな事を繰り返していれば当然……。

『お、おお～？』

まあ、目が回るよな。

その隙をついて、低軌道から雷を纏つた一撃を引えた。さすがに、雷はアカムも多少効いたみたいだが……。

(浅いな)

まあ、そりやあ、あの尖つた背中を殴りつけるのは難しいよな。かといって、対空で打ち上げるにもアカムの場合、首の長さの関係上、ブレスの上空への範囲が狭い。

……さて、こんな事を何故考えているかといつと……。

(バフツヒツカヒ)

いや、力ずくで何とかする方法はあるんだが……。

下手にやると、こいつらに大怪我をさせてしまうのだ。

うーん、どういえば分かりやすいだろう? バイク一台が激しいレースやつてる所へ大型トラックでそれを止めようとしてる、って言えばいいだろか?

っていうかだな……。

『死ねや、おらあああああつー!』

『はつ、馬鹿が、その程度じや効かねえよー！うええええーーー』

『ノロマーハーツだれだれ!』

アリス、お前は誰だ？

さつき、ソニックブラストがこいつの腹に当たつたよ。いや、ま
あ、いいんだけど、こんがらいな。

二三九

! % ! ? ? ?

アルバトリオンの奴が低空に降りてきた所を見計らつて、全力で咆哮を放った。

それでアリノトリスンは墮落アカルトリムも渾話してゐるが、

「お前ら……さつきから見てればガキみたいに『わやー、わやー』と…

...
[

『『でも、でも二つが

「ああん！？」

『…………すいませんでした』

たつぶり叱つた後、両方ともここから出て行くか、それとも共存していくかを選ばせてやつた。

何で、ここに今更新しい場所探してやるんとかんのだ。
しかし……。

『よう、兄弟! 今日は外でちと美味そうな奴狩つて来たんだぜ』
『お、いいねえ! こいつちや、見る! 』

『おお、塩じゅねえか! それにこいつやまた随分とたくさんの龍殺
しの実だね』

……なんだか、妙にあの後仲良くなつたみたいなんだよな。
ま、いいか。

『……親分に怒られるのはもう御免だしな』

ん?

外伝3（後書き）

まづは魔王の庭での一こま

「……なんだ、この素材は」

誰かが呆然とした口調で呟いた。

それ程、それは異常な素材だった。

「」の素材は一体何か、伺つてもよろしいでしょうか

国家戦略研究所。

要は某大国の国直属の研究所だ。

その所長を務める人物が、今回これを持ち込んだ軍人と思われる人物に尋ねた。

私服ではあるが、そのピンと伸びた姿勢や雰囲気などからそう判断していた。

「……残念ながら、それを口にする事は私には許されていない。君達に言つ事が出来るのは、それを再現出来るのか、それを破壊する手段はあるのか、と確認する事だけだ」

残念そうな顔をしながらも、研究者達がそれ以上を口にしなかつたのは、一ーストゥノウ。すなわち、一定以上の権限がなければ知る事が出来ない事がある、という事を知っていたからだろう。民間研究所ではなく、国の研究機関に素材が持ち込まれた理由でもある。

「そうですね……現状調べてみた限りですが

研究機関の長が言葉を選びながら言った。

「正直に申し上げます。この素材を複製するのも破壊するのも現状の技術では不可能です」

「…………」

この世の中には様々な鉱石がある。

今ではごくごく僅かしか取れないような鉱石だって存在する。

マカライト鉱石やドラグライト鉱石、カラブレイイト鉱石などは昨今では『庭園』を除けば、採掘出来る場所は限られつつあるが、近年に至りその新たな活用方法が発見された事により、ますますその価値は高まっている。この為、『庭園』の部族と各団企業は幾度も交渉を重ねているのだが、未だ良い返事は得られていない。
かといって、脅しや詐欺など強引な手法を使えば、後に待つているのは【魔王】による報復だと分かっているから、そんな手も使えない。

結局、僅かに手作業で産出される鉱石を買い取るしかない、という状況だ。

……だが、この素材は違う。

そうした鉱石とも明らかに異なる何かだ。

「組成を分析する限りは何らかの生物的な素材とは思われますが……余りに異質に過ぎます」

見た事のないような分子結合構造、更には新発見の成分すら混じつているという。

一から解析し、それを再現するとなると……果たしてどれだけの時間がかかる事か、時間をかけても再現など不可能かも知れない、というのが科学者らの結論だった。

「……矢張り無理か」

厳しい表情をして、この国の大統領や大臣級を集めた会議で呻き声が洩れる。

【竜王】の装甲。

それは、世界でも有数のこの国にとつても、いや、この世界でも最強クラスの国力を持つからこそ何とかしたい代物だった。とはいえ、【竜王】の装甲は滅多に出回らない、というか皆無に等しい。

それは【竜王】である転生者の用心深さもある。

彼は人という存在を甘く見ない。自分自身がそうだつたからだ。もし、装甲などを容易に渡せば、それを分析して何時か自分をも上回る素材を生み出すかもしない。そう考えたからだ。

『庭園』でもまず手に入らないそれを、今回この国は莫大な金と引き換えに入手した。

……世界中を探せば、全く欠片も落ちていないという事はありえないし、そうしたものを見る者はいる。もつとも、今回の場合は多大な犠牲を払つて、の事だつたが……。

何しろ、今回の入手先は三箇所。

いざれも『庭園』内部の村、それぞれご神体と崇められていた欠片だつた。

一つは彼ら自身が派遣した人員を用いて盗んだ。

一つは村人を買収して、盗ませた。

一つは竜種の不意打ちによつて廃村となつた村から偶然に欠片の更に欠片、とでも言うべき部分を手に入れた。

その内、盗み出した二つはいざれも『庭園』から出る前に【竜王】に捕捉され、運び屋が生きて帰つて来る事はなかつた。

村に襲撃をかける、という事も考案されたのだが、過去にそれをやつて本国に襲撃をかけられた、というケースがあつた、という事

で却下された。

そうやつて「ぐく僅かな欠片のみが彼らの手元に残つた。

調査から実行まで用いられた金や動かした人員は相当なものであり、更に言つならば、危険も多大なものがあつた。

それだけの危険を冒して手に入れた結果がこれでは想像はしてもがつくりと来る。

だが、研究は続けさせる以上の事は彼らには出来なかつた。それに彼らにはまだまだすべき事が一杯あつたのも事実であつた。

「……【竜王】か」

部下が全員退室した後、大統領は執務室から外を見ていた。

【竜王】の存在は人類の歴史に大きな影響を与え続けてきた。人を遙かに超える超越存在が現実に存在する。

その事は人類にとって、常に脅威であり続けたのである。そして、別の歴史と異なる流れを幾つも生み出し続けた。

別の歴史など彼は知る由もないから、当然だが、例えばこの世界では魔女狩りという事はなかつた。

むしろ、魔女狩りは別の意味で用いられたのである。すなわち、魔法でも何でも使えるのなら欲する、といった具合だ。

神を崇めるにしても、何しろ具体的な絶対的な力というものが眼前に存在している。

宗教による他宗教の迫害や、奴隸制度も発達しなかつた。人同士、共存を図つていかねば、恐怖に対抗出来なかつたのである。いや、自分達ではどうしようもない力を前にすれば恐怖から排除しようとするか、或いは崇拜するかのどちらかが多くなるのは当り前なのかもしれないが……その排除が出来ない。

実際、この大陸もこの大陸の土着民族であり、別の歴史ではあ

りえない出身だつた。

無論、彼にはそんな意識はない。

ただ、現在の現実だけを元に、自国の発展を願つていた。

「……何時かは、何時かは人は貴方を超えてみせる」

自身の出身部族にとつても崇める精霊の頂点とされているのは知つていた。

その偉大さも知つていた。

けれども、彼はそれを超える事を望んだ。だからこそ、今、ここにいる。

眼前に広がる光景を見ながら、彼は誓つのだつた。

……もつとも、人が発展すればする程、【竜王】もまたその数倍の勢いで進化すると知つていたら、……果たして彼はどう思つただろうか？

外伝4（後書き）

この世界だと、何しろ田の前に人外の超越存在がいたせいで、宗教界にもとんでもない影響を与えてます。自然崇拜も世界の大宗教の一つに数えられるような大きな勢力を誇っています

また、奴隸制度とか征服とかそういうのも多大な影響を受けてますぶっちゃけ、生活の苦しさから自分を売るなどといった事例以外の力での奴隸制度は成立しませんでした

（この世界でも『庭園』に来て、力で奪おうとした者はいましたが、全部生きて帰れませんでした。中には【竜王】自身は気付きませんでしたが、史実のバスコ・ダ・ガマに相当する人なんかもいました）また、主義にしても竜王主義などといった自然の抑止力といった概念に基づいた人類の謙虚さを訴える主義が発達したり……

人類史にも無視できないどころか、影響を「えまくつてる【竜王】でした

賑やかな祭りだった。

カラフルな衣装を纏つた者が大勢笑顔で歩き回る中には、明らかに戦士と思われる甲殻を用いた鎧に身を包んだ者達もいる。そうした人間に對しては、周囲の人間は敬意を払い、戦士達も敢えて堂々と歩く。

『大竜王祭』

『庭園』にて行われる最大規模の祭りだ。

ここではハンターと呼ばれる戦士達が【竜王】から一年の祝福を受けるのがクライマックスだ。

そんなどこかうかれる空氣の中、それとは異なる空氣を持つ者達もいた。

「……賑やかですね」

「ああ」

某国から派遣された表向き学者とされている人々。
その中に、彼らはいた。

この大竜王祭だが、基本的に来る者拒まず、去る者追わず。ただし、犯罪犯すような奴は徹底仕置き、という祭りだ。

従つて、外部の人間であつてもこの『庭園』の基本理念に従う限り、参加を認められるし、実際、学者達もカリユート族に普通に歓待され、中には早くも下戸の癖について周囲の空氣に流されて酒を呑んだ拳句、撃沈してしまった者もいる。

この後の降臨を見逃しては一大事と、周囲が青い顔でぐつたりし

ている当人、必死に薬を飲ませたりしているし、酒を勧めたカリュート族の人間も、申し訳なかつたと酔い覚ましの薬を持つてきたりしてくれている。

彼らも怪しまれない程度に楽しんでみせていたが、この一人のみならず一部の者達の目的は異なつっていた。

【竜王の健在の確認】

彼らの任務はこれに尽きる。

『庭園』の維持はつまる所、【竜王】の存在にその全てがかかっている。

カリュート族は戦力として見るのならば戦力にはなりえず、竜種とて【竜王】以外ならば何とかなる。

だが、【竜王】だけはどうにもならない。

逆に言えば、【竜王】が死んだならばその瞬間から『庭園』は各国の狩場となる。だからこそ、既に何百歳とも言われる【竜王】がまだ健在なのかを知る為に、各國は大竜王祭に人員を派遣する。

「……というのが表向きの理由だ」

年配のベテランの言葉に、今年が初参加の若手は訝しげな表情になつた。

「知つての通り、我が国では【竜王】を崇める宗教勢力も大きい」

黙つて頷いた。

実際、世界を探せば複数の宗教で、【竜王】をある宗教は悪魔と称しているがそれは極少数派に属する。むしろ神の使い、大精靈、自然の化身、地球の意志など殆どは肯定的なものだ。

原因は簡単で、敵視していた宗教の内、ある最大派閥がかつて討

伐軍を、その宗教を国教としてた周辺国家と共に上げた事があった。結果は、討伐軍壊滅、国家崩壊、最高司教含めた宗教指導者ら全員行方不明（聖堂丸ごと消し飛んだので消し炭すら残らなかつた）といつ結末を迎へ、当然の如くこれ以上【竜王】の怒りを買わぬようとに、周囲の国家から新たな国が建つと彼らは慌ててかつての旧国教を弾圧するに至つた。

そんな目にあうぐらいなら、まだしも素直に取り込んで崇めておいた方がいい。何しろ、【竜王】自身は崇められているからといって、特に何かを要求する訳でもないのだから。

この若手も熱心という程ではないが、日曜には教会に行つたりぐらいいはする。

だから、【竜王】に対して嫌悪感は持つてはいない。

だが、本当にそこまで崇めるような相手なのか、という疑念もあつた。

何しろ、神だの精霊だと違つて、相手は物質的な肉体を持つてそこにいる。

なまじ、他の神だの天使だのが空想というか精神的な存在ゆえに、加えて他の竜種というものを知つてゐるが故に、本当にそこまでの存在なのか、という気持ちがどこにあるのは事実だつた。

実際の所、【竜王】が敵視されていなければこの辺の事情も大きかつたりする。

まあ、敵視はしてないが、その後はどう考へてゐるのは大国の政治家や大企業の社長会長クラスでは仕方ない話なのかもしけないが

……。

「だからまあ、巡礼とかする奴も結構いるんだ。ほら、あそこに入る連中なんて正にそうだ」

そちらの方向を見れば、質素な服装の人間達がほがらかにカリュ

ー一族に混じつて笑いあつていた。

ただ、よく見ればその顔立ちなどは或いはふつくじと、或いはどこか危険な空気を漂わせている者がいる。

けれども同時に彼らは警戒などがない、穏やかな空気を漂わせていた。

「あの爺さんはテスラエレクトリックの会長、あつちの危険そうな空氣漂わせるのは高名なマフィアの大ボス……ゴッドファーザーって奴だ。お、先々代の政治から引退した大統領閣下もいるな」

他にも大物がいるなあ、と感心しているが若手からすれば仰天して目の玉が飛び出そうな話だ。

何でそんな相手が一緒に、と聞けば、この地では普段している警戒が必要ないからだといつ。

騙される事もない、殺し屋が襲つてくる事もない、純粹に祈り、祭りを楽しめる。だからこそ、彼らも安心していられる、だからこそ年一度巡礼としてこの地にやって来るのだと語る。

「……本当に大丈夫なんですか？」

「審意なんぞ持つてたら、いや、仕事だと完全に割り切れる殺人マシーンの漫画みたいな奴でも『庭園』にや入れねえよ」

入つても、この時期じゃあ1kmと入り込まない内にあの世行きだ。

そう語られて、半信半疑で若手はベテランを見る。

「……『庭園』つて滅茶苦茶広いですよ。どうやって回るんです？」

「さあな。瞬間転移してゐるって話もある。少なくとも地球の裏側までなら一瞬で行けるらしいぞ」

若手は沈黙して、「はあ?」と呆気に取られたような声を上げた。
それは本当に生物なんだろつか?

「わあなあ。まあ、一度見れば分かるわ」

そこで若手は気がついた。

ベテランの顔にあるどこか憧れのような何かに。
だが、それが疑問として言葉になる前に、周囲がシンと静まり返つた。

慌てて周囲を見れば、全員が中央の祭壇に視線を向けている。
その前にはハンター達が整然と並び、巡礼者達やカリュート族がその後ろに並ぶ。

そして、最前列にはカリュート族の最長老達が静かに佇む。
気付けば、先程まで給仕などを行っていた人間らも静かに視線をそちらに向け、礼を取つていた。

無論、先輩も、だ。

そうして、僅かに風が舞い上ると……そこには龍がいた。
何の気配も、舞い降りる時に予想していた羽が巻き起こす風もな
く、そこに【竜王】がいた。

「……」

声が出なかつた。

威圧感、とは違つ。

恐怖、とも違つ。

そう、これは……畏敬。

【竜王】が軽く吼える。低く、周囲に響けどばかりに吼える。

それに応じるかのように周囲から竜の声が響く。

遙かに山を越えて、平原に集い、火山の灼熱の中から、湖で、雪山で風を伝つて声が響く。

田の前で聞けば、最新鋭兵器で武装して初めて圧倒できる相手に、恐怖に震えるであろうその声と共に、けれど何も恐れを感じる事なく、ただ自然に頭が下った。

それは自然の化身。

今なら、分かる。

それは自然そのもの。どこにでもいて、どこにもいない。幼い頃には感じていたそれを改めて感じて……。締めるかのような力強い声にはっと意識を戻した。

……そこからは宴だつた。

誰もが無邪気に歌い、力試しをし、ただ騒いだ。

【竜王】も先程の気配を感じさせる事なく、純粹に酒を肉をかつ喰らいながら、それを楽しそうに眺めていた。
そんな光景をぼうつと見ている若手にベテランが笑みと共に語りかけた。

「な? 分かつただろう? 【竜王】が健在かどうかなんて、何故知る事が出来るかなんて、何故どこにでも現れる事が出来るかなんて考えるだけ意味のない事なのさ」

確かにそうだ。

若手の顔にも苦笑が浮かんだ。

……来年もまたここに来れるかな。自然とそんな事を考える自分がいた。

外伝5（後書き）

竜王を奉るお祭りです

『一ちらホーキアイ。スパローーー応答せよ』

『一ちらスパローーー、何か注文が入ったかい?』

空中早期警戒機ホーキアイからの通信に、F-18戦闘機を駆る
ダニエル少佐は軽い口調で尋ねた。

現在彼らはある地域紛争に派遣された空母クレイジー・ホースの
所属だった。

とはいって、現在の場所は陸上であり、陸軍所属の地上攻撃機A-1
0の護衛役として上空を回っているというのが現状だった。

『そうだな、先程から妙なエコーがある』

妙なエコー?

首を傾げたダニエル少佐に、ホーキアイからの通信が続く。

『反応の大きさ自体はちょっと大きめの鳥程度だ』

おいおい、なら呼び出すなよ。

そう思つたのは一瞬だった。

『ただ、速度が時速800kmある』

何だそりや。

確かにそれは妙な反応だ。

まさか鳥が時速800kmで飛べるはずもない。となると……。

『敵機か？』

『分からん、とりあえず仮称としてボギー₁とこいつを呼称する』

ボギー、か。

敵機って意味じゃねえか。成る程、あいつらもこれが味方だとは思つてねえんじゃねえか。

そう思つて笑う。

『しかし、何だと思つ』

『分からん、話に聞くステルスとかかもしれん……』

おいおい。うちでもまだ実用化されてないようなもんを奴らが持つてる訳ないだろ。

そう思つたが、自分とて答えは持つていない。とりあえずは向つてみるか。

そう判断し、自らの部隊を率いて、ダニエル少佐は飛んでいった。

雲の中を進むそいつを見つけたのは偶然でも何でもなかつた。

『……じちらスパロー₁、ボギー₁を発見した。雲の中にいるが……でかい！』

おいおい、B52を上回るんじゃねえか？』こいつ。

レーダーを確認するが、駄目だ……酷く小さく捕らえづらい。

これではレーダーを用いて敵を感知するミサイルは駄目だ。それなら……。

『スパローーーよりホーカーアイへ、攻撃許可求む！』

『了解した、スパローーー。現在地上では重要な作戦の真つ最中だ。上も邪魔されたくないという事で許可が出た。オールウェポンズフリード！』

『了解！！いや、スパローズ！ついてこい！！』

全機が赤外線ホーミングを選択する。

フォックスー！その叫びと共に複数の機から発射されたミサイル群は雲の中の熱を捕らえ、まっしづらに向つてゆく。派手な爆炎が広がる。

ついでとばかりにダイブした彼らはヨーロッパルカンを撃ち放ちながらその巨体の傍を駆け抜け……。

『な！？健在！？奴はまだ健在だぞ！？畜生、ミサイルでびくともしてねえ！！』

すり抜ける一瞬、確かに悠然と舞う巨体の陰を見た。

嘘だろう！？というのが正直な所だ。空を飛ぶというのは非常に微妙なバランスの上に成り立っているだけではない。地上を行く戦車などと比べれば、頑丈さに大きな差があるのだ。

『あのー……』

『なんだ、スパローー4！』

部下の一人が物凄く言いづらそうな口調で言いかけたが、ダニエル少佐は怒鳴りつけるような口調で言った。この忙しい時に、とい

うのもあるし、報告ならきちんとホールサインを呼べーと軍人らしからぬ言い方に怒ったという意味合いもある。

『先程、自分、あの影が何か見えたんですが……』

『なに? よし、お手柄だ! ……それで奴はなんだ!』

だが、その言葉に即座に機嫌を直して怒鳴った。
それなら……そう思つた彼は、だが、直後に絶望に叩き落される事になった。

『……【竜王】です』

『……なに?』

ホーケアイ共々、一人して思わず聞き返してしまった。

『だからあの影……【竜王】だつたんです……』

その言葉を証明するかのように、雲の中から巨体が姿を現す。
その姿を見れば間違いなく……。

『りゅ、【竜王】……』

じゃあ、間違つて自分達は【竜王】に攻撃してしまつたのか……。
絶望に染まつたダニエル少佐だが、【竜王】は特に彼らに反応せず、そのまま飛び去つていつたのである。後に敬虔な世界最大の自然崇拜宗教の信徒だったダニエル少佐は、この紛争後、軍を除隊して世界巡礼の旅へと出発した……。

なお、【竜王】自身はといえば、ここに顔を出したのは、「これがあの有名な紛争のこの世界バージョンか」と物見高く見物に行つただけの話で、あの攻撃も流れ弾だつたと思つたりしていた……。

「やっぱ戦場は危ないねー。ミサイルが流れ弾で飛んでくるとは思わなかつた。悪い事したかな」

外伝6（後書き）

近代兵器相手だとこんな感じです

G級ハンター。

そう呼ばれる人外がいる。

エナはその一人だ。

見た目は小娘であろうが、その腕力は大剣という大型武器を扱うだけあって、G級ハンターの中でも群を抜く。かつての彼女の愛剣は先祖伝来のブリュンヒルデであったが、これは先だっての討伐の際に永遠に失われてしまった。それは仕方のない事だ、と彼女も諦めている。

如何に強力な武器であっても、G級ハンターの相手は竜種だ。強化してあろうが何だろうが同じ竜の素材を用いている以上、そして補修にも素材がそうそう手に入らない為に限界がある以上、何時かは寿命を迎えるだろう、そう思っていた。ただ、それがあの時だつただけの事。

それに、新しい武器を手に入れる事が出来たのだ。

【大蛇の大鉈】

そう呼称されるそれに文句はない。

まあ、防具は自分で討伐した、という愛着があるのでリオソウルのままだが……。

今回、彼女が来たのは【掃除】の為だ。

といつても、別に竜を【掃除】、すなわち討伐する訳ではない。

昨今、余りの異質ぶりに【竜王】と密かに呼ばれつつある、強大なりオレウス。彼の食事場所には多数の竜の鱗や殻が転がっており、その中には滅多に手に入らないような凶悪な竜種のものまで混じっている。

例えば中身を食われたグラビモス。

例えば綺麗に蟹の如く食われたティガレックス。

例えば仕留めて食つたはいいが、余り氣に入らなかつたらしく丸々残つてゐるゲリヨス。

他にもダイニアウ、ショウグンなどの素材が当り前のよひに転がつてゐる。

正に宝の山だ。

實際、回収部隊は涎を垂らしそうな顔で嬉々として回収していた。

エナは護衛としてこゝにはいるのだが……まあ、まず襲われる事などあるまい。

何しろ、少し離れた所に下手に荒らされないよう、とかまあ色々理由はあるのだろうが、【竜王】が寝そべつてゐるからだ。

事実、ランポス達でさえ、こゝでは一度も見ていない。

分かつてゐるのだろう、こゝに下手に踏み入つたらどうなるか…

…。

そう思いつつ、エナは【竜王】の下へと歩み寄つて、その体を撫でる。

【竜王】はとこゝと、ちらり、と視線をエナへと向けたが特に何をするでもなく、あぐびしてゐる。

敵として見られていいのか、と思つと思わず苦笑してしまつ。

確かに、前に交渉に来た折、こゝの【竜王】が見た目によらず随分と優しいのは理解した。

だが、仮にも護衛という事で完全武装している自分が触れる程に近づきながら、それを機にしていないのは野生動物ではありえない。きちんと相手と約束を交わすという意味を理解してゐるとしても、自分を脅威と判断していない、それがなければ、こゝにして触らせてなどくれないだろう。

とはいへ、もし攻撃したとしても効果があるとは思えない。する事もない。

以前に乗せてもらつて空を飛んだ事はあった。

あれは初体験だった。

そもそも何故、自分がこうして空を飛んでいるのか分からなかつた。

元々は自分は交渉の護衛役として来たはずだったのだ。

とはいっても、元より口下手気味な自分としては特にする事もなかつた。

なので、子供達の監視をしていたのだ。

この世界は子供でも仕事を探す。

脅威がすぐ傍にある為に、兵士だった親を失うという事もあるし、貧しい人間が売るという事もあるが、そうした子供でも大事な労働力だ。普段はあれこれと……まあ、雑用だが何かしら働いている。とはいっても、今回のような状況ではそこまでやらないといけないような事もない。

その分、自由に動ける時間が増えていた、のは良かったのだろうが、何しろここは人の手が一切入っていない土地だ。ちょっと離れて水場に行つたら死体になつた、なんて事になつたら大変だ。

だが、くつろいでいる【竜王】に近づいていくのは想定外だった。これがガラムとかなら叱るなり、怒鳴るなりして近づけないようにするのだろうが、私はどうにも怒るというのが苦手だ。せめて、【竜王】が吼えるなりして脅してくれれば良かつたのだろうが、平然としている。

その内、触つては逃げるを繰り返しだした。
なんて事をしている内に……。

「なあなあ、乗せて飛んでくれないかー？」

などと言い出す悪ガキまで現れた……。
さすがにこれは見過ごせない。

そう思つて、私は近づいていった。

のだけれど。

何故か、今私は空を舞つてゐる。

理由は分かつてゐる。子供達の要望を【竜王】が断らなかつたからだ。

どういつ氣紛れかは知らないけれど、【竜王】は子供達に軽く応じてくれた。いや、言葉は喋つた訳じやないけれど、じつと子供達を見ていた後、頷いてくれたのだ。

『……乗せてもらつていいの?』

と、私が半信半疑で確認したら頷いていたし。

こうなつてしまつと、こちらとしても素直に応じるしかない。

とはいへ、子供だけ乗せる訳にもいがず、私もこうして乗つている。

「わあ……」

思わず自分の声が洩れた。

悠然と飛行する【竜王】。リオレウスはアプトノスぐらになら足で掴んで飛ぶ事が出来る。私達程度なら問題にもしないと思つてはいたけれど……むしろ、問題は私達の方にあった。

私達は飛べないし、元々リオレウスの背中なんて人を乗せる事なんて考慮されてる訳がない。

落ちないよう固定するにしても、私が手の届くよつにするとなると……一度には子供は一人ぐらいが限界だった。まあ、そんなに多い訳じやないから問題はないのだけど、そうなると地上に床る子供達の為の護衛が必要になる。

ハンターは他にもいるから、彼らにお願いする事にした。

本当は【竜王】に乗るのもお願いしようとしたら、真つ青な顔で

頭を横に振っていた。

気持ちは分かる。

G級ですらないハンターが、G級でさえ勝てないリオレウスに乗つて空を飛ぶなんて嫌だろう。

ガラムは今回の交渉の責任者だから乗せられるはずがない。なので、私になつた訳だが……こんなに空を飛ぶという事が爽快だとは思わなかつた。

この世界でも空を飛ぶ方法がない訳ではない。

じく一部では空を舞う飛行船というものが試作されているという話もあるが……間違つても一般的なものではない。

当然、エナも空を飛ぶのは初めてだつた。

これが空。

どこまでも広がる、そんな感覚だつた。

雲というものがみんな触れないものだと初めて知つた。

後で、ガラムに呆れたような目で見られたが、その日は一日気分が良かつたのを覚えている。

今回はさすがに空を飛ぶ訳にはいかない。

しかし、そろそろ交代の時間なのだから、休憩には入つても良さそうだ。

エナが【竜王】の傍にいる為におつかなびつくり近づいてきたハンターに、交代の合図をしてから座る。

何となしに【竜王】に寄りかかるように、尻尾に腰掛けるようにして座つた。ただ単に地面が湿つていたからなのだが、そうすると【竜王】は尻尾を引き寄せて、寄りかかりやすくしてくれた。

「……ありがとう」

何となくお礼を言つて、気にするな、と言わんばかりに喉を鳴らされた。

……その後、【竜王】に寄りかかったまま眠るエナの姿に、他の者達から「たすがG級ハンターだ」と畏れを込めて語られるようになるのだが……彼女がそれを知る事はなかつたのだった。

外伝7（後書き）

エナさんのその後です
まあ、ガラムに関してはそういう人が生き残る事もあるて事で……

「一より会議を始めます」

首脳国会議、そう呼ばれる世界的にも重要な会議だ。見晴らしの良い一には、ドンドルマの郊外にある綺麗なホテルだった。

この『庭園』で唯一開かれた都市周辺にはこうした瀟洒な建物が幾つかある。

中にはかなり大規模な会議場まであるが、それらは全てこうした首脳会談や会議に用いられる為のものだ。

理由は単純。

この周辺で、暗殺だのテロだのといった物騒な手段はあらか、盗聴まで行われる心配がないからだ。

もつとも、『庭園』内部には空港までは設置出来ない。だが、この地は利用したい。そんな結果として作成されたのがわざわざ各国共同で【竜王】に許可を得て建設された、ドンドルマ沖合に浮かぶメガフロートを用いた空港だ。ドンドルマ沖合には嘗て沈んだ大艦隊などで航行不能な領域があるが、そうした領域を利用して作られている。

ちなみにかつて盗聴を図った国があったのだが、そのメンバー全員が盗聴の為にヘッドホンをつけるなり、吼え声を耳にして卒倒する羽目に陥った。

それどころか、彼らが潜んでいた建物の屋根に突如舞い降りた【竜王】に街の住人がパニックを起こすと共に、誰かが問題を起こしたのだと血相を変えた。

もちろん、逃げ出そうとした連中もいたのだが、悉くが捕まつた拳銃、彼らを掴んでその国へと飛来した。

しかも、その国のトップはそんな事を命じておらず、下が勝手に動いての事だったのだが……その命じた当人のいる場所へ正確に飛来。

出てきた責任者がそらとぼけようとした所、地上から跡形も無く消滅するに至った。

ちなみにその建物の玄関は以後移築された。理由はそれまでの玄関の前に特大のとんでもない深さの大穴が開いてしまったからだつたりする。

これ一度で凝りる連中な訳もなく、複数の国が企み、その全部が失敗に終わった。

こうなると、首脳らも何しろ自分の国の最高クラスの人材と技術を注ぎ込んで失敗した訳だから、安心して使えるようになる。

今では誰もが最高クラスの会議だけでなく秘密会談でも用いられていた。

あくまで会談や会議に使うだけなら文句を言われる心配もないからだ。

なお、ここで騒いで排除されるのは、過激な自然保護論者も同じだつたりする。

中には「我々は貴方の為に働いているのです！」などと喚いた狂信者連中もいたのだが……結局知る事が出来たのは【竜王】は『庭園』で騒がれる事を絶対的好んでいない、という事を悟つただけだつた。

「さて、では今回も【竜王】に立会いをお願いする」

会議の立会い、というよりも滅茶苦茶な事を言い出す者が出来ないの抑えをお願いしている、と言つてもいいかも知れない。

誰だつて【竜王】相手に嘘をつく気にはなれない。

自國の利益を主張するのは当然だが、決めた事は守らねばならぬ

い。

実際、国際条約もまた、【竜王】の存在が大きな役割を果たしている。

ある研究者はこう語っている。

「【竜王】の存在があるからこそ、世界の各国は条約を守るし、国際法を自國に都合よく解釈して動く事もないのだ」

歴史一つにしても、何しろ【竜王】は数百年の歴史を知る生き字引だ。

言葉は喋れずとも、本当にあった事なのか嘘の話なのかで頷いてもらひう事は出来る。

実はこの分野でも、どこにでも馬鹿はいるもので、【竜王】に取材をした上で自分達に都合の良いように編集して放送したTV局があつた。

怒った【竜王】に襲撃されて、上層部が土下座してTVに謝罪を幾度も流した上、きちんと本来のものを放送し、それに関わったプロデューサーらは軒並み業界から追放された。……尚、後にこつそり業界に復帰しようとした結果、それを企んだオーナー（その裏には色々と諸事情があつたらしいが）が屋敷ごと消し飛ばされるに至つた事もある。

【竜王】は怒らせると極めて恐ろしいのだ。

逆に言えば、【竜王】立会いとされた会議での決定に従わないという事はありえず、それは会議の信頼性を高める事になる。だからこそ、こうした重要な会議はこの地で積極的に行われる。そう、正に神に対して誓いを立てるかのように……。

「此度の会議では【竜王】の名に誓つて、以下の決定が為されました」

そんな声明と共に各国首脳が報道陣に発表を行っていた……。

「ふむ……良き哉良き哉」

満足げに神は頷いた。

その視界には巨大な竜の姿がある。

神の力は衰えた。

何故か。

地上の民の信仰心が衰えたから? そんな訳がない。
要は後継作りに失敗しているのだ。

神とて後継を作れば良い。

だが、自らの力で生み出した後継は向上心がない。

「……生まれつき力を与えた者は奢りやすい」

生まれつき力を与えてみた者はその世界で満足してしまっている。
外部の世界へと突き抜ける力を求めようとしない。……当然か、彼
らは自分と会った記憶などない。世界の外に更に上の世界があるな
ど、本気で信じず、その世界の範囲で強くなり、それで満足してし
まう。

神として生まれた者はもつと駄目だ。

生まれた時点で上に立つ者など既にいく僅かしかおりず、下の者
が圧倒的に多いせいだろう。

その時点で満足してしまう。

下手をすれば、傲慢に陥ってしまう。

だが、あの竜は違う。

人として生まれ、転生する際に自分と会つた事で神の存在も世界の更に上も知り、その上で成長を続けている。そして、神の後継としての資質が与えられた彼の竜に成長の上限はない。

当人は意識していないだろうが、その力は順調に新たな神への階を昇っている。

そして、神を崇める者もまた……。

そう、それで良い。やがて奴が神の領域に至った時、自分は更なる上への階梯を昇り、彼の竜が新たな神として自らの後を継ぐ。だから……。

「昇つてくるがええ、神の座まで、のう?」

外伝8（後書き）

少し国際環境と神様の思惑について

これは大分昔のお話。

周囲の一国がようやく諦めた頃。

リオレウスはゆったりと世界を旅していた。

無論、時折自分の土地には戻っているが、まだこの頃の人間達はそこまで無理をする必要がなかった。

世界にはまだまだ人の手が入っていない場所が多数あり、危険も至る所に転がっていた。

そんな中、ハンターズギルドにしてみれば、大量の竜種の素材が手に入ったのだ。そして、今後も何年かに一度は安全に手に入る事が期待出来る、となれば敢えてG級ハンターを失う危険まで冒してリオレウス？を討伐する意味などない。

むしろ、危険を考えれば、損しかない。

となればハンターズギルドとしては受ける意味がない。

国の上層部としても自分達が狙われないから、依頼も出せる。逆に言えば、怒らせれば真っ先に自分達が狙われるのが確定している状況で、依頼を出す気になる訳がない。

商人達も通過するだけなら襲撃を受けない。

それなら誰も依頼を出す訳がない。いや、中には血迷つてその領域での大量採取を目論む者もいない訳ではないのだが、動く者がいない。

ハンターは依頼がそもそも出せない。

無頼達は危険には敏感なので、場所を聞くなり金だけ受け取つてさっさと逃げる。

国の兵士達も下手にそういう奴が動けば、自分達の命に関わりかねないので、そういう人間には容赦しないという訳だ。

だからこそ、リオレウスにしてみれば、偶には世界を旅行してみるか、という余裕も持てる。

古龍とも出会えた。

ある山では風翔龍クシャルダオラに。

ある雪山では崩竜ウカムトルバスに。

老山龍ラオシャンロンが歩くのも目撃した。

ラオシャンロンの場合は特に、手を出そうかと思った。

他の古龍やそれに相当する竜が比較的人と接する事のない地域に居を構え、滅多な事では出会わないのに対して、ラオシャンロンはいわば災害だ。

ただ歩き続けるだけだが、それだけでその巨体は甚大な被害を出す。

……それが災いして、未来においては田立つ事もあり、真っ先に絶滅した古龍となつた訳だが、まだこの時代にはそんな事、リオレウスにも想像がつくはずもない。

必死に砦を作り、命を賭けてせめて街へのルートからずらそうと戦いを挑んでいく様に少し手を貸してやろうかと思つたのだ。……だが、これも自然のあり方。

ラオシャンロンは悪意を持つて進んでいる訳ではない。自分の縛張りを侵した訳でもない。

それならば自分が手を出す事ではない、そう考えたのだ。

……その後、進路をそらす事に失敗し、街が崩壊していく様を見る事になつた時には少し堪えたのも事実だた。この頃は、まだ彼の意識は人のそれに近かつたのだろう。

「しかし、まさかこんな所でなあ

ある山での出来事だった。

この山には遺跡があり、半ば以上埋もれるよつとして見事な洞窟のような状況になつていた。

そこで彼は一体の同類と出会つた。

銀のリオレウス。すなわちリオレウス希少種である。

「何用だ！」

警戒心がとんでもなかつた。

ちょっと雨風を凌ぐ一夜の宿に、と思つただけだったのだが、目の前の希少種は今にも襲い掛かってきそうな気配だ。この気配には覚えがあつた。

……すなわち、番を得ての子育ての時期だ。

他の種は雌に危険が及ぶかもしれないから排除しようとするだけでなく、これから栄養を必要とするのが分かつているから余裕があれば狩ろうとする。

同種の雄の場合は、雌を奪われる危険がある。

結果、巣に近づく全てを排除しようとする訳だ。

「すまん、一晩の宿が欲しかつたんだが……お邪魔みたいだから「お兄ちゃん？」は？」

ふともう一体の声がかかつた。

そちらには黄金に輝く鱗を持つリオレイア希少種の姿があつた。

「いや、申し訳ない。家内のお兄さんとは」

リオレウス希少種も驚いたようだったが、その後は案外フレンドリーに迎えてくれた。

その辺は幸いだった。

この希少種は相当に頭がいい。

元々希少種は知能が高いものが多いのだが、これが通常種のリオレウスならお構いなしに襲い掛かってくるだろう。

こうして歓迎を兼ねて話が出来るなどという状況になどなりえるはずもない。

「しかし、あの子がこうしてお母さんしてるとのはなあ」

焚き火などという事はしない。

彼らはそんなものは必要としない。

暗くとも、それを見通す目がある。

……もっとも、だからこそ竜種は文明を発展させる事が出来ないのだろうと考えている。

だからこそ、何時か人の文明が発展した時、竜種はどうなるのだろう？ そう思つ。

戦闘機を、戦車を、果ては更なる兵器の存在を知るからこそ、人が何時かその領域に立つた時、竜種は果たしてどうなるのだろうか？ 家畜を襲うからと狼は絶滅の危機に瀕した。

虎にせよライオンにせよ、かつての記憶にある猛獸はそれ故に住処を追われ、数を減らしていった。

では人すら普通に襲う竜種はどうなのか？

……きっと人は狩るだろう。自分達の生活圏を拡大する為に現在でも普通に狩りを行つてゐるが、牧畜などを進めるならばより一層輪をかけて……。

いや、やめよう。

どうせ、自分が死んだ後の話だ……まさか、この時は自分が延々生き続けるとは思わなかつたので、人の急速な発展と竜種の衰退を目撃し、竜種の保護を行う立場になるとは思わなかつたのである。ふと視線を向ける。

そこには妹であるリオレイア希少種と、その腹によりかかるようにして眠る子供達がいた。

最初は警戒していた子供達だったが、両親が警戒していないからだろう。その内穏やかに眠つてしまつた。

妹であるリオレイア希少種も、夫であるリオレウス希少種も……共に優しげな視線で見詰めている。

だが、こうして妹と再会出来た事がどれだけの偶然か。

如何に強大な竜種といえど、それは大人になつてから。大人になれど、竜種同士の戦いで倒れる竜とているが、それよりも子供の代、新たな繩張りを探す過程で多くの竜は倒れる。

事実、あの繩張りに戻つてみれば、別のリオレウスが入り込んでいた、という事とてあつた。

その時、一匹は途中で敵わじと逃げたが、別の時は興奮した若いリオレウスが暴走した結果、殺す事になつた。

おそらく彼の弟妹とて下手をすれば、未だに生き残つているのは目前の妹一匹だけかも知れない。

この子供達も大人になれるのは果たして一匹いるかどうか……分かつてているのだろう、彼らとて。だが、それでも子孫を残すべく、彼らはこうして卵を産み、育てる。

……自分はどうなのだろう?

自分は同じ竜種に欲情した事がない。

滅多に人の女性と出会う機会がないから分からないが、人の子を愛する事はあるのだろうか？

いや、例え愛したとしても精神的なものに留まるだろう。人の子に竜の卵を産めるはずもない。

そう考えると目の前の妹夫妻が眩しかつた。

自分は人から竜となつた。それ故に、本来あるべき子を為し、自分の血を後の世に残すという事が出来ない。妹は区別出来た、夫であるリオレウス希少種が賢かつたからこうして争わずに済んだ。

……だが、その子、その孫は分からぬ。

翌朝、彼らに別れを告げ、再び飛び立つた。おそらく……彼らと

出会い事はもうあるまい。

そんな思いを抱きつつ、静かに空を舞い、やがてその姿は見えなくなつていった。

……【竜王】が巨大な『庭園』を手に入れた頃、その一角にリオレウスとリオレイアの一族が住み着くようになった。

今も、その空域にはリオレウスとリオレイアが比較的多く見られる空域として知られている。

その竜達が、【竜王】どじのような関係なのか……それを知るのは今では【竜王】のみである。

外伝9（後書き）

竜王の兄弟姉妹も全員が生き残れた訳ではありません
むしろ、竜王とかこの妹が例外です

「【竜王】の動きは?」

『ありません、静かなものです』

「……そつか。何か動きがあれば、直ちに連絡を入れてくれたまえ」

『了解です』

ふつ、と溜息をつき、受話器を下ろす。

見た目は古式ゆかしい電話機だが、中身は傍受阻止の為の機能を大量に詰め込んだ最新式だ。

「……【竜王】か……」

苦笑する。

今となつては、何とも可愛らしげな名前だ。

「今後は【竜神】と呼称するよつ提案してみるかな?」

案外、反対意見は出ないような気がするのだ。

現在、月に生身で平然と滞在している彼の存在ならば。

この星に生きる全ての命をあつせりと救つてみせた相手ならば。

それが捕らえられたのはほんの一月足らず前の話だつた。
10km単位の巨大な小惑星。それがこの星へと向つていた。

アマチュア天文家によつて最初に観測されたそれは瞬く間に『地球にぶつかるのではないか』という噂がネットに広がり、そして沈静化した。

世界のトップクラスの組織が、大学がこぞつて観測結果を発表したからだ。

それらは多少違があり、中にはアマチュア天文家の意見に賛同するような意見もあつたが、総じて共通の判定を下していた。すなわち。

【傍を掠めるだらう、だが落ちてくる危険性はない】

だから、人々は安心して話題のみに乗せていた。

次々と各国の宇宙関係機関が、この予想外に地球近傍を通過する小惑星へと探査機を送り込み、サンプルリターンを目指すのだと猛烈な勢いで開発が進んでいた、という話だった。

もちろん、裏は違う。

この小惑星が直撃コースに乗っている事が判明していったからだ。核兵器によるコース修正も考慮されたり、映画ばりに直接人員を送り込んでの作業も提案された。その結果は……。

全てが駄目、と出た。

核兵器は元々空気の伝播による衝撃が大きな武器となる。逆に言えば、伝えるべき媒体となる空氣のない宇宙空間では必要な箇所に直撃させる必要が出てくる。

無論、純粹な爆発の威力という面で見ればサイズ比で見て、ずば抜けているのだが……それでも巨大な小惑星の軌道をずらす、となれば、それも現在位置から見て、かなり正確になると闇雲に撃つ訳にはいかないので。最低でも、そこへ人員を送り込み、どこへ叩き込めばいいかを確認し、ビーコンなりを設置して、といった手順が必須なのだが……とにかく時間が足りない。

それでも何とかしようと誰もが足搔く中、一人がこいつ言った。

「【竜王】にも話してみたらどうかな？多少なりとも助けになってくれるかもしねん」

さすがに【竜王】でもあのサイズの小惑星相手じゃどうにもならんのでは？

そういう人間は多かつたが、とにかく本気で猫の手でもいいから借りれるなら借りたいぐらいだ。そして間違いなく、【竜王】は猫の手よりは遙かにマジだと判断され、外交団が急遽派遣された。

そうして、それを聞いた【竜王】はあっさりと了承し、飛び立つたのだ。

宇宙へ。

最初に報告を聞いた者は全員が耳を疑つた。

ある学者は鼻で笑い、事実だと知つた時頭を搔き鳴つて、こいつ叫んだ。

「本当に生物に分類していいのか！？」

宇宙空間で平然と活動可能な生物。

確かに、そういう類の昆虫がいるのは確かだ。具体的にはクマムシとか。

だが、自由自在に動ける訳ではない。そもそも翼を動かしても動けるようなものではないはずなのだが、【竜王】は平然と飛翔した。懸命に宇宙に上げた観測機器で追つていた彼らは小惑星に【竜王】が辿り着いた時、そしてその後の光景とその分析が終わつた後、乾いた笑いを上げ、各国元首共々口を揃えてこう言つた。

「まあ、【竜王】の事ですし」

早い話が思考放棄した訳だ。

その理由も当然といえば当然かもしれない。

如何に【竜王】が地球で空を飛ぶ存在としては巨大な部類といえど、精々が50m超。

目前の秒速km単位で飛来する小惑星のサイズは100kmを優に超える。

なのに具体的に何をしたかといえば、【竜王】は尻尾ではたいただけ。それで小惑星はいきなり90度方向を変えて、宇宙の彼方へそのまますっ飛んでいった。

あまりと言えばあまりに簡単に滅亡の危機は去ったのだった。

後に、彼らは最低でも【竜王】は慣性は制御出来るのだろうと結論した。何しろ、今もどんどん遠方へと遠ざかつて行く小惑星には破損がまるでない。

石をバットで打つ事をイメージしてもらえば分かるだろうが、力ずくで何とかしたのならば石、この場合は小惑星が破損していくてもおかしくはない。だが、小惑星への破損は全く見られなかつた。

ならばベクトルを変えたとしか考えようがない、というのが学者達の結論だった。

生身で宇宙空間を自由に飛行し、小惑星程の重量物の慣性を尻尾ではただけでやつてのける相手。そんな相手を生物と呼んでいいのか?という者もいた。

正に神の御業だ、と崇める立場を強めた者もいた。
【竜王】自身はその後しばらく月を散策してから、また戻つて来た、という訳だ。

無論、『庭園』に帰るまでずっと貴重なその姿はカメラに収め続けられていた、というのが冒頭の場面だ。

結局、この小惑星の話は世間一般には公表されるべき話ではない、と判断された事から【竜王】が何をしたのかも極秘とされ、その結果として【竜神】への改名も棚上げになつた。

ただ、ますます神聖視される事になったのは、ある意味仕方のない事ではあつただろう……。

無論、天文学者などにはそのような異変を観測した者もいた。だが、国家が援助しているような所には圧力がかかり、アマチュアではさすがに小惑星の観測となると詳細な観測を為しえた者はいなかつたのである。

もつとも、天文学者の中には敢えて公表した者がいたのも事実だが……国は学者に「何が」軌道を変えたのかは機密の名の元に極秘とした為に、小惑星が突然軌道を変えたなどという話をしても信用してもらえる事はなく、与太話山師扱いされる事になる。真実は一部のみが知るのみであった。

幾多の世界を超えた。
幾多の次元を超えた。

どれだけの時が流れただろうか？気付いた時、【竜王】の前には一人の老人がいた。

遙かな時の向こう、かつてこの老人に出会った、そんな記憶が【竜王】にはあつた。

「久方ぶりじゃのう」

老人はにこやかに微笑んだ。

『……貴方には何時であつたか出会つた記憶がある』

【竜王】の言葉に老人はどこか嬉しそうに頷いた。

「その通りじゃ。お主とはかつて、ここで出会つた」

その言葉と共に【竜王】の脳裏に原初の記憶が蘇つた。
そうだ、かつて前世において果てた後、自分は……。

『どうか、自分をこの姿にして送り出した神か』

転生した最初は神に文句を言いたくもなつた。

自分はモンスター・ハンター側になりたかったのであって、モンスターになりたかったのではないと。

だが、その後、彼は人の心を持ちながら、モンスターの立場を経験した。

そして、その過程で人の欲も、野生にただ生きて、けれども狩られる動物達もまた見てきた。

次元を超えるようになつてからは幾多の世界の欲望を、希望を、美しさを見てきた。

「その通りじゃ。そして、よう来てくれた……」

感概深げに思い返す【竜王】に神は告げた。
自身の後継を求めて送り出し続けてきた、と……。

神自身にとつてもそれは長い長い時を経ての事だった。
何十人どころではない。

何万でも足りない。

無限とも思える数の人々を或いは人の姿で、或いは獣で、或いは精靈として数多の世界に送り出し、或いは力を与え、或いはそのまで、或いは最初から下位の神に準じる程の力を与えて送り出してきた。

ある者は途中で果てた。

ある者は欲に溺れた。

ある者は力に溺れた。

そして、またある者は力に翻弄され、原初に帰した。

「【竜王】よ、お主がはじめてじゃ。この神の座へと辿り着いた者は……」

幾多の次元を超えてきた彼には新たな神の座へと就く力が備わった、いや、神とならねばならぬという。

「最早、お主の生まれ故郷の世界に直接干渉する事はお主には出来ぬ」

『……だらうな』

それは【竜王】にも分かつていた。

嘗てはまだ自身が介入する事も出来た。

だが、何時しか世界の脆さを【竜王】は感じじるよつになつていつた。

彼が全力を揮うには世界は余りに小さく、そして儚いものになつていたのだ。

「今のお主には世界を創造し、また消し去る事も容易い。それが神の座の端へと辿り着いたといつ事じや。無論拒絶する事も出来るが……その時、お主が他の世界を渙させにいろいろ程の許容量を持つ世界は最早あるまい」

それは、一つの世界の可能性を摘む事なく、最早彼が存在し続ける事は出来なくなつたといつ事。

彼がただあるだけで、世界が耐えられなくなり滅ぼしてしまう事を意味する。

『端、か』

どこか苦笑したような【竜王】の声に神は頷いた。

「そう、端じや。どのような世界も上には上がりない。お主が新たに神の座に就く事で、わしもまた上の階梯を田指す事になろう」

『初めて会つた時は、破壊の神様だの祝いだの言われたものだつたがな』

今では怒りが湧く訳ではないが、思い返して問いかけた。

「嘘は言つてはおらんよ。破壊の後には創造が、創造を行えば何時かは破壊が来る。創造と終焉は紙一重、始まりなきものもなければ、終わりなきものもおらん。わしら神として、それは同じ事じや」

例え、無限に等しい時間を生き続けようとも、果てには終焉がある。

いや、進化の果ては滅びがあるとこうべきか。

神もまた、何時かは余りに広がりすぎた自我故に世界との境界線があいまいとなり、やがては全ての世界の始まりたる混沌と一体化し、自我は溶け去る。

『神、か……』

思えば遠くまで来たものだ。

ふと背後を振り返る。

そこには可能性があった。

数多の世界があり、そこに生きる生命があった。

そして、最早自分が共にある事の出来なくなつた世界でもあった。

『分かつた、新たな神の座、引き受けよう』

「感謝する」

その言葉と共に老人の姿は溶け崩れた。

おそらく、更なる上の次元へと登つていったのだろう。

何時かは自分もああして登る道を選ぶのだろう。

進化し続けてきたからこそ、世界を知るからこそ、ただ見続ける事に何時かは耐え切れず、心をすり減らし、更に上へ上へと目指す

事でこうして世界を見守り続ける事から……幾々の滅びを迎える世界を、ただ見守り続ける事になるのだろう。

きっと、その時自分に出来る事はさぞやかなものだ。

かつてのように直接手助けしたくとも、まるでシャボン玉に手を出したような結末がきっとその時は待つているのだろう。

だが、とりあえずは……。

『しばらくは見守るとあるか』

自身の神の御使いはどのような姿にするか、と考えつつ【魔王】は世界を優しく見詰めていた。

外伝11（後書き）

これで正式の外伝の方はラストです

後は異伝ですね

異伝20・真剣で私に恋しなさい！

「くつくつくつく……」

どうしてこうなった？

【竜王】は何とも困惑しながら、不気味な笑い声を上げる眼前の人間に視線をやつた。

笑つていれば魅力的な女性なのだろうが……今の姿を見れば百年の恋も冷めそうな恐ろしい姿だ。

そもそも【竜王】はこの地へと降り立つつもりはなかつた。降り立つたのはあくまで事故だ。

創造神ルドラサウムと名乗るでかい鯨のような相手を次元突破する際に間違えて轢いてしまつたのがそもそもの始まりだつた。

慌てて滅びかけた対象を 確かに相手も力は巨大だつたが、現在の【竜王】相手では空母に挑むゾウリムシレベルだつた をとりあえず再生し、世界を管理する対象として構成し直した。

大丈夫かな、と余所見しつつ飛び去つたのだが、その結果、余所見運転事故の元という言葉通り、間違えて別世界へ転移する際に座標をミスして、人々が暮らす世界の真つ只中に出現してしまつた。

……尚、再生された相手は【竜王】が『創造神なんだからこんな感じだろ』という概念が思い切り入り込んだ為に、実に慈愛と共に自らの創造した世界を見守る存在として再生しており、それまでの自らの作った世界で遊ぶという存在とは百八十度変わつた存在として、創造した配下達にも大混乱を巻き起こすのだが、【竜王】は知る由もない。

さて、座標をミスつたとはいゝ、咄嗟に制御を行つた事で周囲への被害を出す事なく無事学校の校庭へと着地を果たした。

突如として現れた巨大な竜に学校は一瞬静まり返った後、大騒動になつた。

『いかんなー、とりあえず申し訳ないが記憶を弄つて忘れてもらつべきか……？』

そう考へてゐる時だつた。

「おい、そこのドラゴン！私と戦え！！」

そんな声が響いたのは。

そちらに視線を向ければ黒髪の長髪の女性が一人。目を爛々と輝かせ、そこに立つていた。

その人としては大きな力を持つ相手の戦意に【竜王】が困惑する内に、彼女は突っ込んで來た……。

【SIDE：直江大和】

「あー、始めちゃつたよ」

姉さんと呼ぶ（血の繋がりはない）川神百代の姿を彼は距離を置いて見ていた。

周囲には風間ファミリーと呼ぶ仲の良いグループの面々がおり、向こうではF組とは何かと対立する事の多いS組の面々が観戦している。相变らずというべきか九鬼英雄が高らかに双方の激戦ぶりを評価している。

「で、どうします？学園長」

大和は何時の間にか傍へとやつて来た川神鉄心へと声をかけた。

「ふむ」

と長い顎鬚を撫でながらも、鉄心は止めにかかる様子はない。その様子が大和には少々意外だった。
何しろ、姉は、川神百代は今でこそ眼前の爺様の言つ事を聞いて抑えてはいるものの、かつてはかなりの乱暴者でもあった。それ故に私心での戦いを禁じられているはずだ。

「止めないんですね？」

だから、思わず、といった感じで口からそんな感想が洩れた。

「うむ、相手の方が遙かに格上のようじゃしの……この際、思い切り発散させても良からつて」

その言葉に、大和の傍にいて聞こえていた風間ファミリー。川神百代の実力を熟知している風間翔一、川神一子や椎名京、クリスや黛由紀子、更にこのような時だからだろう、5組の方からクリスの傍に来ていたマルギッテまでが一斉に鉄心に視線を向けた。
「気付かぬか？普段の百代が本氣を出して戦うならば周囲にも影響が出る」

言われて全員が気持ち良さそうに戦う百代へと視線を向いた。

「壊れて、ない？」

あれだけ百代が荒れ狂いながら、グラウンドは平穏を保ち、巨竜

はその反撃の素振りを見せようとしてしない。

そう、まるで……。

「駄々をこねる赤ん坊をあやしておるようなものじや。……あれは人ではどうにもならぬ力の化身よ」

鉄心は伊達に川神院を統べていなし、といふべきか。

普段のエロジジイつぶりとは異なる武人としての姿を見せていた。

事実、彼の目から見ても、竜の底が見えなかつた。

広大な海へと柄杓片手で汲み尽くさんと挑む、そんな感覚があつた。

「……世の中、上には上がつてこりより……あんなのいたんだな

顔に縦線を走らせながら、大和がぼそり、と彼らの常識の外に、これまであんな生物がいるとは思つていなかつた彼らは黙つて頷いたのだつた。

どうやら、どうやつて変身してゐのか分からぬ変態ロボットなどが傍で暮らしていたりする彼らにとつても、眼前の光景はなかなか非常識な光景だつたようだ。

結果から言えば、川神百代は負けた。
正確には相手にさえされなかつた。

疲れ果て、それでも膝を屈しない彼女に穏やかな視線を向けたままだつた【竜王】はやがて翼を広げ、再び空へと舞い上がり、やがてその姿は空中に波紋を描き、消えた。

その姿を見送り、獰猛な笑みを浮かべつつ、川神百代が宣言するかのように言つた。

「見ていろ、何時か貴様に一撃を入れてやる……」

いや、さすがに無理があるでしょ。

誰もが内心でそう突っ込んだが、さすがにそれを口にする度胸はなかつたのだった。

異伝20・真剣で私に恋しなさい！（後書き）

アニメ化されてたので書き上げたお話です
いやあ、こここの所アニメなんかや小説も仕入れ、録画はましても田を通す機会がないんですよね……

……ゲーム風のモンハン世界

よく似ていて、けれど違う世界なんて世界だと何編になるかな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1692u/>

飛竜になりました！

2011年11月12日03時48分発行